
蒼の魔法士

仕神けいた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

蒼の魔法士

【Nコード】

N6825D

【作者名】

仕神けいた

【あらすじ】

科学が発達し、人々の生活の支柱となった世界の中でも、魔法、そして異形なるものは存在していた。この世ならぬ存在――アヤカシを呼び寄せてしまう体質のユウは、兄の紹介で東条ミサギの仕事を手伝うことになり……。

プロローグ

「誰かが、助けを叫んでる……」

傘をさした少年は空を仰いだ。

ひどくつよい雨だった。

まだ昼中なのに夜のように暗い。

人通りもまばらな街の歩道を、傘もささずに歩く人影はぼんやりと白く浮き上がり目立っていた。小さなそれは、やがて白い包みを抱えた少年になった。

少年の荷物にしてはかなり大きい。時々、重たそうに、しかし大事そうに抱え直している。

今の天気が彼の心境を表しているのだとすれば、まさに暗鬱として重たいものだった。

少年の黒い髪は雨に濡れ、その先から雫がとめどなく滴っていた。少年だけでなく、抱えていた布の包みまでも濡れであった。

突如、少年はバランスを崩してその場に倒れる。

慌てて起き上がり、包みを確かめた。布包みの隙間から、少年よりもさらに小さな子供の寝顔が覗く。

青い髪、小さな小さな、子供。

雨であるにも、少年の顔が暗いにもかかわらず、子供の表情は安らかだった。

その顔を見て、少年の表情は少しだけ和らぐ。

ふらふらの足でどうにか立ち上がり、やさしく抱きなおす。と、雨が止んだ。

いや。少年が顔を上げると、そこに、真っ黒な傘をさした少年が立っていた。

「……誰？」

「助けを叫んだのは、君か」

それが、はじまりだった。

第1話 蒼い髪の少年

ここ数日の雨が嘘だったようなよく晴れた昼下がり。この天気は、今週いっぱい続くらしい。

最新のコンピュータOS「CIMS^{シムス}」に、仮想ディスプレイと音声認識・再生機能、そしてAIがついてから久しく。

新たに加わった天気予測システムも、今月で的中率九七パーセントになった。

まだ試験段階だが、この調子ならば本格始動ももうすぐだろう。

今後のCIMSの開発で、GPSを利用した防犯システムを導入の予定とニュースは言っていた。

時刻はもうすぐ十三時となり、昼食を終えたOLやビジネスマンは職場へと戻る。

既に、というより、休む間もなく取引先を駆け巡る人もいた。

人がときに波となり、渦となる大都市の風景は、もう何年も変わらない。

そんな中、一つのビルが突然爆発した。

直後、立て続けに隣接するビルが次々と爆発していった。

いや、これは爆発というより、まるで巨大な何かが通り過ぎるようだ。横一直線に建物がどんどん破壊されていく。

五十階以上あるビルの上部が破壊されたことにより、ガラスや壁

の破片は人々を襲う脅威の雨となる。

それは驚く暇を与えず、頭上から容赦なく降りかり、街を地獄と変えた。

一体、何が起きたのか。

恐怖に悲鳴し、逃げ惑う人々。

冷静に判断できる者など、そこに誰一人いるはずがなかった。

蒼い一閃が宙に舞うまでは。

閃きは、少女を背負った少年になった。

年の頃は十二、三歳ほど。

透き通るような、それでいて深い蒼の髪。どんな宝石よりも美しく強い光を秘めた、紫の瞳。細く白い四肢は、黒く身に纏った衣装によって一層引き立っている。

背負われた少女は気絶しているのだろう、ぴくりとも動かない。

少年は、割れた窓と窓のわずかなコンクリート壁を蹴って、ビルとビルの大きな谷間を上昇していく。

その先に、爆発で破壊された巨大なビルの塊が迫ってきた。

少年は左の親指、人差し指、中指を揃えて空に向ける。
銃を構えるのに似た格好だ。

「空・封・凝！」

力強く発せられた言葉が、塊を破片の雨とともに消し去る。と、

次の瞬間、少年の姿はどこかへ消えてしまった。

ほんの数分の出来事。

だが、恐怖と騒ぎは人々に混乱を招くだけで、何が起こったのかなど知る由もなかった。

ただ、途中から恐怖の雨がぴたりとやんだことで、様子を伺おうと空を仰いだ幾人かは見たであろう。

消え行く少年の目の前に、一瞬だけ現れた異形のものを。



上空を、禍々しい咆哮が轟いた。

それは人々に見えず聞こえず、しかし、確かに存在しており、逃げる少年を追いかけていた。

「ヤバイヤバイヤバいて！ このアヤカシ強い！」

少年——ユウは、巨大な尾長鳥を模した真っ黒な化け物をアヤカシと呼んで見上げた。

>i229—27<

ユウが作り上げた結界の中は、先ほどの、いわゆる現実世界の街並みそのままであった。

だが、そこは人工的な異世界。

結界で隔たれている以上、ユウと背負われた少女以外に人間はおらず、いくら建物が壊れようとも現実世界に影響はない。

もちろん、両世界から互いを見ることはできない。

アヤカシは何度も尾をあちこちのビルに叩きつけ、羽を飛ばしては暴れまわっている。

いくら破壊しようともかまわないのだが、ユウの結界維持がそろそろ限界であった。

「せめて、この子が目を覚ましてくれたらな……」

ユウに背負われた少女は、成り行きで助けるハメになったのだが、このままでは彼女も自分自身も余計な危険に晒すだけだ。

「そもそも、何で都会にあんなばかでかいやつがいるんだよう！
聞いてないよー！」

彼女を庇って攻撃を避けてはいるが、

「うわっ!？」

小石を踏んで足を滑らせた。

アヤカシはその隙を逃さずユウめがけて尾を振り下ろす。

体勢を崩したユウは、片手をつき両足で尾に反撃する。

どおん、と空気が重く響き渡る。

体術を心得ているにしても、この威力は凄いものだった。

アヤカシが、跳ね返された尾によろけている間にユウは地を蹴って、宙へと逃げる。

そしてその瞬間、ユウは見た。

ちょうど、アヤカシを上から見下ろす高さに達したとき。

硬く黒い羽に覆われ、背の真ん中に埋もれるギョロリとした赤い目玉。

真っ赤な血を固めたようなそれは、見紛うはずもない、アヤカシの弱点ともいえる彼らの核——『目』だ。

「ラッキー、見つけた！」

ユウが、チョーカーにつけた十字架を取る。それは一瞬で背丈ほどもある錫杖へ変化した。

ユウの殺気を感じたのか、羽を激しく動かし、再び攻撃をするアヤカシ。

空中で身動きとれないユウは、錫杖を操り、飛んでくる攻撃をすべてはねのける。

はねのけた攻撃の分、結界に次々と亀裂が走る。

それに構わず、ユウは流線型をしたビルの屋上へ着地し、なだらかな下り坂の屋根を勢いよく走る。

屋上の端で強く踏み切って空に飛び出した。

先には、迎え撃つかのように咆哮するアヤカシ。

その上空を飛び越え、アヤカシの背をめがけて錫杖を投げる。

寸分変わらず、真っ赤な点に突き立った瞬間、アヤカシの体は塵の塊に変わった。

断末魔さえなく、風に吹かれて空気に溶けるように消えていく。

「――」

それを最後に、ユウの意識も落下とともに遠退いていった。

■ ■ ■

辺りは真っ暗だった。

純粹な黒ではなく、すべてを混ぜ込んだような、黒。これが闇なのだろう。

遠く、波の音が聞こえる。

黒い空の彼方、鐘の音が降り注ぐ。

「誰かいらないの!？」

心細くなり、ユウは辺りを見回しながら叫んだ。

しかし、叫んでも、手を伸ばしても、声も手も届かない。

ただ、闇に飲み込まれていく。

ユウは闇に溶けていく――

「……どこだ、ここ？」

目が覚めたら、そこに白い天井があった。

起き上がってみると、かなり立派な部屋だとわかる。

横に大きな本棚と勉強机。扉まで続く壁は白く遠く、部屋全体はかなり広い。

「えっと、確か――」

ユウが覚えていたのは、中空でアヤカシの最期を見たところまでで、そこから先は記憶が途切れている。

「そうだ！ ボク――」

「気がついたかい？」

「え？」

振り返ると、いつの間に入ってきたのか、サングラスをかけた黒ずくめの太夫が立っていた。

「で、でかつ……！」

天井に届きそうな長身。ユウの二倍三倍はありそうだ。

別段、がっしりとした体格でもなく、しかし、ひよろひよろに痩せこけているわけでもない。茶髪の大男は、後ろを振り返って頭を下げる。

「……？」

「やあ、どこか痛むところはあるかい？」

大男の後ろから、小柄な女性が現れた。

第2話 東条ミサギ

腰までなびく銀の髪に、すらりと細く白い肌の女性だった。

白のスーツから覗く赤い立襟のブラウスが印象に残る。背の高さはユウよりも頭二つほど高いが、大男のせいで小柄に見えてしまう。

そして、ユウが最も惹かれたのは彼女の瞳であった。

漆黒を閉じ込めたような黒い瞳を見ただけで、力が抜けるような、脳が溶けてしまいそうになる。

それがまたなんとも心地よい感覚であった。

「……誰？」

ユウの問いに、女性はクス……と笑みを見せる。

しかし、その口から出てきたのは、

「ごあいさつだね。三日三晩昏睡状態になってた人の、起きた第一声がそれ？」

「……は？」

「気を失って、危うく墜落死しそうな君を、間一髪のところ助けたうえ、手厚く看病までしたっていうのに、命の恩人への一言目がそれか、と訊いたんだ」

先程までの笑顔はどこへやら、驚くほどの早口でまくし立てられ

た。

美しい顔は口の端を引き下げ、不機嫌な表情になってユウを見下ろす。

「なるほど、それが君流の礼儀というわけ。なんとも世間知らずな礼儀だ。君なんて助けなければよかったよ。ああ、僕はなんて愚かなことをしてしまったんだろう。ねえ、木戸？」

女性は、後ろに控えた大男を木戸と呼んで見上げた。木戸は、頷くこともなくただ立っている。

口に針ありとはこのことである。初対面にもかかわらず棘のある言葉。見た目の美しさと違い、かなり性悪だった。

「んなっ……」

ユウはカッとなって真っ向から女性を睨みあげる。

「こ、こっちだって助けてと頼んだ覚えはないよっ！　ボク一人でだって――！」

「ついでに気の荒い子のようにだ」

女性はチョン、とユウの額を小突く。

「うわっ!？」

軽く押されただけなのに、強い力で押されたようにベッドに戻された。

「怪我人は怪我人らしく、静かにしていたまえ」

「あ、あんた何者なんだ？　どうして……痛っ！」

体に激痛が走る。

彼女の言っていることは本当らしく、ユウは背中を押さえてうずくまる。

包帯を巻かれている感触から、意外にも深手を負っているようだ。

「あ、あんた……ど……して……ボクを助けたんだ？」

「僕は世間知らずに答える気はないよ。相手に名を訊くならまずは自分から名乗るんだね」

つんとそっぽを向く彼女。

正論なのだが態度がムカつく。

ユウは落ち着こうと、うずくまったまま深呼吸を繰り返す。それでも、ようやく搾り出した声は震えが止まらなかった。

「……春日、ユウです……助けてくれてありがとう……ごさい、ます」

「なんだ、ちゃんと言えるじゃないか」

彼女はにっこり微笑んだ。

手のひらを返したような笑顔で、ぼんぼんと頭を撫でる。

正しいことができた子供を褒めるような仕草だ。

彼女はユウの正面に立ち、優雅な礼をする。

「それじゃ、はじめまして」

やわらかい微笑みは、彼女の持つ美貌をさらに強調させた。

口の悪さすら忘れ、ユウも顔を赤くしながら礼をする。

「は、はじめまして」

「僕の名は東条ミサギ。君のことは君の兄上から聞いて知っているよ、春日ユウ君」

「……………え？」

名を聞くなり、ユウは目を見開いた。

「え、東じよ、え？ 兄ちゃ……じゃ、え？」

確か、兄に言われて会いに行く人の名も東条ミサギであったと思
い出す。その人は男だと聞いていた。

目の前にいるのは、どう見ても女性なのだが――。

「お……おお男……？」

「僕は、自分が女だなんて言った覚えはないよ。あと、人を指差さ
ない」

東条は悪びれもせずに言う。

「あの……じゃあ、あなたが兄ちゃんの言ってたポリハムの――」
周りの空気が、一気に五度下がったように冷えわたる。

「ユウ君」

「!？」

ユウの背中がぞくりとする。

いつの間に近付いたのか、東条の顔が触れるほど間近にあった。

温かい指先がユウの頬を伝う。

「その通り名はヒスイだけが使っていい呼び名だ。彼は親友だからね。だけれどね、だからといって君が使っていいという道理はこれっぽっちもないよ」

瞳が凍るように冷たい。

しかも、瞳を見ているだけなのに、全ての感覚がどんどん失われていく気がする。

>i233—27<

遠くから、朧げに声が聞こえる。

「——聞いているかい、ユウ君？」

「は……はいっ！」

突然、耳元から声がして、ユウは驚いて跳び上がった。

「うん、よし」

ぱっと、無邪気な笑顔になる東条。

「それじゃ、自己紹介はこのくらいにして、ひとつ、問題に入ろうか」

「問題？」

ユウは、何のことかと首を傾げた。

「君の連れていた女の子だよ。どうして背負っていたんだい？」
言われて、自分が背負っていた少女の事を初めて思い出した。

「あ、あの子はなんていうか……成り行き……です。道を訊いてたらアヤカシに襲われて……気絶しちゃったから背負って逃げてただけど……」

ちらと東条を窺うと、彼はじいっとユウを睨んでいる。

「ほ、本当です！」

「君、自分がどういう立場の人間か理解できてないんだね」

「そんなことは——」

「ない、とユウは否定しようとするが、言葉の最後はうまく出なかった。」

「君みたいな子が無防備に街中をあるくなんてどうかしてるよ」

「だって、昼間っからアヤカシが出るなんて初めてで——！」

「理由になってない」

ミサギはぴしゃりと言う。

「君のように、無意識にアヤカシを呼び寄せてしまう人間が街を歩くだけで、どれだけの無関係な人を巻き込むことか」

ユウは落ち込みかけるが、ふと目を見開く。

「なんで……わかるんですか？　ボクがアヤカシを寄せる体質だつて」

「言ったろう、君の兄上から話を聞いたって。君は、もっと周りに気を配った方がいい」

ユウはゆっくり視線を落とす。そして、さすがのように東条を見上げる。

「ボクは、この体質を治したいんです。あなたに会えばなんとかするって兄ちゃんが言っていました。お願いします、助けてください」

ユウはベッド上で頭を下げた。

「……僕に君の体質を治せと？」

東条はキョトンとする。

「はい。東条さんは——」

「ミサギでいいよ」

「え、えと、ミサギさんは、ボクと同じ体質だって聞きました。兄ちゃんも、このことはミサギさんに頼めって。手紙、預かってます」

そう言って、懷からヨレヨレの手紙を差し出した。

アヤカシとの戦いで、激しく動き回ったせいだろう。

しわだらけの手紙を、ミサギは開封する。

ミサギの視線は文面をなぞるでもなく、一点を凝視していた。

「……ふうん、ヒスイは相変わらずみたいだね」

しばらく手紙を見つめた後、彼はそう言った。

「？」

「君も見る？」

手紙の内容はいたってシンプルだった。と、いうより、一言だけだった。

『お好み焼きがヒロシマ風になってるから、うまいオオサカ風にしておほし』

「に、兄ちゃん……？」

意味不明かつ兄らしい内容に、ユウの手紙を持つ手はなんともいえない震え方をする。

「ものの例えを食べ物とするクセは相変わらずだ」

ミサギには兄の言わんとしたことがわかったのか、納得するように手紙を懐へしまう。

「なるほどわかった。ヒスイもこう言っていることだし、君をしばらく僕のところで預かることにするよ」

「えっ！？ その手紙の意味わかるんですか！？」

「君はわからないのかい？ 『君の願いを聞き届けろ』という意味のほかはどう読めるっていうんだい？」

「いや、どうってか……」

さすがは兄の友人というか、類は友を呼ぶというか。ミサギが不思議そうな顔をしているのを見て、ユウは思わずため息をついた。

「あ、そうそう。話は変わるけど」

思い出したように、手の平を打つミサギ。

「君が助けたっていう女の子のことだけど、気をつけた方がいいよ」

「どうしてです？」

ユウは小首をかしげる。

「狙われているみたいだから。女は怖いねえ」

「???」

助けた少女がなぜ自分を狙うのか、ユウは考えたがわからないという表情を見せる。

ミサギは腕を組んで、それを面白そうに眺める。

「まあ、今日のところはなんとか帰ってもらったけど。なかなか諦めが悪くてね。苦労したよ」

ミサギのいうことは、いちいち遠回しでわかりづらい。ユウは眉間にしわを寄せる。

「あの、よくわからないんですが？」

「眠っている君を長いこと見つめていたなあ」

「へ？」

「彼女、君が好みのタイプのようだね。ずっとここにいると言って君から離れなかったものだから、半ば強引に帰ってもらったよ」

「は、はあ……」

「さて、すぐに君の部屋を用意しなきゃいけないね。しばらくはここで待っていて」

そう言い残して、ミサギは出て行った。

彼のいなくなった後、彼女の謎の行動についてしばらく考え込んだが、ユウにはどうしてもわからなかった。

「うー……女ってよくわからん」

「一目惚れ、というものではないでしょうか？」

「うわびっくりした！」

文字通り飛び上がって驚くユウ。

壁際に、木戸が立っていたのだ。てっきりミサギについていったのかと思われた彼は、それだけ言うと、深く頭を下げて部屋から出て行った。

「い……いたんだ……」

本当に驚いた。

その後しばらく。ユウは木戸の言葉と意図せず驚かされた行動に、止まらない心臓のときどきを味わうこととなった。

第3話 狭間の世界

ユウはいつもと違う寝心地に一晩中違和感を強いられ、ロクに眠れぬまま朝を迎えた。

まだ夜も明けていない。

寢床から出て、場所を確認するように、何度も首を左右に回してあたりを見る。

「……そっか。昨日からミサギさんの家に……」

広すぎる部屋。広すぎるベッド。

しかも隣の扉を開けば、専用の風呂やらクローゼットやらがある。

昔、部屋の広さを表すのに『畳』という単位があった。

タタミという敷物が何枚敷けるかによって、一畳、二畳としたりらしい。

さらに、二畳分を一坪という単位で呼ばれていたようだが、今ではほとんど使われていない。

タタミという一つの文化が消えた結果であった。

「絶対に、ありえん広さだこの屋敷。この部屋だけで六十畳はありそうだし……」

実際に兄からタタミを見せられ、教えられたユウは、その方法で広さを表すことが習慣付いていた。

そして、昨日見たこの屋敷の外観を思い出す。

古びたレンガが積み上げられてできた壁、ひびの入った窓に、屋敷を隠すように生い茂る蔦。

これで森の中に建っていれば、小さい頃に絵本で読んだ幽霊屋敷そのまんまだ。

ユウは、その雰囲気が特に苦手だった。暗く深い森というのが、方向オンチのユウには怖くて仕方がないのだ。

幸運なのかどうかかわらないが、この屋敷はだっ広い平原の中にある。

しかし、これもある意味不思議な光景だった。

この国のどこに、こんな広大な土地があったのだろう。

だっ広い野原があって、青い空があり、地平線が延々と続いている。それ以外は、文字通り何もない。

「ここ、本当にニッポンなのか……？」

ユウは、くもり一つないきれいな窓から外を覗く。

じっとしていると、くしゃみが出てしまった。パジャマから、いつもの服へと早々に着替える。

と、小さな、音がした。

ミシリ、という何かがきしんだ音。

「？」

ズボンに足を通したとき、床が不自然に盛り上がっている事に気付いた。

> i 2 6 1 — 2 7 <

「なんだ……これ？」

近付き、覗き込んでみる。

めりっみしい……ずっ……どおおおおおおん

奇妙な床の盛り上がりは、巨大な爆発音を立てて吹っ飛んだ。

「ぬああ!？」

ユウは爆風で転げ飛ぶ。

そして、煙立ち上る中からは黒い影が姿を見せた。

「みっちゃん参上ナリよう！」

「！」

噴煙止まぬ中から現れたのは、金髪をポニーテールにしたサングラス男だった。

「ミッサギどーん♪ おヌシの好っきな肉まん買ってきたなりい」
♪

「うわっわ!？」

間一髪、ユウは身を反らして迫りくる頭突きを避けた。

その反動で、再び仰向きにこける。

金髪の男は、肉まんの袋を片手で振り回しながら部屋中を走り回る。

「んぬっ、おぬしは？」

散々走り回った後、男は転げたユウに初めて気が付く。

いきなり床を突き破って出てきた変な……いや、ものすごく不審な男に応える必要はないのだが、ユウは思わず応えてしまった。

「ボ、ボクは春日ユウだけど」

「春日？ て、ことは……フム！」

きつと気のせいだろう、金髪頭の真上に豆電球が出現し、ピコンと光った。

「ヌシ！ 新しくここに来た魔法士かいな♪」

「は？」

「いーやいやいや♪ みなまで言うなや。そうかそうか」
さつきから何を言っているのかわからない。

ユウが目を瞬かせていると、金髪サングラスはその手をいきなり引っ張った。

「わたっ!？ ちょ、何なん……うわあっ!」

バランスを崩して、彼の開けた穴に落っこちた。暗く、狭い床下へ頭をぶつけるはずだったのだが――ぶつからない。

思わず閉じた目をうつすらと開く。

「……え？ えっ!？」

ぽっかり空いた床の下には、あるべきものがなかった。

一瞬、無重力感がユウの体を包む。そして、急に襲ってくる引力と抵抗の風。

それを知るのに、ユウの脳では数秒を要した。

「お、落ち……!？ 落ちつつて落ちあああああああ!」

ユウは底なしの闇の中を落ちていた。

上を見ると、落ちてきた穴がなくなっている。

「な、何でええええええええ!？」

「お♪ ヌシも来たか!」

人を穴に引っ張りこんだ張本人も一緒に落下していた。
空中を掻き泳ぎながらユウに近づく。

「『来たか』じゃ……なく、て! どっどっこっ……こっこっ?」

落下の影響か、ものすごい風圧でうまく声が出せない。

「おお! この状況で冷静なるそのツツコミ! なかなかやるのう
!」

そう言って親指を立ててニカリと笑う。

「つ、突っ込んでる、わけじゃ……!」

「そういや、どこぞの童話にもこれと似たようなのがあったのう」
金髪サングラスは懐かしげに明後日の方を見上げる。

ユウはその顔をじっと見た。

――何でだ!? 何であのサングラスはこの風圧ではずれたりしないんだっ!?

ユウの感じる限り、今までにない速度で落ちているにも関わらず、まったくずれさえない男のサングラス。

そこだけ冷静にツツコンでいる場合ではないとわかってはいたが、つい考えてしまう。

男は、ユウの視線に気付いたのか、赤く染めた頬にてをあてて恥ずかしげな仕草を見せる。

その動作だけでもドン引きなのに、付け加えたセリフが、

「いややわぁ、そげん見つめんどいて。みっちゃん、恥ずかしい」

「……キシヨい」

ユウは器用に空中を泳いで男から遠ざかった。

その間にもどんどん下へ落ちていく。

「なあなあ、この状況のついでじゃ、自己紹介でもしよやあ♪」

「何がついで……つか、なんで二階部屋の床下が底なしなんだ?」

男はその言葉に衝撃を受けた顔をする。

「ぬあっ！　よいツツコミ！！　おヌシさてはプロを目指しちやる
やろ♪」

「いや、だから突っ込んでない……って、もうどーでもいいや」

「わっしはなあ、みっちゃんっちゆうんよ」

ユウが諦めたところでみっちゃんは一人、自己紹介を始めた。



果てない闇に落ちてから、もうどれくらい経っているのだろう。

暗闇とは不思議なもので、真っ黒というわけではなく、黒い中にも、
何かが蠢いて絶えず形を変えている。

それは、鼓動のように見え、水の流れのように見え、生きている
もののように見えた。

そして、もっと不思議なのが、そんな闇の中だというのに、自分
の四肢がはつきり見えるということ。まるで、上から明かりでも照
らされているように、手に手を翳すと影ができた。

もちろん、上を見上げてもそんなものはない。それは彼——みっ
ちゃんも同様だった。

そういえば、彼はさっきから余裕でもあるのか妙な動きばかりし
ている。そのどれもがユウに向けられていて、笑わかそうとしてい
るのがかろうじてわかる。

もしかしたら、この余裕は彼が行き着く先を知っているからなのかもしれない。

「あー!」

「……なんじゃーい？」

返事が聞こえるのに多少の時間がかかっている。

距離では、両手を伸ばしたほどにしか離れていないのだが、落下の影響から起こる風で会話に支障を来しているのだ。

それでも、叫べば声は届くようで、返事はちゃんと返ってきた。

「この動きがおもろかったんかー？」

「いや、全然」

ユウ即答。

みっちゃんが喋ってる途中からユウは答えていた。

みっちゃんはショッキングな顔になったが、すぐまた表情が元に戻る。対して気にしていないようだ。

「そんなことより、ここって、どこに続いでるんですかー？」

「さーあ、ワシにもわっからんぜよー」

「……………」

会話が終了してしまった。

てっきり知っているものとたかを括っていたユウは、頭の中が真っ白になる。

その後が続く疑問があったのに、それらは全て彼方へと消え去ってしまった。

ユウに新たな不安が沸き上がる。

このまま落ちていったらどうなってしまうのだろうか。

通常なら、着地すべき地面があるが、仮にあったとしても、この高さ、速さで落下すれば即死だ。

では、地面がなかったら。

延々と落ち続けるだけで終わりが無い。身動きが取れないうえに何かと厄介な状況に陥ることは必至だ。

どちらにしても解決しないことは同じだった。

ユウがあれこれ考え込んでいると、今度は、みっちゃんの方から質問が飛んできた。

「なあ、ユウどんはどうしてミサギ殿のどこへ来たんじゃあ？」
「え？」

聞こえなかったのではない。確認の意味で、だ。

「ミサギ殿のどこへ来たのはなんでじゃあ？」

「なんでって……」

答えようとして、少し考えた。アヤカシを呼び寄せる体質のことを話したところで、恐らく理解されないだろう。今までがそうだったから。

アヤカシが他の人には見えないのだから当然だろう。

ユウは少し考えてから答えた。

「勉強だよ。ボクの兄ちゃんがミサギさんと友人で、紹介されてきたんだ」

半分嘘で半分本当。ありきたりな理由を装う。

だが、みっちゃんを驚きの表情にするのには十分すぎたようだ。

——何かまズったかな

ユウは緊張した。

「ゆ、ゆゆ……友人やと……!?!」

「……?」

「あ、あああのミサギ殿に友人がおるやって!?!」

「? 普通でしょ、友達なんて……?」

今度はユウの方が驚く。

「ふ、ふつつーに友人なんて! 天変地異もええところやわ! あの

……あのミサギ殿にとつとともともと……」

「『友達』?」

「ありえへん!!」

頭を抱えて叫ぶ。

「なんで!?! ユウどんの兄ちゃんってどんな大物やねん! あの唯我独尊、傍若無人、恐怖の大王すら平伏すといわれる……食物連鎖ならぬ人類のピラミッドの頂点におるようなミサギ殿と対等地位かいなー!!」

ものすごい言われようである。

「ミサギさんと友達だっていうのは、そんなすごいことなの？」
「すごいどころか未知の世界やで！ ヌシ、大丈夫か……！？」

「……何が？」

「いくら紹介とはいえ、あのミサギ殿の下で魔法士の修業なんぞ？
死ぬより辛いで絶対」

「マホウシ？」

ユウの脳裏に疑問譜が浮かぶ。

いつの間にか、落下速度は緩やかになり、辺りもずいぶん明るくなっていた。

「何じゃ、おヌシ魔法士を知らなかったんか？」

「だ、だから勉強しにきたんじゃないか」

「あー、そうじゃったな」

自分の額を軽く打ち、

「ならば！ 魔法士に関しちゃペカイチの拙者がお教えしんぜよう
！」

大見得を切った。

「で……魔法士って何？」

「うぬっ！ 簡単にいえば魔法使いやがな」

「ま、魔法使い……」

予想はしていたが、やはりその通りの答えだった。

ユウの冷めた目を見たみっちゃんは、

「あ、おヌシ馬鹿にしちよるじゃろ。ヌシの考えとるのんよりちい
ゝつとばかしすごいやつなんやで」

そう言われても、にわかには信じ難かった。

魔法使いなんていう類は儀式やら生け贄やら呪文やらで、魔力が
どうのこうのというやつだとユウは記憶していた。

昔話で聞けば楽しい夢物語だが、現実のものとなると話は別だ。

「すごいって、例えばどんなことができるの？」

「そうさな、一瞬で空間の移動ができる！」

「そんなの、今の科学技術でだってできるじゃん」

「あれは空間の移動に時間がかかるじゃろーが。魔法士は一瞬やで
♪」

「ふーん」

「水金地火木——つまり、この世界にある物質の属性魔法ができる
！ 攻撃も回復も、使う者の意志一つでな！」

「昔話にでてくる、お菓子や鳥を出したりするのは？」

「んー、そりゃ召喚の類やな。それは無理なんよ」

「召喚って、昔話でよくあるやつじゃん。精霊を召喚とか。なんで
できないんだ？」

「うぬ。ミサギ殿がいうには、ここが閉じた世界やからじゃと」

「ふーん……………なんでもできるってイメージだったんだけど、結

構不便なんだな」

「いやあ、世の中そう都合良くはなからう」

「つか、全然すごかない。余計胡散臭い」

「ぬっ！ まだ言うか。じゃあ聞くが、ヌシの結界やアヤカシを封じるあの力はなんじゃっつーの。あれこそ魔法じゃろ」

「あれは一種の気合いだって兄ちゃんが——って、なんでそんなこと知ってるんだ！？ 初対面のはずっ……」

「ふっふっふっ、わっしは世界の全てを知ってるんじゃないあ」

「うわっ、ストーカー！？」

ユウは鳥肌の立った両腕をさする。

「ちなみに、ヌシがさっき嘘こいたのもお見通しやで。勉強やのうて、アヤカシを寄せる体質を治したいんやろ？」

「うっ……」

「ぬっふっふ。情報通のみっちゃんをあまくみちゃあかんぜよ」

みっちゃんはユウとは別の方を指差して言った。

「……どこ向いて言ってるの？」

「んあ、ちいと読者の皆様にの」

「は？」

「そりゃええとして、そろそろここを出ようや」

みっちゃんは、のろのろとゆっくりと落ちる体をバレリーナのように回転させながら言った。もう落下とはいえないくらいの速度に

なっている。

「あんたっ——！」

言おうとして、言葉を飲み込む。

平静を装って無理に笑顔をつくるが、怒りによる体の震えが止まらない。

「こっ……どこにいくか知らないって言ったくせに……！」

みっちゃんは、サングラス越しに困った顔をする。

「ああ、わっしじゃここがどこかわからんし、抜け出すのは無理なんよ。じゃけんど、どうやったら出られるかって方法はわかるわな」
「？」

みっちゃんはピツと立てた指でビシッとユウを指す。

「これはおヌシの役目なんじゃ！」

「はあ!？」

「あのな、ここは——この屋敷は魔力に反応するんだで。

確かに、床ぶち抜いてしもうたんはワシやけんども、ワシにゃあ魔力がないけん、こげんことできんのよ。なら、考えられるんは、ヌシの魔力に反応しちまったってこった」

「じゃ……これ、ボクのせい？」

「多分、全部がつてわけじゃないんよ。フツーなら、どこか別の部屋に出るんじやが。屋敷がちと悩んだようじやのう」

「ここ、どう考えても部屋じゃないんだけど。ゆっくりだけど、まだ落ち続けてるし。どうやったらこっから——」

遮って、みっちゃんと言り返す。

「じゃから、それはおヌシがやるんじゃない！」

「……ボクは、こんなところ出る方法なんて……」

半ばふてくされるように視線を落とすと、みっちゃんはあからさまにため息をつく。

「ほれ、そういうこと言うからここから出られんのやで？　ヌシはどうすれば良いか、もうわかつとるはずじゃ。わからんなんて言うとは出られんで」

言われて、ユウは肩越しに周りの闇を見る。

落ちているとわかるのも、重力が働いているからだ。他には何もない。

何もない闇は、それだけで人の不安を煽り、心にたやすく入り込む。

突然、心臓がドクンと大きく脈打つのを感じた。

遙か彼方から、黒い波が音を立てて押し寄せてくるのがわかる。じわじわと、確実にユウを飲み込もうと見つめている。

「う……うあ……」

闇の中から無数の手が姿を現した。いや、波に見えたのがこの無数の手だったのだ。

ユウを捕まえようと誘い、惑わし、蠢いている。

「や、だ……く、くるな……！ ……いやだあっ！」

突然、風が下から吹き出した。かと思うと、今度は引っ張られるように二人の体は落下する。声をあげる間もなくズシリと体が重くなり、目の前が真っ白になった。

「――？」

目が、白くなった視野に慣れて視界が広がっていくと、そこには草原が横たわっていた。

なだらかな丘が続き、その遙か先に青い空とつながって、どこまでも横へ伸びている。

ぐるうりと見回し、背後にたたずむ屋敷を確認した。

「外……だ」

のそりと立ち上がり、屋敷を見上げようとして体を少し仰け反らせ、

「ふふぎゅ」

「……？」

みっちゃんを踏んづけた。
しかも頭を。

気付いてすぐ足を退けたが、彼の後頭部に、土と草でできた足跡がくっきりと残った。

「ご、ごめんみっちゃん」

「へい……平気じゃて」

サングラスをかけ直しながら、みっちゃんもユウに並んで立つ。

ユウを見てにかりと笑う。

「な？　ちゃんと出れたじゃろ？」

「うん」

ユウは頭がボーっとしたように返事をする。その頭を、みっちゃんの大きな手がくしやりと撫でる。

「ヌシが『出たい』と思えばいつでも好きなところへ行けるんよ。初めてやったから混乱させちゃったのう。すまんこって」

「いいよ。ボクも悪かったみたいだし」

「むう……」

ユウはパツと顔を上げる。彼の真似をしてにかりと笑い、

「少しだけおもしろかった。危ない目には何度か遭ったことあるけど、あんなの初めてだったよ」

「うぬっ！　この屋敷は、魔力を完全にコントロールできるようなれば、すごい便利なんじゃ！」

「ボクの力って魔力だったんだ。」

ユウが感心すると、みっちゃんがチツチツと指を振る。

「いんやゝ、それだけじゃないかもよん。確認できてるんが魔力だけやけん。人にはいろんな力があるからのう♪」

ヌシも、これからミサギ殿がいろいろ教えてくれると思うけんが、んばってみい。もちろん、ワツシも手伝うよってに。

改めて、よろしゅうな、ユウ殿」

「うん。よろしく」

二人してにかりと笑う。

空は、今まさに朝の目覚めを知らせるように眩しい陽の光を覗かせる。

「日の出？ あんまり時間経ってなかったのか……」

「うぬ。ああいう空間は時間っちゅう定義がないからの」

「……ふうん」

みっちゃんの言うことがいまいち理解できていないユウ。

「さて、と。ミサギ殿に会いに行くかのう。これを渡さにゃ」

みっちゃんは肉まんの紙袋を持ち上げ、ユウもそのあとをついて歩き出した。

第4話 ライセンス

ミサギの執務室は屋敷の一階、玄関から入って左側の廊下沿いにあった。

執務室といっても、置いてあるものはいくらもない。室内の中央には、ソファーとテーブルが一セット、一番奥の窓際には仕事用の机が一つあるだけだ。

広い室内には、大きな窓から差し込む朝の光で満ちている。どちらかといえば、応接室のような雰囲気醸し出している。

中央のソファーの横にみっちゃんとユウが立ち、前にミサギが立っている。

彼は露骨に嫌な顔をしていた。

特に、みっちゃんをじろりと睨む。それはまさしく鬼の形相であった。

その無言の圧力を知ってか知らいでか、みっちゃんは人の怒りをあおるように踊りながらちよろちよろしている。

くるりと優雅に回転し、ミサギの前でピタリと止まると、あの紙袋の中から箱を取り出し、その中身を見せた。

「お待ちたっせーナリよミサギ殿♪ ご所望の肉まん買ってきたぜよ〜」

「肉まん？　僕はそんなの頼んだ覚えはないよ」

機嫌の悪い声でつつけんどんに言う。

「えー？　ウツソこきいや。この前言うとったやん、『肉まん食べたいな』って。やからわっしはミサギ殿の好きなホーライの肉まんをわざわざ買うてきたのに」

「……………ああ、あの時か」

ミサギは、数日前の仕事先で見た中華飯店のコマーシャルを思い出す。

新作のシュウマイを大きく取り上げて宣伝していて、思わず『たまにはああいうのも食べてみたいな』と漏らしたものだ。

「確か、それ言ったら君はいきなり飛び出していったね」

「そやそや。わっしががんばって買いに行ったんやで。飲茶で美味いいうたらホーライ♪　ホーライいうたら肉まん♪　うんまいで」

「僕は肉まんなんて一言も言ってないよ。大体、シュウマイのCMを見ていたのに、なんで連想の途中から肉まんになるんだい？」

「ぬがあっ!？」

みっちゃんは、背景に稲妻を走らせショックを受ける。ここで初めて勘違いに気付いたようだ。

「しっ……しまった……!　わっしとしたことが、ホ、ホーライ言うたら肉まんちゅう心理が……ぬああ!　大失敗やあ!」

「阿呆」

「そ、そんなっ……！ わ、わっし三日三晩走り通してやっと戻ってきてん………ミ、ミサギどん、そう言わずにできたて直送をお熱いうちに食うてゝな」

出された肉まんをじっと見る。

一箱五個入りの特製肉まんは、三日三晩走ったというみっちゃん
の運動能力についていけず、無惨に潰れて偏っていた。

しかも保存状態が悪かったせいか、かびのようなものがちらほら
とある。

「明らかに人が食べられない状態になっている肉まんのどこをどう
みたらできたてあつあつに見ることができるとい？ 僕はいらな
い。不満なら君が食べれば？」

「そこを何とかかんとか♪」

「……しつこい」

ミサギは、原形を留めていない肉まんを、有無を言わずみっち
やんの口に全て突っ込んだ。

「木戸」

「はい」

ミサギの後方に控えていた木戸が、みっちゃんの両脇を抱えて速
やかに出て行った。

この二人に命令文は不要らしい。

だが、一部始終を見ていたユウの関心はそこになく、木戸がずつとミサギの後ろにいたということに驚いていた。

——全っ然気が付かなかった……

「それで、ユウ君のこれからのことなんだけど」

「うえ、はい？」

「君には僕の仕事を手伝ってもらおうよ」

「……はい？」

「仕事だよ仕事。働かざる者食うべからずってね。僕の仕事、アヤカシ関連の事件を調査する事務所をしているんだけど、全国あちこちで事件は発生しているっていうのに、僕のような仕事をしている人なんてほんの数人しかいないんだ。僕の管轄は西日本なんだけど、一人だどうしても無理な仕事もいくつかあって、試しにバイトを雇ってもみたんだ。けれど、これがまた気の利かない自己中心なバイトばかりでね。人の言ったことしかやらない、できないで、仕事を教わろうともしない。そんなのばっかじゃこっちも教える気がなくなるよね。しかも、結局はアヤカシが見えないものだから木戸にもできる雑用しかやらないし。まったく、人間はごまんといるのに、どうして揃いも揃ってアヤカシが見えないんだろうねえ？ 鈍感にも程があるよね。」

ああ、そうそう。僕の仕事を手伝うって話だったね。

さっきも言った通り、僕も西日本をあちこち回って結構忙しいんだ。君が手伝ってくれると助かるんだけど」

ユウの返事は間を置いて出てきたのに対し、ミサギは間を置かず、しかも弾丸のように早口なものだから、ユウは相づちすら打てなか

った。

「あ、あのー……それじゃ、ボクのアヤカシのは？」

「ああ……それは追い追いやっていくさ。君は『妖魅呼』だから今すぐどうこうできるわけじゃないんだ。しばらくはこれを持っているといい」

ミサギは紫の石を渡した。

「失くしたりしないようにね。アヤカシ除けのお守りだから」

「……あの、ヨミコって？」

「知らないなら自分で調べる。他人に頼ってばかりだと馬鹿になるよ。自分の力でやるべき時と頼るべき時を誤らないようにね」

「なっ!？」

「僕はヒスイのように優しくないから。じゃあ頑張って調べてね。あ、資料室は部屋を出て一番奥だから」

ミサギは仕事に向かうと言って出て行ってしまった。
残されたユウは、誰もいなくなったのを確認して、ドンと床を踏みならした。

「……っだあの態度！ 何が頑張れだ腹立つー！」

「まあまあ、怒っても始まらんぜよ。わっしが教えたるけん」

「うわあっ!？」

ポンとユウの肩に手を置いたのは、追い出されたはずのみっちゃんだった。

「ミサギ殿は、仕事仕事で忙しいからのう。代わりに、ワシがわからんところを説明しちやるがな」

「あ、ありがとう」

「んゝ、どっから話せば良いかのうゝ」

「あ、あのさ、みっちゃん。ヨミコって――」
言いかけて、やめる。

先ほどのミサギの言葉を思い出す。

「――やっぱ、いいや」

「？」

「資料室にいけばわかる、かな？」

「おう♪ わかるもわからないも、あの部屋行けば全部わかるぜよ！
ただ、迷子にならんように気をつけなあかんがな」

「？ とにかく行ってみよう」

「ちよい待ち！」

部屋を出ようとするユウをみっちゃんが止める。

「ヌシはこの先ミサギ殿の手伝いをするんやろ？」

「うん」

「やったら先にライセンス取りに行かな。仕事はそれができないとできへんのよ」

「ライセンス？」

「まあ、行ってみりゃわかるわな。早速出かけるぜよっ♪」

「でも、ボク、十三歳なんだけど大丈夫？　ライセンス取れるの？」

不安げに見上げるユウを、みっちゃんはにかりと笑って答えた。

「大丈夫じゃて。魔法士のライセンスつつのは年齢関係ないねん。

パソカ持っていきやすぐ済むよって。さ、行こうや」

「う、うん」

二人は屋敷の外に出た。

中は驚くほど広いのに、外見は呆れるほど小さかった。五分もあれば一周できそうだ。そして反対側を見ると大平原が広がっている。

みっちゃんは三日三晩かけてきたが、自分はどのくらいで行けるだろうかと、ユウは考えるだけで疲れが溜まりそうになった。

しかしみっちゃんは、屋敷の裏へと向かう。

「あれ？　どこ行くの？」

敷地の外に出るなら、広い平原を突っ切るはずなのだが、見向きもしない。

「どこって、魔法省じゃよ。こっちゃんが近道じゃけえ」

「『こっちゃんが』って、そっちは屋敷の裏じゃん」

「いやいやいや、こっちゃんが近いし楽なんよ。まあ、面白いけえ。ほれ、来てみ」

指差された方向には、古びた木製の扉があった。

屋敷の壁に絡み付くツタに隠れるように、ひっそりと佇んでいる。金のドアノブに銅のドアノック、そして、鍵穴は銀でできていた。

「ドア？」

「いやいや、扉じゃ」

「だから、ドア……」

不思議そうな表情で言うユウに、みっちゃんは頭を抱えて何やら唸っている。どうやら説明の言葉を探しているようだ。

「うーんと……な、このドアの名前が『トビラ』なんじゃよ」

「はあ？」

「えっと、物にはたいてい名前がついちよるやろ？ お主は『春日ユウ』、ミサギどんは『東条ミサギ』。それと同じ要領で、こいつにも名前がつけられちよるんじゃ」

「ちなみにみっちゃんは何んていう名前？」

「みっちゃんはみっちゃんぜよ♪」

「……………」

さりげなくも自分の名前は言わないみっちゃん。

「……で、その名前が『トビラ』？」

「そうなんじゃよ♪」

満足そうに頷かれても——と、ユウは思いつつトビラを眺める。

「それで？ このトビラの向こうがいきなり魔法省とかいうところになるわけ？」

「惜しい！ 正しくは、このトビラが魔法省のある場所と空間がつながるんじゃないよ」

「へえ〜」

「ぬ！ 信じとらんな？」

「信じてないわけじゃないよ。こんな便利なのがあるのに、どうしてみっちゃんは使わなかったのかなあって思ってる」

「言うたやん、わっし魔力ないって」

「じゃ、これ、魔力使って空間移動するの？」

「そのたうり♪ 百聞は一系に聞かずじゃ。魔法省へレッツらゴー！」

これもボケなのか、ことわざに微妙な間違いがあった。が、ユウ

は完全に無視していた。

「ボク、魔法省の場所なんて知らないよ？」

「行き先はわっしがわかつちよるから、ヌシはなんもせんで大丈夫じゃ」

「……そんなんでいいの？」

「おう♪ ミサギ殿の時もそうじゃったけんのう」

鍵もないのにみっちゃんはトビラを大きく開ける。

トビラの向こうに景色はなく、銀色と虹の色が混ざり合い、波のように揺らめいている。

「ほな、行こか」

「う、うん」

みっちゃんはユウの手を引いて中へ入って行く。ユウも、せいいつぱい吸い込んだ息を止めて頭から中へ入った。



その場所は、混雑こそしていないが、それなりににぎやかなロビーだった。

四方をコンクリートに囲まれ、ユウから見て右に総合受付と書かれた吊り看板と大きな掲示板、そして左に出入り口があった。

魔法省という名から想像していたのとは違い、事務的な役所を思わせる雰囲気。マントや杖を持ってる者など一人もいない。当たり前のようにスーツ姿や、今風の服装で目の前を通り過ぎていく。

「……なんか、想像してたのと違う」

「うん？ どうした、ユウどん？ 受付行くで」

「っていうかさ……どうしてトイレとつながってるわけ？ しかも掃除用具入れから」

ユウの言うとおり、屋敷のトビラをくぐって出た場所はなんと魔法省の女子トイレ。

しかも、外から鍵がかけられている掃除用具入れに二人同時に押し込まれた状態になったものだから、抜け出すのに悪戦苦闘したのだ。

「すごいじゃろ♪ しかも出かけ先からは屋敷に帰れぬ特典付きじゃ！」

それは特典とはいわない。そう突っ込みたいところを、ユウはぐっとこらえた。

言ったら負けという強迫観念が、なぜだかユウを支配していた。

「……不便だね」

なんとか無難な言葉を探して返す。

「まあ、細かいことは気にせんという。それよりパソカちゃんを持つてるか？」

「あるよ。肌身離さず持つてるんだから」
言われて、ユウは透明なカードを取り出す。

パソカは、個人の生体情報や現住所など、持ち主に関する情報がすべて一枚に記録されているカードで、身分証明に用いられることが多い。

透明プラスチックに似ていて、ユウが表面を親指でなでると白く変色し、名前と顔写真が現れた。

ユウは、それを確認し、『魔法士ライセンス』と書かれた受付に行く。

迎えたのは優しそうな女性で、ユウにっこり微笑みながら挨拶した。

「こんにちは……あら、あなた新顔さんね。ライセンスの取得ですか？」

「しゅ、取得です」

「でしたら、番号札をお渡ししますので、呼ばれましたら左奥の査定室へお越し下さい。手続き後、二日ほどでライセンスを郵送いたします」

「は、はあ」

「のう、この子のライセンス、できれば今日中にほしいんやけど、何とか頼めるかのう？」

後ろから、みっちゃんが付け足すように言った。

女性は、番号札を差し出す手を止め、ちょっと驚いたように目を見開く。

「まあ、これはこれは……………今日中にでございますね、かしこまりました。わたくしから担当に伝えておきますので、このまま左の奥にある査定室へお進み下さい」

受付に言われ、二人は示された部屋に向かった。

「なんでみっちゃんを見て、あの受付の人は今日中にできるって言ったんだ？」

「そりゃ、ワツシはミサギどんとよくここへ来ておるからのう。常連じゃよ、常連」

「ふーん」

「ほれ、ユウどん。早く査定室へゴーぜよ！」

「査定……」

「そんな固くならんでええで。本人確認するだけやけん」
みっちゃんが卒先して査定室に向かう。ユウは少々うつむき気味でその後を歩く。

「別に固くなってないけど……」

「どしたん？　ここへ来てから、なんか元気がないのう。笑いすぎて腹が痛いかな？」

「それは絶対違うけど……」

査定室の前で立ち止まり、すれ違った女性二人をチラと窺う。

相手も同じようにユウを振り返り、二人でヒソヒソ何か言っているようだ。

他にも、ユウを見た人は皆、物珍しそうにユウを振り返っていた。

「やっぱり、変なんだろうなあ」
前髪をつまんでポツリと言う。

「……なんじゃあ」
みっちゃんはおもむろにユウの真ん前に立ち、両手で頭をくしゃくしゃに撫でる。

「痛てってて！ 痛いみっちゃん！」

「んむ、びゅーちほー♪」

「何するんだよ！？ 結構気にしてんだぞ、この髪の色！」
かき回された髪を慌てて直す。

「ヌシが気にしすぎるからじゃ。こんなキレイな青い色、染めたつて出せぬぞえ！」

「けど、みんな指差して何か言ってるし……」

「そんなの、ヌシの髪がキレイやから妬んどるんじゃないよ。いちいちマイナス方面に気にしておったらキリがないで」

「気にするなって言われても、そう簡単には――。今までも、この髪の色でいろいろ言われてきたんだし。だから帽子被ったりしてただけど……」

「帽子なんかいらんよ。髪の色が他と違うからって、恥じることはなかとよ。世の中変わった髪はぎょうさんおるんやから」

「それじゃあ、ボク不良みたいじゃんか……」

「じゃ、わっしも不良じゃのう♪」

「？」

「わっしの方が定番色！ パツキン！ 一緒につるむでユウどん！」

「……ぷふっ」

みっちゃんのおかしな仕草を見て、ユウは思わず笑っていた。

「なんかみっちゃん見てたら自分が馬鹿らしくなってきた」

「じゃろ♪」

「ごめん、ありがとう」

ユウは笑う。みっちゃんも一緒になって笑っていると、査定室のドアが開き、白衣を着た女性が怒りの表情を覗かせた。

「そこ！ 廊下では静かに！ あなたが春日さん？ 査定室に早く入ってください！」

「はっはい！」

中に入ってユウが感じたのは、病院の雰囲気と薬の匂いだった。

窓が一つもない部屋は、白を基調とした設備が揃い、清潔感を漂わせている。それが余計に病院を思わせ、ユウは独特の緊張に囚われた。

「それじゃ、本人確認するわね。パソカは持ってきてる？」

みっちゃんと同じことを言われ、ユウはカードを担当者に渡す。コンピュータの画面にかざすと、立体映像がユウの前に表れた。姿形、大きさまでユウそのものであり、なんとユウの声でしゃべり始めた。

「このカードは、確かに春日ユウ本人のものです」

「すげー……最新のコンピュータだ」

「魔法士ライセンスの登録を開始します。

生体登録番号、完了。

氏名、完了。

誕生日、完了……」

ユウの姿で経過を報告するコンピュータ。関心の眼差しで眺めているユウに、査定の女性も嬉しそうに言う。

「そーなのよう。つい先日、やっと導入してもらったの。個人の登録だけでなく、魔力を数値化して調べられるようになったのよ！

『シルシェ』シリーズ、知ってるかしら？ 今、すごい勢いで普及してるOSなんだけど、もーかわいくってかわいくって――」

「ライセンス登録にエラーが発生しました」

登録作業をしていたコンピュータが担当者の言葉を遮る。
立体映像は隣に画面を表示させ、エラー内容を知らせた。

「あら、性別が登録されてないみたいね」

「あ、それは――」

「大丈夫よ、気にしないで。たまにあることだから。この際、カードに性別を登録しておきましょうか」

「あの、でも……」

「そこに手を置いて、指紋照合してくれる？」

言って、査定担当者はDNA情報を取り出すため、機械を操作し始める。

「これでは結果を登録すれば――え？」

彼女が声を上げたのは、再びエラーの文字が表示されたためであった。

最新鋭の機器が最高のプログラムを搭載し、今まで連続してエラーなど起こしたことのなかった機械が、今、起こしたのだ。

――やっぱり……

ユウはため息をつく。

「うそ！？ DNA鑑定してエラーになるなんて……！ もう一回――」

しかし、何度やっても結果は変わらず、立体映像のユウはエラーを訴え続けた。

機械とにらめっこし、ついに肩をがっくり落として査定担当者はユウを見た。

「DNA情報に異常があるわけではない、機械も正常、なのにエラーが出るなんて前代未聞だわ。ニューハーフだってもとの性別まで調べることができるのに………君、一体何者？ 人間よね？」

頭のとっぺんからつま先まで、食い入るように見つめる査定官。

「おねーさん、いくら何でも傷つきます……」

「あ、あら、ごめんなさいね。悪気はないのよ。でも困ったわね、ライセンス登録には必要なのよ」

彼女は腕を組んで考え込む。

「――手間がかかるけど、手動でやってみるわ」

「大丈夫か？」

様子を見ていたみっちゃんが、心配そうに尋ねる。とは言っても、サングラス越しではわかりづらいが。

査定担当者は、自信を持って言葉を返す。

「おまかせください。ものの三十分もあればできます。それより、こんな不思議な現象、査定官である前に研究開発者としての意欲が掻き立てられるわ！」

ユウを研究者特有の輝く目で見ると、両手の指が怪しさを増して動

く。

「私のプライドにかけて、ぜったいにこの原因を突き止めるわよ！」

「な、なんかコワイんですが……」

「それじゃあ、私はちよつと登録をしてくるわ。その間にこの適性検査をしててちょうだい。終わったら呼んでね」

査定担当の女性は、電子ボードを手渡して、隣の部屋へと姿を消した。

「て、テスト？」

「テストじゃの。ユウどんファイトじゃ♪」

「……聞いてない」

ユウは難しそうな問題を眺め、意を決したかのようにペンを取った。



三十分が経ち、登録を済ませた査定官は、電子ボードを受け取ってかなり苦い顔をした。

「……正直、ここまで酷いとは予想できなかったわ………まあ、魔力は規定値の倍以上だから大丈夫よね。これでライセンス登録は完了よ。はい」

パソカを受け取り、ユウは深く礼をする。

「どうも、ありがとうございます。お手数をおかけしました」

「まあ、礼儀正しいのね。そういう子は好きよ」

「すまぬのう、今日中なんて無理言っでもて」

「気にしないでください。きっと、東条様のお言い付けなのでしょう？」

「むう……」

「でしたら、私どもはそれに全力でお応えするだけです。

春日さん、あのエラーの件は本当にごめんなさいね」

「いえ、気にしないでください。パソカつくるときもそうでしたし」

「今度、ヒマな時でいいからまた来てちょうだいね。私、あのエラーの原因を突き止めたいの」

再び研究者の顔になる彼女。

「か、考えときます……」

もう一度、礼をしてユウとみっちゃんは査定室を後にする。

ユウは、ロビーへ出た途端、口をへの字に曲げた。

「みっちゃん、どこが簡単な会員登録だよ！ あの適性検査、めちやくちや難しかったじゃん！」

「そうか？ でも、適性検査で、簡単なものしか出てへんはずやで。ワシもやってみたことあるが、全部基礎やったし。まあ、わしは魔力がないんでライセンスは取れんかったけどな」

聞いて、ユウはがっくりと床に手をつく。

「……兄ちゃん、基礎だとか言ってデタラメばっか言いやがって……」

査定の結果は総合的にみると合格だったが、適性検査の正解は三分の一にも満たず、本当にぎりぎりであった。その後、魔力の測定で補うような形でライセンス取得に至ったのだ。

「さあて、次は——」

突如、地響きのような低い唸り声が聞こえてきた。

「ななな何じゃあ？」

みっちゃんが驚いていると、ユウの体勢が崩れ、床に倒れ込んでしまった。

「どうした、ユウどん!？」

みっちゃんが慌ててユウを起こす。すると、微かに口が動くのが見えた。

「え、何じゃ？ ……『お』？」

——お腹すいた

「……………」

思わず、みっちゃんも脱力してその場に座り込んでしまった。

「いきなりへたり込むから、何があったかと思えば……」

「うう……」

「ユウどん、朝メシ食っとらんのか？」

うつ伏せのまま、こくりと頷く。

みっちゃんは、屋敷での朝を思い出し、「あっ」と気まずそうに頭をかいた。

「そーいや、朝、ワッシのせいで食いっぱぐれたんか」

「うゝ……」

「……うっし！ ワシが飯を奢っちゃろう」

「ホント？ やった！」

言うや否や、ユウは飛び上がる。勢いよく立ち上がり、みっちゃんの手を引っ張る。

「早く早く！ 行こうよみっちゃん！」

「ゲンキなやつちゃのゝ」

ぐいぐいとユウに引っ張られながら、みっちゃんは近くのレストランに向かうことにした。

第5話 封印

暖かい陽気が空を青く澄み渡らせる。やわらかな木漏れ日の間から、小鳥がさえずり、屋敷に静かな昼下がりを知らせていた。

その一室、電灯のない資料室は天井に近いところで窓を並べ、陽の光を少しずつ注ぐ。

妖魅呼【ヨミコ】——『黄泉子』トモ云イ、妖シキ存在ヲ纏イシ稀ナル質有リ。

ソノ者、異ナル力ヲ持チテ魔ニ近シ瞳ヲ授リ給フ

「とも、い……しき、を、いし、なる……ええー……っと」
苦しそうに声を絞り出したところで、漢字のふりがなが浮き出てくるわけでもなし。

資料室に連なる本の山、その頂で、ユウは呻きながら本とにらめっこをしていた。

読もうとしていた本の、最初の一文字から苦戦しているのである。

広大というより巨大なという言葉が見合う資料室は、驚くことに、見渡す限り本で埋め尽くされている。文字通り足の踏み場がない。しかも、そのすべてが一般的な電子書籍ではなく、紙製の書籍である。

ペーパーレスが社会に浸透して久しい今の世で、これほど大量の紙製書籍が見れるのは、恐らくここを置いて他にないだろう。第一、電子書籍ならこんな部屋など不要なのだ。

そして紙製書籍には、それゆえの不便な点があった。

例えばふりがな。

電子書籍であれば、ボタン一つで表示されるルビ機能も紙製書籍には存在しない。

当然、ページ送りも自分の手で行う。しかし、ところどころ紙同士がくっついていて、無理に剥がそうとすると破れてしまいそうで、触るのも恐ろしいほどであった。

そして、紙に書かれた文字というのは、紙とともに劣化していくもので、かすれていたり、反対に滲んでしまっていたりして、文字を認識できないものもあった。

今では考えられないトラブルが、紙製の本には満載であった。

「うぬあー！」

あまりの不便さに、ユウは爆発の声を上げた。

「漢字読めん！ 紙が破れそう！ なんで紙の本はこんな不便なんだよおう！」

すると、それを嘲笑うかのように本の山脈は雪崩を起こし、ユウを呑み込んで下敷きにした。

「——おい、ユウどーん？」

みっちゃんがユウを呼びにきたのは、ちょうどその時だった。

声はこだまし、どこかで本の山が崩れる音がする。

しばらく、動きがないか耳を澄ませていたが、気配がしないことを確認すると、鼻息を荒くして顔をしかめる。

「ここでもないか……」

みっちゃんは本の山に登り、どっかと座り込む。

「いっくら、この屋敷が特殊空間じゃというてものお……………人捜しにこの広さはちと不便じゃのー」

海原を思わせる空間を眺めて愚痴をこぼしていると、

「……………むう……………」

足下から声が聞こえてきた。

「ん？」

「ど……………ちょ、どい、て……………潰れ……………」

「ぬうわわわ！？ おったんかい？」

慌てて山を下りると、その頂からによつきりと手が生える。

「っふうー、死ぬかと思った。本が急に崩れてきてさ……………見てよコレ、すげータンコブができてるし」

指を差した後頭部には、なるほど見ただけでわかるくらい大きな腫れがある。ユウは涙をこらえながら、分厚い本を手にする。

角が全て金属で補強されている。

「くっそー。よりによってこんな本が……」

「まあ、そりゃ……災難やったのお。そりゃそうと、ミサギどんが捜しとったで。ユウどんの修行見てくれるってよ」

「ミサギさんが？」

みっちゃんに教えられ、ユウはミサギの待つ屋敷の庭へと向かった。



今日も変わらず、視界いっぱい広がる草原。これが庭だという。

初めて見たときは、日本にこんな場所があったのかと目を丸くしたものだ。あり得ない広さに驚きもしたが、空間の歪みを利用した庭だとわかった時になんとか納得した。

屋敷を出て、小高い丘に向かって少し歩くと、ミサギが背を向ける形で座っていた。

「あの、ミサギさん」

「やあ」

ユウに気づいて、ミサギはゆっくりと振り向く。伸びを一つして立ち上がり、

「今日は運良く休みが取れてね。明日からはまた数日屋敷には帰らないから、今のうちに教えられるだけ教えようと思って。君にも早く仕事を手伝ってほしいしね」

そう言いながらあくびをした。

「は、はい。え、あれ？ ミサギさん、寝てないんですか？」

「ん？ どうして？」

「だって、ずっと働き詰めじゃないですか。休めるときに休まない
と、体に疲れが溜まっちゃいますよ」

ユウの言葉にミサギはにっこりと笑った。

「ありがとう、大丈夫だよ。君の言うとおり、休めるときに休んで
いるから。君の方こそやるべき事はやっているかい？」

逆に訊ねられて、ギクリとわかりやすい表情を返すユウ。ミサギ
もすぐに悟って、笑顔から一転、眉を寄せる。

「まさか、また終わらなかったのかい？」

「え、えーとー……」

ユウの視線が犬かき並の早さで泳いでく。

やるべき事。

ライセンスを取りに魔法省へ行ったときにもらった紙のことであ
る。

あの日、やっとのことでライセンスを取得し、ご飯を食べに行こ
うとしたユウとみっちゃん。その矢先、二人は偶然にもある人物を
見つけてしまった。

「あっ……!?!」

「……つとおー!? ミツミミミサギどん!?」

月の光のような煌めきを含んだ銀髪、見覚えのあるスーツに赤い縦襟のブラウス。そして、サングラスをしても抑え切れない美しい顔立ち。そう、二人揃って驚く先にミサギが歩いていたのだ。

向こうも二人に気づいたらしく、一瞬だけきょとんとしたが、何故不満か、表情と歩き方が急に荒くなって二人に向かってくる。

サングラスのおかげで、人々の視線を釘付けするに留まっていたが、これが素顔だったら、うっとりとした表情の溶けた屍の山が築かれていただろう。

「あわわわっ! ユウどん逃げるで!」

「え? あ?」

みっちゃん、ユウを連れて再び魔法省の中へ逃げようとしたが、一足遅かった。

「どうしてんなところにいるんだい?」

怒り混じりの声に呼び止められる。

「ああ……いや、ちょっと登録に手こずって――」

「ライセンスなんて、五分もあれば取れただろう? 君がいながら――」

「ミサギさん、ライセンス取れましたー」

みっちゃんとミサギの間を、ユウが割って入る。

ユウの笑顔に、ミサギも笑顔で返す。

「そう、よかった」

ミサギの怒りをみっちゃんから逸らすつもりでいたのだが、それが裏目に出たと気づいた頃には、後悔しても遅かった。

「それじゃあ、今度は屋敷で魔法士の基礎をやるっか」

「はい！」

「はいこれ」

渡されたのは、幾重にも折りたたまれた紙。

「わあ、紙だ。すっげー……っげ？」

広げてみると、中は真っ黒に塗りつぶされていた。

「そこに書いてあるメニューをこなしていくんだよ」

「へっ？」

よくよく見ると、黒く塗りつぶされていると思ったのは、米粒よりも小さな文字だった。目を細めたり、紙を遠ざけて解読を試みるユウ。

「よ、読めない……………ミサギさん、これ一体何年先まで書いてあるんですか？」

「一日分だよ」

「いっ!？」

危うくメモを破ってしまうところだった。

「今日はこの半分でもいいから、屋敷に戻ってちゃんとやっておくんだよ」

「え、えと…………？」

「じゃ、僕は仕事の途中だから。早くこのメニューに慣れて、僕の仕事を手伝ってくれよ。それから君はちゃんとユウ君についてあげるんだよ、わかったね」

「は、はひっ!」

みっちゃんが背筋を伸ばして敬礼する。

「それじゃーね、ユウ君」

「あの一!？」

にこやかに去り行くミサギに、空腹も忘れ棒立ちのユウ。

そして――。

ロビーの雑踏に紛れ、これからの地獄のような厳しいメニューだけがむなしく残された。

「あ、あのメニューを一日でこなすってのは、ちょっと……」
「そんなに大変なものかい？」

ユウにとって問題だったのは、字が小さい事ではない。視力は、人並みはずれて良い方なので、書かれた文字は一字一句はつきりと見えるのだ。

そうではなく、メニューに漢字が含まれていて、トレーニング内容そのものがわからなかったのだ。

みっちゃんに頼んで、なんとか解読して内容を把握するのに丸一週間、トレーニングメニューを半分こなすのに、さらに一週間を要していた。

「僕がやっていた基礎トレーニングなんだが」

ミサギは不思議そうに訊ねる。

その時点で、彼が一般人の身体能力を遥かに上回っている事に本人は気づいているかどうか。

懐に入れていた基礎メニューを改めて眺めるユウ。

「多分、これ全部を一日で終わらせられるの、ミサギさんだけだと思えます……」

「そうかい？ 慣れれば誰でもできると思うんだけど」

——その前に死ぬ気がする

心で呟く。ユウは表情に出てしまわないうちに、話を切り替える。

「ミサギさん、修行を見てくれるって聞いたんですけど、何をするんですか？」

「ああ、そうそう。忘れるところだったね」

ミサギは思い出すように立ち上がる。

「君は、アヤカシと戦う時、いつもどうしてる？」

「えと、弱点の『目』を攻撃して……」

「そのまま破壊しているんだろう？ あれじゃあ、アヤカシを倒した事にはならないんだよ」

「えっ？」

「目に砂をかけられた程度、と言えばわかるかい。これじゃあ、アヤカシは復活して君を狙ってくる。しかも、仲間を呼び寄せるから倒しても意味がない上、君は自分で窮地に追いやっているようなものなんだよ。身に覚えがあるんじゃないかな」

「……そういえば、最初は一匹だけだったのに、どんどん増えてったような……」

クスリと笑ってミサギは腕を組む。

「アヤカシの『目』っていうのはね……」

ミサギの、口もとに手を当てる姿が妖艶に、表情が冴えるほど冷酷に、瞳が全てを魅了する魔眼に変わる。雰囲気吞まれたか、ユ

ウは身震いした。

「弱点なんかじゃないんだよ。『目』は『芽』であり『召』でもある。破壊をすればたちまち自らの新たな命を生み、生まれた命は同じ命を喚ぶ。

アヤカシの『目』は、破壊するんじゃなく、封印してしまうのがいいんだよ」

「封印って、そんな簡単に――」

ユウの言葉を遮るようにミサギは両の手のひらを広げる。

淡紅色の花びらがふわりと現れ、ひとひら舞い上がり、それは幾十、幾千、万の吹雪となってミサギとユウを取り巻いて吹き乱れる。

薄紅色に染められた世界。

美しさに魅入っていると、ユウの後ろから木戸が現れた。何かを手をしている。

「？」

彼は黙って、手のものをユウに見せた。それは、黒い麻紐で二重に結んだアヤカシの『目』だ。

真っ赤な目は、もがくようにギョロギョロしながらも、なぜかアヤカシの形を成そうとしない。どうやら、麻紐がアヤカシの復元を抑えつけているようだ。

「離れていてください」

木戸はミサギの立つ向こう側へ行き、結んでいた麻紐を解いた。

その瞬間に『目』は黒い煙を吹き上げ、木戸が高く放った先で黒い翼が広がる。

「あれはボクが街で倒した……！」

ユウが街中で塵にしたはずのアヤカシは、その目の前で再び黒く、今度はミサギの前に立ちはだかった。

木戸が、アヤカシとミサギの邪魔にならぬよう、ユウのもとへ戻ってくる。

「ユウ君、これから見せる封印の技を、魔力の流れを意識して見てごらん」

周囲では花びらを打ち消さんと死を呼ぶ風が吹き荒れているというのに、ミサギの声はユウの耳まで響いた。

「え？ 魔力の流れ？」

ユウは声を大にして訊ねる。

「今までアヤカシと戦ってきたならわかるはずだよ」

声が答えるのとほぼ同時、見覚えのある凶鳥が雄叫びを上げる。

「空・封・凝」

ミサギの澄んだ声が花びらを操る。ユウが創ったものより大きく、より強力な結界が辺りを包み込んだ。

アヤカシは、ユウを追いつめていったようにミサギへも攻撃を繰

り出してきた。ミサギがステップを踏みながら軽く避けていく。と、黒い羽の攻撃が突然止んだ。

ミサギが見上げると、鋭いくちばしが襲ってくる。

「ミサギさっ……！」

思わず叫んだ瞬間、アヤカシが勢いに制動をかけた。必死に羽ばたいて、ミサギに当たる寸前でくちばしを止める。

ミサギは身じろぎもしない。

何が起きたのか。

固唾を呑んで見ていると、急に寒気が大地を走り抜け、ユウの体は総毛立った。

「な、何……？」

「ユウ君、これが封印するということだよ」

ユウを一瞥したミサギの顔を、悪魔と見るか天使と見るか。空気まで凍らせる瞳が見た者の脳に恐怖を呼び起こさせ、うっとりするような美しさがそれを忘れさせた。

ゆっくりとミサギの手が上がる。その周りに、幾つもの花びらが淡い光を含んでどんどん手のひらへ集結し光度を増す。

煌めく光がアヤカシへ向いた。

刹那、無数の光条となって走り、核である『目』を貫く。

『目』が光に貫かれるたび、アヤカシは痙攣を起こし、やがて塵となって紅い正体を露にした。

ミサギは残る左手で印を結ぶ。それは黒い麻紐に変化して『目』に絡み付き、あっという間に封印してしまった。

『目』を回収し、ミサギは満足そうにユウのもとへ歩いてくる。

「ちゃんと見てたかい？」

ユウは声も出ず、ただコクコクと頷く。

「魔力の使い道は定められたものじゃないからね。使う人間の意思一つで何にでもなる。君が今までアヤカシに向けていた破壊の力を、意識してちょっと別の方向へ変えてごらん」

「は、はあ」

生返事をするユウに、ミサギは封印したアヤカシを放る。

「うわあっ……とと？」

落としそうになりながらも『目』を受け取るユウ。

「しばらくはそれで練習してごらん」

「ええっ！？　だってこれ、アヤカシ……」

「ゴムボールなんぞで練習しようとも思ったのかい？　基礎さえ満足にやっていないのだから、否が応でも実践で身につけてもらおうよ」

「う……」

ミサギはにこりと笑ったが、ユウにはそれが悪魔の微笑みに見えた。背筋にぞくつとするものを感じ、無意識に震え上がった。

と、その隙を突かれ、アヤカシを封じている紐をミサギに解かれてしまった。

「あ、あああああ!？」

ユウが叫ぶも、時既に遅し。無情にも、ミサギは木戸と屋敷へ戻ろうとしている。

「課題だよ。そのアヤカシを自力で封じてごらん。それができるようになったら仕事を手伝ってもらうからね」

「そんないきなり!？」

「ああ、ついでに言っておくけど、今日は誰も助けは来ないよ。封印できなきゃ、君の方がアヤカシに返り討ちにされてしまうから気をつけてね」

「か、返り討ちって……封印できなかったら……」

「うん、死ぬね。だから死ぬ気でがんばってね」

「そ、そそそな――」

拒否権のない課題に、途方もくれる暇もないままアヤカシの攻撃が始まる。

一人残されたユウは、慌てて距離を取り、アヤカシをキツと睨む。

「これでザコってか……？」

チョーカーから外して身長ほどに大きくした十字架を構える。

「やるよ！ やればいいんだろっ、封印！」

ユウは十字架を握りしめ、自身に気を込めるが如く凶鳥に吠えた。

第6話 魔眼

空が白んできた。

夜の支配が終わり、見渡す限りの平原は太陽とともに目覚めの時を迎えようとしていた。

じわじわと鮮やかな緑へと変わりゆく地平線。

そこに、ぽつんと影一つ。

それは力もなく手をだらりとさせて立っている。

水晶のような紫の瞳は、上空にある漆黒の凶鳥へと向かっていた。影の数倍はある凶鳥は、無数の翼を呼吸に合わせて上下させ、地上の様子を伺っている。

震えながら。

怯えるように。

影は全く動こうとしない。

いや、瞳が挑発的に光った。

途端、本能よりも早く、凶鳥は影に向かって急下降する。

対して、陽に照らされた影は、鮮やかな蒼い髪を揺らして空中へと躍り出た。



「――お、ユウどん見ーっけ♪」

無限の草原に茂る一本の木。

その頂上付近の細い枝には、みっちゃんがナマケモノのようにぶら下がっている。

どうやらユウを探しているようだ。

ユウは、最初の頃より遥かにレベルの高そうなアヤカシを封じよう迎え撃つところであった。が、足を滑らせたらしい。勢いよく仰向けに転倒した。

その隙を突いて、アヤカシは火の玉を連続で放ち、あっという間に一面火の海と化した。

「……………」

火球によって起きた爆発の瞬間、なんとなく、ユウの断末魔が聞こえたような気がした。

一部始終に、ぽかんと口を開けてアホ面をするみっちゃん。

「……ぬぁっ!?!」

ハッと我に返り、慌てて木を降りる。みっちゃんはユウのもとへと走った。

「ユウどーん! おーい、ユウどーん! だーいじょーぶかあー!」
「?」

ユウのいた場所は、もうもうと煙が立ち込めるものの、火はほとんど収まっていた。

だが、そこにはユウどころかアヤカシの姿さえない。

辺りに陰になるものなどないのに、一体どこへ消えたのか。

「あれ、みっちゃん？」

突然、足元から声が湧いてきた。

視線を落とすと、焼けた土に体を埋もれさせたユウがいた。

「うおう！？ ユウどん、なして埋まっとるがな？」

「あつはは……」

みっちゃんの手を借りて、ユウはようやく地面から抜け出す。

「あの爆発から逃げ切れないと思ったからさ、みっちゃんの十八番を真似してみたんだ」

「おお、なるほど♪」

みっちゃんは納得して掌を打つが、真似して、そう簡単にできるものなのか。

そもそも、あれほどすごい爆発を土に埋まっただけで避けられるものなのか。

クレーターができた辺り一帯を見て、ユウは事の大きさに驚く。

「おお、派手にやった」

「ユウどん、アヤカシはどうなったん？」

「うん？ 封印は失敗しちゃったから……」

「ぬ！ じゃあまだ近くに！？」

みっちゃんは咄嗟に身構えた。しかし、ユウはのんびりと手をひらひらさせる。

「それは大丈夫。『目』が壊れるのを見たから。あのアヤカシは復

活するのにかなり時間かかるし、しばらくはゆっくりできるよ」

「へー、そうなんか」

みっちゃんは感嘆の声を出す。

「アヤカシは強いほど復活に時間がかかるっていうからのう。ユウどんはそれだけ強くなったっっちゃうこっちな♪」

ユウは照れ隠しに笑う。が、すぐにため息へと変わった。

「でも、ミサギさんみたいにできないんだ。あれはどうやってやったんだろ？」

「ぬ？ あれとは？」

「ミサギさんが初めて封印を覚えてくれたとき、アヤカシが一瞬で動きを止めたんだ。それをどうやったのがわからなくて」

「ふうむ……」

みっちゃんは、顎に手を当てて考える。

「そりゃ、恐らく魔眼じゃの」

「マガン？」

「そうじゃ。しかしあれはちょっと特殊——」

みっちゃんがユウをみると、そこにはもうユウの姿はなかった。

「お、およ！？ ユウどん？」

止める間もなく、ユウは彼方屋敷の中へ消えていった。

広間を駆け廊下を抜け、ユウは執務室の扉を力任せに開く。

「ミサギさん、ボクに魔眼を教えてください！」

「無理」

にべもない一言。ユウは、勢いに任せてそのままこけた。

「な……なんですか？」

「なんでって、君は魔眼を持っていないだろう？」

魔眼は、練習すれば誰でもできるってものじゃあないんだよ。

君が生まれつき妖魅呼であるように、魔眼もまた生まれ持って備わっている能力なんだよ」

「そう……なんですか……」

ユウの中で過熱していたものが一気に消えていく。しょぼくれて部屋を出た。

「ユ……ユウど……！」

振り向くと、みっちゃんが息を切らせてそこに立っていた。

相当走ったのだろう、ヒュウヒュウと喉から苦しそうな呼吸音が漏れている。

「みっちゃん、いたの？」

「ひ、ひど………つか、ユウどん、足……速過ぎじゃ……」

息も切れ切れに訴える。

「魔眼、ボクじゃできないんだって。生まれつきの能力なんだって……」

「じゃ、じゃから、わっしはそれを言おうとしたんに、ユウどんまつしぐらに行くから……」

「あ、ごめん」

「ふひいゝ……」

みっちゃんは、大きくゆっくり息を整えた。

「しかし、ユウどんはなぜに魔眼が必要なんじゃ？」

「え？　だって、魔眼あった方が封印がやりやすくなって……」

「わっしから見たら、そんなんでもユウどんは十分にすごいんやけどなあ」

「？　なんで？」

「んー……ちよい聞くけど、ミサギ殿を見ただけでみんなぶっ倒れる理由、知っとる？」

その問いに、ユウはちよつと首を捻る。

「――魔眼の力？」

「正解！　まあ、わっしは魔眼の力だけとは思っとらんのやけどな」

みっちゃんは、なにやら含みのある言い方をする。

それが、ミサギの傾国的美貌を指していることはいわずもがな。

「そんな力があるのに、ユウどんには効いてない。ミサギと平気で顔を合わせてるのがその証拠やねんで」

「ふーん……それが、ボクがすごいって理由？」

「そのたうり！　魔眼の威力を削るために眼を潰しとるのにあの威力やもん、反則やでほんま。それを――」

「えっ！？　眼を潰してっ……！？」

「なんや、ユウどん知つとるんやないの？」

「初めて聞いたよそんなこと！」

「な……なんやて!？」

青ざめるみっちゃん。廊下を右往左往し、おたおたと奇怪な行動を始めた。

「あ、あかん……まずいまずい」

「ミシエル！」

「のあああああ!？」

あまりに奇妙な動きでおたつくものだから、突然の声にも文字通り心臓を跳ね上げる。

みっちゃんは、もうこの世に終わりがきたような顔だ。

「……ミサギさん？」

振り返ると、声の主は部屋の前に立って、不機嫌顔で二人を睨んでいる。

「ミシエル、余計なことを言ってたみたいだね」

「ミ、ミミツサギどん……! わわわっしのことはみっちゃんて

——」

——みっちゃん、声、震え過ぎ……

「やかましい! 君が先に余計な事を言ったんだろ！」

『ひいっ!』

思わずユウも一緒に縮こまる。

ミサギは落ち着かせた声音の裏に、怒りのオーラを出しまくっているようだ。

ミサギ相手でも怯まないあのみっちゃんさえ竦み上がっている。

「すっすまん。ミサギ殿がもう話したんかと思うてつい……」
逃げ惑うみっちゃんにゆっくりと追いかけるミサギ。

ユウは、その間に割り込んだ。

「何、ユウ君？」

「あ、あの……ミサギさん、眼、潰したって本当……ですか？」

「だったら何？ 眼が見えないことに同情でもしてくれるっのかい？」

ミサギが卑屈そうに歪んだ笑顔を見せる。

ユウは、その瞳をじっと見た。

彼の黒く霞の宿る瞳は、すべての光を吸い込んでもなお黒く、それでも光を求めているように思えた。

「いいえ。ただ……」

吸い込まれそうな瞳に、思わず視線を逸らす。

やはり、みっちゃんの言った通り、ユウは他と違って、魔眼に意識を奪われることはなかった。

「ただ？」

「そんなに強い力なんですか、魔眼って……？」

ミサギは少し黙る。

そして、ゆっくりと頷いた。

「そうだね、とても強い力だ。本来、人が持たない力の制御が難しいのは、君にもわかるだろう？」

「はい。でも——」

「力を求めてしまうのは人の性だけど、むやみに強い力を持つことは、いつか身を滅ぼすよ」

遮るような言い方に反論も封じられ、ユウは仕方なく頷いた。

「……はい」

しばらく、重い沈黙がその場を支配する。

「ほいほいほい」

軽快な手拍子が流れだす。

空気を変えたのは、手を叩きながら明るい声を振り撒くみっちゃんであった。

「暗い話はおっしまあいにしようや。な？」

相変わらずのテンションが、ミサギの口元を綻ばせる。

「……そうだな。もとはといえば、君が悪いんだし」

「ぬあゝ、それはすまんって。じゃからユウどんにからむのはもうおしまい、な♪」

「ミシエルが今後余計なことを言わなければね」

「なうああああ！ わっしはみっちゃああああああ！」

悶えるみっちゃんをよそに、ミサギは「仕事があるから」と執務室へ戻っていく。

ドアの閉まる音の直後、ユウの緊張の糸が切れた。

「っはあゝ……なんか、どっと疲れた……」

ユウは腰が砕けてその場に座り込む。

「魔眼……かあ」

「ぬ！ ユウどんまだ言いよる。魔眼はできんのじゃろーが」

「うん。いや、それはもういいんだけど――」

ユウはみっちゃんをじいっと見る。

「な、なんやのん……？」

「みっちゃんて『ミシェル』って名前だったんだ」

「あああああ！ 言わんといてー！」

「なんで？ 隠すほどのこと？」

「謎は多い方がかつこええやん♪ シブくてはあどぼいるどでコードネームやあん♪」

くねくねと体をひねるみっちゃん。

――『みっちゃん』てコードネームはシブいのか……？

いま一つ理解できないみっちゃんの思考に悩むユウ。

「謎っていえば……」

ふと、ユウはあることに気づく。

「ミサギさん盲目なのに、なんでぶつからないで歩けるんだろ？」

「知りたい？」

『つわわわう！？』

ユウとみっちゃんは、突然顔を出したミサギに思わず正座する。

「め、めめ滅相もないとんでもない！」

「ミミミサギ殿の秘密にはお触れいたしませぬがよろしでおますからによってご勘弁をおー！」

二人の縮みように、ミサギはニツコリ笑顔を見せる。

「わかった。じゃ、想像にお任せするよ」
満足そうに執務室に戻った。

「……………」

室内なのに、一陣の風が通り過ぎる。

「……これでよかった……んだよ、ね？」

「う、うぬ……なんか、ええ具合に操作された感じもするが……」

みっちゃんとユウは姿勢を正したまま、しばらくその場に固まっていた。

第7話 失敗

「へっ？ 仕事？」

ミサギの一言に、ユウの朝食がだらしなく口の端からこぼれる。

「そう。今回から手伝ってもらうよ。今日の夜、時間は十九時だから、十分前までには用意を済ませておくんだよ。

あと、スクランブルエッグがこぼれてるから拭きなさい」

しかし、ユウはこぼした卵を拭うどころか、さらに持っていた箸まで落とす。

ミサギとユウが思わず注視する中、箸は止まることなく転がって、軽快な音を立ててテーブルから落ちた。

「……あっははは……」

「あっははは」

二人は同時に笑い出す。

同じ、乾いた笑い。

「……ウソン」

「こんなくだらない嘘を言っ僕に何の得があるんだい？」

「じゃ……てことは……今やってる修業は終わり……？」

震えるような言葉に対し、ミサギは無言で頷いた。

「くれぐれも遅れないようにね」

そう言っ、ミサギは紅茶を飲み干して食堂を出ていった。

「……や」

ユウは身を屈めて力を溜める。

「やったああああ！ 苦節云々月……！ よーやっど地獄が終わったあああああ！」

一人、食堂で歓喜に踊り狂う。

その姿ときたら、みっちゃん顔負けの奇怪さだ。

しばらく一緒にいるだけで、こうも変態が感染するものなのか。

阿呆みたいに駆け回っていると、再び食堂のドアが開く。

ユウの奇怪なダンスがピタリと止まる。

「言い忘れてた。基礎が終わったから、明日からは応用の修業に入るからね」

言って、ミサギは静かにドアを閉める。

「……………わーい」

踊り狂っていた阿呆は、その場に沈黙した。



電話が入ったと木戸から知らせを聞き、ミサギは机上のコンピュータを使い通信回線を開く。

相手はテレビ電話を使っているのだろう、『映像あり』のメッセ

―ジが流れていた。

そのまま通話のボタンを押すと、ディスプレイには三十代の男が映る。

焦げ茶の髪に年齢を示唆するかのような口元の皺。それとは対照に、青春時代の感覚からまだ卒業しきれていないような笑顔を見せている。

肩幅がわりとがっしりしているためか、藍墨色の軍服がよく似合う。

ミサギにとっては嫌というほど見覚えのある顔だった。

「久しぶりだな。相変わらず毒舌を撒き散らしているか？」

皮肉は故意か天然か、開口一番、彼は笑顔と一緒にその一言を放った。

「昨日ぶりですね、総寮寺元帥殿。そどうりようじご存知ですか？ 注意された点を改善しないのは馬鹿というんですよ。またサボりですか？」

「はっはっは。東条、台詞が辛辣なうえに棒読みになってるぞ」

明らかに嫌悪の混じった挨拶に笑いを返す。

「あなたと話しているからです」

「なんだなんだ、冷たいなあ。せっかく――」

「断る」

「仕事を持つてき」

ミサギは回線を切った。

数秒後。

「やあすまんすまん。回線が途切れてしまったみたいだ」

「――そのようですね」

「君に電話するとたまになるんだよ。機械との相性が悪いのかな？」
ミサギが切ったと知ってか知らないでか、笑顔で謝る総寮寺。

のらりくらりとした性格がとにかく対応しづらくて、ミサギは彼を苦手としていた。

彼への応答もほとんど投げやりになってくる。

ミサギは組んだ足をぶらぶらと遊ばせた。

「なあ、どうしても受けてくれないかな？」

ミサギはディスプレイに映る彼をじっと見る。

真摯な男性そのものだ。

しかし、これがなかなかクセモノである。

しばらく続いた睨み合いの末、ミサギは諦めたように肩を落とす。

「……わかりました。お受けいたしましょう」

「ホントかい？ よかったら、いやあ君しか頼める人がいないからねえ。じゃあ依頼料はいつもの――」

「三倍の額で」

「そうそう三倍……いいっ!？」

「嫌なら他をあたってください。僕はそれでいっこうに構いません。それじゃあ」

ミサギは再び回線を切った。

数秒後。

「わかった、払うよ。三倍の額払う」

「ありがとうございます」

「今日はいつもより機嫌悪いな。何かあったか？」

「別に」

「わかった。新しく入って来た子とうまくいってないんだろ？」

ミサギの眼がギョロリと総寮寺の方へ動く。

どこから仕入れたのか、ユウがミサギのもとにいる情報を彼は手にしていた。

彼はフフンと得意顔をする。

「私を甘くみるなよ。情報収集なら君のどこにも負けてないんだからな。」

……ほう、春日ユウか。かわいい子だね。ん？ この子、性別がないじゃないか。男の子？ 女のこ——」

ミサギは回線を乱暴に切った。



「——まったく、面倒だなあ」

「え？ ミサギさん、何か？」

ユウが見上げる。

二人は、荒れた病院の長い廊下に立っていた。

ミサギは、何でもないと言を振る。

「それにしても、すごい荒れよう。こんな昔の建物がまだ残ってたんですねー……」

ユウは辺りをキョロキョロする。

先ほど見つけた病院案内の地図を見たところ、ここは街中にあつた総合病院のようだ。

かなり大きく、十階まであつたが、進む時代が街中を郊外の端に変え、あちこちを蝕むように朽ち果てさせていた。

外から見ると、三階以上は倒壊し、みる影もない。二階部分は、上半分が崩壊し、天井が空に変わっている部分もあった。

そして一階。

ユウが今いる廊下のすぐ横は手術室があつた。

壊れた入口から手術台やさまざまな機材、器具が垣間見える。どれが、人の手から離れて久しい朽ち果て方だ。

ぐるおとおお……

上から、獣の唸りが聞こえてくる。

情報によると、アヤカシは二階に棲み着いている。

「ユウ君は向こうから回り込んで。挟み打ちにするよ」
「わ、わかりました！」

「じゃ、いくよ」

ミサギの合図と同時に、二人は走り出す。

互いに反対方向へ向かい、ユウは長い長い廊下を数秒で走りきる。

二階への階段はすでに崩れ落ちていた。ユウはそのまま踏み切ってジャンプし、壁を蹴って数メートル上の二階へ上がる。

脆い床へ静かに着地し、すぐに構える。

警戒して、視線だけを周囲に向けるが、アヤカシの姿は見当たらなかった。

う……ん

「？」

床に着いた手足から、わずかに地響きを感じた。

わずか。だが、腹の底に残る振動。

廊下の先、ユウは暗闇の中を凝視する。

気のせいではない。地響きはこちらへ近付いている。しかも、次第に強く、振動の間隔も短くなってきている。

そう、これはまるで四足歩行の動物が走るような――。

「……なんだこれ!？」

強くなっていく地響きは、建物が倒壊してもおかしくない地震に変わっていた。

この揺れは自分だけが感じているのか、とユウは思った。

なぜなら、周りのものは何一つ微動だにしないからだ。床が抜けてもおかしくないのにその気配もない。

途端、黒く大きなものが突進してきた。

「うわわわわっわ!？」

ユウは咄嗟に壁へへばり付く。

黒い物体は、地震と一緒にユウのすぐ横を走り、壁をすり抜けていく。

そして、その通った後から強烈な風圧が襲ってきた。

ユウは、脆い壁に掴まりながらなんとかやりすごす。

「アヤカシ……あいつだ!」

そして再び。

地響きが前方からやってくる。

「げっ!」

驚くことに、今度は立派な角を生やしてユウに向けていた。

その姿はサイとイノシシを想像させた。

「じょ……マジ!？」

ユウは、結界を応用した壁を作り、廊下を塞いだ。が、ほんの数秒足止めしたに過ぎなかった。

難無く破られ、アヤカシはユウへ向かって猪突猛進する。

「うっそお!？」

もうだめだと思った瞬間、

るぐお あああ！

アヤカシが悲鳴を上げた。見れば、覚えのある麻紐がアヤカシに巻き付いている。

「あ……！」

「ユウ君、封印を！」

ミサギがアヤカシの背後から叫んだ。

「は……はい！」

チョーカーから十字架を象ったチャームを外す。真ん中に紫の水晶がはめ込まれたそれは、一瞬でユウの背丈を越える錫杖になった。その先端に光が集い、ユウはそれを構えてアヤカシと対峙する。

——あいつの『目』は……

その間にも、アヤカシは呪縛を破ろうともがいている。

ミサギはクスリと笑う。

「無理だよ。僕の束縛から逃れたやつはいないんだから」

ユウの眼が、アヤカシの『目』を捉えた。

「でええええええい！」

ユウの突きはアヤカシの体を完全に貫いた。

背から生えた十字架の先に『目』が麻紐に絡めとられている。

「やった！」

同時に、アヤカシは肉体を保てずに霧と化し、空中に消えていった。

「封印、終わりましたっ！」

ユウは封印できた『目』をミサギに渡して任務完了を宣言する。しかし、ミサギは腑に落ちない顔をしている。

「簡単すぎる……」

「？」

「あいつがこんな簡単な依頼を持ってくるわけがない」

「あいつって……？」

ユウの疑問も聞かず、ミサギは辺りに視線を這わせた。

「ユウ君、まだ気を抜かない方がいい……絶対何かある」

「は、はい」

ユウは十字架を握る手に力を込める。

と、ある事に気が付いた。

「……れ？」

十字架につけられた水晶が見当たらない。

妖魅呼体質を緩和するためにミサギからもらった水晶である。

「アヤカシ除けの石が失くなってる！」

「なんだって!？」

これにはさすがのミサギも驚愕の声をあげる。

「さっきまであったのに……どこいったんだ？」

「急いで探すんだ！」

「え……何でそんな慌ててるんです？」

「馬鹿っ！ 君の場合、アヤカシの集まる量が尋常じゃないんだ。

しかも、魔法士の修業を始めたことで力が増幅されて、今まで以上にアヤカシが来てしまうんだよ！」

「ええっ!？」

ユウは慌てて床にへばり付いて探し出す。

しかし、ついさっきまであったはずの水晶は、どこへ消えたかまったく見つからない。

ユウの顔が青ざめる。

「ヤバイ……」

突然、ミサギがユウの腕を掴む。

「帰るよ」

「でも、石がないと――」

「その前に僕らがアヤカシに囲まれる！」

周りを見ると、雑魚ではあるがアヤカシが集まり始めていた。

「でも……でも、このままほっといたら街にアヤカシが――」

「君がここから離れればすぐに消えるさ！ 早くしないと収まる事態も収まらないよ！」

「うう……ごめんなさい……」

「急いで！」

「はい……うあっ!？」

「ユウ君!？」

ユウが何かに足を引っ張られる。危うくこけそうになるのを踏ん張って留まった。

掴まれた所を見ると、青白い手に似たものがするすると伸びながらユウに絡み付いてくる。

「キッショ……! 放れろっ、この!」

錫杖で殴打すると、意外にあっさりと離れていった。

しかし、その間にもアヤカシは数を増やしていき、廊下は我先にとやってくるアヤカシで寿司詰めの状態になっていった。

前方からもアヤカシの群れがやってくるのが見えた。

横にある窓から逃げれば外へ出られるが、二階から飛び降りればケガというリスクが生じる。

アヤカシが外まで追ってくる可能性を考えると、これは良策とはいえない。

二人は完全に退路を絶たれてしまった。

ユウとミサギは背中合わせにアヤカシと対峙する。

「ユウ君、今、僕の向いている方向が出口になる。僕が攻撃と同時に目くらましをかけるから、その隙に一気に外へ出るよ」

「は、はい」

アヤカシの一匹がユウに手を伸ばそうとする。ユウが構える。

刹那。

ユウの背後で、まばゆい光が破壊音を伴って放たれる。

「走れ！」

ミサギの合図に、ユウは出口に向かって駆け出す。

しつこくまとわりつくアヤカシを払いのけ、ようやく見えた病院の外へ転がり出る。

同時に、ミサギが病院を肩越しに睨み、病院全体に結界を張る。

うおおおーん

アヤカシたちの咆哮が一带に鳴り響く。

廃病院の壊れた窓からは、外に出られずにいるアヤカシどもが蠢いていた。

「木戸っ！ ユウ君を屋敷へ！」

病院の出入口で待機していた木戸は、ミサギの命ずるままに、壊れかけた扉に光る扉を出現させる。

「屋敷と繋がりました。お急ぎください」

そう聞いたのも束の間、ユウはミサギに首根っこを掴まれ、扉の向こうへと放り込まれた。



「――で、アヤカシを消すどころか増殖させて帰ってきたってわけか！？ なんてこった」

通信先の総寮寺は頭を抱える。 デイスプレイの前に座るミサギ

の表情は淡々としていた。

「これから僕一人で片付けてくる。これは僕の責任だからね」

「うわっ、珍しいな！　こりゃ今夜あたり雪と雷と台風が――」

「中間報告終了」

ミサギは、通信用のコードをコンセントプラグから引っこ抜いた。

「……ミサギ、さん」

部屋の入口で、所作なさ気にユウは立っている。

依頼の失敗をユウなりに反省しているのだろう。
しかし、ユウに向けられたミサギの表情は厳しい。

「あの」

「君は来なくていいからね」

「う……」

返す言葉もない。

ツカツカと部屋を出ていくミサギ。

追おうとするが、ミサギの持つ雰囲気それを許さなかった。

彼が出かけた後、ユウは屋敷裏のトビラの前に立ち尽くす。

――ボクが石をなくしたりしなけりや……

ここにきて事の重大さを実感し、自分のマヌケさに嫌気がさした。
何度目かの大きなため息をつく。

「……下手したな……」

その場にうずくまり、ただ、ミサギが戻ってくるのを待った。

少しの間だけ、季節に合わない冷えた風がユウをなでる。

「ユウ様？」

ハッと顔をあげると、木戸がそこに立っていた。

「木戸さん？ あれ……ミサギさんと一緒に行ったんじゃ……？」

「はい。私は扉の前で待機です」

木戸はいつもの無表情で応える。

そういえば、気にも留めていなかったが、彼は外界から扉が開けるということを以前ミサギが言っていた。

そのおかげで、今回の依頼は大惨事を免れたわけだが――。

「木戸さんは屋敷の外から扉を開けるんだ？」

「はい。扉の近くにユウ様の魔力を感じましたので、何かあつてはと思い参りました。どうかされましたか？」

聞かれたユウはうなだれる。

「ミサギさんに『来なくていい』って言われてさ……」。

いつもはこの程度なんともないんだけど、ミサギさんに言われるとなんかもうだんだん落ち込むってゆーか再起不能になるってゆーか……」

「ミサギ様の力は言葉にも影響が強く出るようです。恐らくはそのせいかと」

「はは……どこまで最強なんだろうミサギさんて……」
ユウは苦笑する。

しばらく無言の空気が流れる。
木戸は無口だが、その雰囲気は決して近寄りがたいものではなかった。

ユウは彼の沈黙に、かえって安心するものを感じた。

不意に木戸が立ち上がる。

「ミサギ様と呼んでおります。私はそろそろ行きますね」
そう言って、木戸は扉の向こうへと消えていった。

その様をぼんやり眺めるユウ。

不意に、自分は本当に役立たずであるという事を嫌が応でも思い知らされる。

ミサギと木戸は、数分も経たないうちに戻って来た。

扉の前で座り込んでいるユウを見つけ、ミサギはまた不機嫌な顔になる。

ユウは慌てて立ち上がった。

「あ、の……おかえりなさい」

「……………」

彼の手がユウへと伸びる。

反射的に、ユウはギュッと目をつむった。

「ほら、ユウ君」

「……？」

怖々目を開けると、目の前に出されたミサギの手には石が乗っていた。

「今度なくしたら自分で取りに行ってもらおうよ」と、石をユウに持たせる。

「あ……はい……」

「こういうときは『ありがとう』って言うのが礼儀だよ」

「あ、ありがとうございます」

ここでようやく、ミサギの表情が和らいだ。

「よく言えました」

微かに笑む。

だが、ユウを耳まで真っ赤にするのはそれだけで充分だった。

「けれど、やっぱりひっかかるな………さっきの騒動を除いて、あいつがこんな簡単な依頼をするなんて思えないんだが」

「あ、あの……『あいつ』って？」

「うん？ ああ、今回の依頼人。常連だけども——」

がたんっ

突然。

扉が勢いよく開いた。

自動ドアではないのだから、そんなことが起きることなど通常ない。

ミサギと木戸は不審な顔を見せる。

「木戸、扉を閉じていなかったのか？」

「いえ。ミサギ様を通った後すぐ閉じました」

しかし、扉は開かれ、七色にたゆたう空間が三人の前に広がっている。

ずっ……………

かすかに、何かがいるのを感じる。

ずっ……………ずりゅ

「イヤな感じ……………」

ユウの感覚が研ぎ澄まされていく。

「やっぱり、ロクな依頼じゃなかったようだ……………」

「……………来る！」

ずる……………う……………

ぬらっと現れたのは、血に染まった人間の左手。

「手？ ……血？ え……………ひいつ！」

予想外の光景に、ユウは悲鳴をあげる。

ミサギは、ユウを扉から離し様子をみる。

肘まで出てきた腕は、何かを探るように左右へ動く。

「……木戸、空間を切り離せ」

ミサギの命に、木戸は少し躊躇う。

「ミサギ様達がもとの空間に戻れなくなりますが……？」

次いで、肘から先のない右手が生えてきた。切られたというよりも、食いちぎられたに近い傷口だ。

力が入ったのか、切り口から血が噴き出した。

「あとでどうにでもなる。やれ！」

「はい」

木戸が空間を切り離しにかかる。

扉に手を当てると、波打つ空間はピキピキと音をたてて固くなっていく。

だが、それに対抗するように腕も無理矢理中へと伸ばしてくる。

「うえ……！　う、動いてる……」

さらに足も出てきた。

木戸はさらに空間を固めていくが、その速度を上回ってひびが入っていく。

「申し訳ありませんミサギ様、手遅れだったようです」

固唾を呑んで見ていたミサギも、覚悟を決めたように構える。

「……わかった、下がれ」

木戸が扉から離れた直後、

がっしやああああああん

ガラスの割れるような、凄まじい破壊音と共に、腕はその全貌を現した。

第8話 保護

閉じられたはずの扉をこじ開け、不気味な手を伸ばして現れたのは、見た目十代の少年だった。

ユウと比べて頭一つほど高く、歳もいくつか上に見える。だが、その容姿はともじやないが生きている人間に見えなかった。

乱れてボサボサの髪、左目は潰れ、右側も白目を剥いている。衣服や身体はズタボロに裂け、全身血にまみれた彼はヨロヨロしながらそこに立っていた。

「……う」

苦しそうに呻く。

掠れた、少年特有の少し高い声。

「ユ……」

少年は、求めるように両手を伸ばす。

ミサギと木戸は警戒して、ユウは初めての状況に、その場から動けずにいる。

「ユ……ウ……」

ようやく絞り出した声は、ユウの名だった。ずっと「ユウ」と言い続けていたのだろう、少年はなおも「ユ…

…ユ……」と呻いている。

「な、なんでボクの名前……？」

「知らないよ、君の友達じゃないのかい？」

ミサギが、少々マヌケな事を聞く。

「自慢じゃないけど、ボクはいじめられっ子だったから友達いないです！」

その時、白目を剥いていた少年がギョロリと瞳を見せた。

『！！』

血よりもさらに鮮やかで深い紅色の瞳。

それを見た途端、三人は少年から距離をとった。

人間にはない瞳の色。

アヤカシを示す紅。

「ミサギさん、あの目……」

「成りは人間だけど、あれはアヤカシ……だろうね」

断言しなかったのは、今まで人間の姿をしたアヤカシに出会ったことがなかったからだ。

「ア、ウ……！」

少年の左手がピクリと動く。

それが戦闘開始の合図となった。

少年の腕は、鞭さながらに長く伸びてうねり、ユウ達に襲い掛かる。

三人は二手へ分かれて跳び、最初の攻撃を難無くかわす。

どうやら初めて使った能力らしい。

彼の鞭さばきはいまいち素早さに欠け、攻撃が外れて地面にめり込んだ右腕を何度も引っ張って引き戻す。

すると今度は巨大な鉤爪に形を変えた。

キヨロキヨロと視線を散らし、銀色の髪を赤い瞳で捕らえる。

爪を大地に突き立て、ひと掴みでえぐり取る。

大きな爪でそれ以上の巨大な塊を、少年は軽々と投げ付けた。

着弾点にはミサギと木戸がいたが、二人がじっとしているはずもなく、すぐに避ける体勢に入る。と、突然地の塊が爆発した。

その向こうから少年が凶爪を繰り出してくる。

ミサギを狙って殺意が迫る。

攻撃が届くその寸前、木戸が間に割り込んだ。

ミサギを庇うように受けた攻撃は、攻撃に振り下ろした勢いも手伝ってぐんと重く、衝撃に圧され木戸の足元が沈む。

砂埃立ち込める中、ミサギが彼の肩越しに身を乗り出す。

手を伸ばす先は少年の赤い瞳。

アヤカシの核――すなわち『目』を封印すれば終わりだ。

指先があと数ミリで『目』に手が届く。と、反射的に少年が後ろへ跳んだ。

ミサギは思わず舌打ちする。

少年は距離をとって着地し、ミサギを見る。

互いに牽制するように睨み合いが続くことしばらく。

少年がぴくりと動き、ミサギは懐の札を構えた。

再びミサギへ攻撃にくるかと思われたが、彼はくると方向を変え、ユウに向かってきた。

いきなりのことに、見学者と化していたユウは慌てた。

チョーカーにつけた十字架を錫杖に変えようとして、手を滑らせてしまった。

しかし、そんなこともお構いなしにミサギが叫ぶ。

「ユウ君！ 『目』を狙うんだっ！」

「は、はいっ！！」

急いで錫杖を拾い、応戦すべく身構える。

少年は一気に距離を縮め、凶爪を伸ばす。

「わわっ！」

迫る攻撃を錫杖で弾き返すが、その瞬間に爪は鞭に変わり、ユウの体に巻き付いた。

「なっ、しまっ……！！」

少年は、そのまま高く跳躍し、屋敷の屋根に着地する。

「ふえ？」

ミサギと木戸が、呆気にとられた顔でユウを見上げている。
ユウも目を点にして二人を見下ろす。

少年は、ユウを抱きかかえる格好で屋根を強く蹴って屋敷を離れる。

ユウが我に返った時には、屋敷もミサギも遥か彼方に遠ざかって
いた。

「な……なんでええええええええええ！？」

ユウの叫びが木霊しながら消えていく。

「……木戸」

「はい」

気の抜けた顔で青空を見上げる。

「どうしよう……連れてかれちゃった……」

残った二人は、ぽつんと佇むしかなかった。



少年は平原を駆け抜け丘を越え、森の中を猛スピードで走り続ける。

「放せっ！ 放せってばおいコラ！！ バカーッ！ 赤眼えー！」

捕らえられたユウは、少年にむかって罵声を浴びせるが何の効果もない。

風を切る音が、ユウの言葉など耳に入っていないと言いたげだ。

今度はもがいて脱出を試みるが、がんじがらめになって身動き一つとれない。

だんだん締め付けが強くなってきて、ミシミシと嫌な音が体から聞こえ始める。

「うっ……ぐう……ぐるじ……」

「！」

苦悶の表情を浮かべるユウに気づき、少年はようやく速度を緩めた。

そして、近くにあった大樹の根元でユウを解放する。

むせて座り込むユウを見つめる少年。

「ユ……ユ、ウ……」

鋭い爪がユウに触れようとする。

「触んなっ！」

甲高い音が森に響く。

ユウが持っていた錫杖で力いっぱい叩き返したのだ。

「……っ痛えゝ！」

跳ね返した反動が、痺れとなってじんじんと腕に伝わる。

ユウはぶんぶんと腕を振る。

少年は、ただ、ユウをじっと見る。

再びユウへ手を伸ばす。

「来るなって！」

跳ね返すユウ。

少年は何度も手を伸ばす。

ユウもその度跳ね返す。

だんだん事の往来に苛立ちを覚え、幾度めかの腕を跳ね返してユウは叫んだ。

「いい加減にしろよ……!!
その目玉、潰すぞっ!!」

凄んだユウにびくりと反応し、本能的に右目を押さえる少年。
その表情は紛れも無く怖れを抱いていた。

「ボクに近付くな！」

弾かれるように少年はユウから離れ、縮こまる。

——なんなんだ、あいつ？

ユウはぶつぶつ言いながら服の下から腹部をさする。

動く痛みが走ったが、さするうちに落ち着いてきた。

体からきしみ出た音からして、肋骨が何本か折れたかと思われたが、意外にもユウはケロッとしていた。

「ふう……」

「ど……して……」

少年が初めて口を開いた。

「は？」

「ユウ……オ、レ……たす……け……くれ……ユウ……た……す」
少年の俯いた口はもごもごと小さくつぶやいた。

「助け……何？」

しかし少年は、切り裂かれた喉笛からヒューヒューと空気を漏らすばかりでうまく聞き取れない。

仕方なく、ユウは少年に近付く。が、少年の方が反射的に遠退く。

「……攻撃しないって」

だが、先程の脅し文句がまだ効いているらしく、少年はまったく近付いてこない。

「ボクが悪かったって……ホントに何もしないから」

——って……これじゃボクが悪者みたいじゃん……

少年は怯えてうずくまる。

「ほら、武器も捨てるから」

言って、錫杖を遠くへ放る。

その後しばらくは警戒して動かなかった少年も、ユウが何もしないことを理解したのか、のろのろとユウの前に来た。

「ボクはもう攻撃しないから、おまえもするなよ」

少年はこくりと頷いた。

「いろいろ聞きたいことはあるけど、とりあえずおまえ、人間か？」

少年はふるふると首を横に振った。

「じゃあ……アヤカシ……？」

こくりと頷く。

ユウの背筋がゾクリと冷えた。

「……なんで人間の恰好をしてるんだ？」

「ああ、うー……」

少年の首から笛の音が漏れる。

「……ごめん、質問変える」

ユウはしばらく考える。

「えーと、アヤカシって変身できるのなのか？」

少年は首を横にした。

いやな予感が脳裏をよぎる。

人に変身しないとすれば――、自然ともう一つの可能性が浮かび上がり、絞り出すような言葉になって出た。

「……もしかして、人間にとり憑いてる、とか？」

ユウが少年を凝視する。

「……」

頷いた。

ユウはその瞬間に身を引いた。

「お、お前まさか、ボクにとり憑くつもりじゃないだろーな？」

しかし少年は、慌てて首を横に振る。

「ち、違う？」

「あうう……ひ……ら、あ」

少年は懸命に口を動かす。

しかし、何か言いたげな口は動くだけで、裂けた首からなり損な

いの言葉が淋しげにこぼれていく。

「？ 何を――」

言いかけた時、森の茂みの向こうからユウを呼ぶ声がした。

だんだん近づく二種類の呼び声は、ユウのよく知る声だ。それに気付いたユウは、立ち上がって叫ぶ。

「ミサギさーん、木戸さーん！」

その後ろで少年が威嚇するように唸りをあげた。

「大丈夫。ミサギさんも木戸さんも、攻撃しないから」
しかし少年は、ユウの行動を遮るように飛び付いた。

「おいっ！ 何すん――わぁっ！？」

「ミサギ様、こちらからユウ様の魔力が――」

「ユウ君！？」

茂みから二人の影が出て、ユウたちと合流した。

その瞬間は、ユウにとって間が悪かったというか何というか――。

少年は下敷きになっているものの、しっかりとユウを抱きしめていた。

後ろから抱きつかれた形で倒れたユウは、ひっくり返った亀のようにしたばたしているが、少年の力に敵わず身動きがとれないようだ。

「みっミサギさん……！」

「……何、してるの？」

ミサギの一言に、その場の空気が一瞬凍る。

「いや、えーとこれは……」

言い訳を考えているようで、あたふたとジェスチャーを始めるユウ。

その時、少年が急に起き上がる。

ユウを背後に隠し、大きく吠えてミサギに襲い掛かった。

「おい、待てっ……やめろ！」

ユウが叫んだ瞬間、少年はビクリと反応して制動をかけた。が、迎え撃つミサギの方は止まらなかったようだ。

少年の繰り出そうとした攻撃の勢いを利用し、あっという間に地へとたたき付ける。

「驚いたな、ユウ君の言う事を聞いた」

たいして驚いた風も見せず、片手だけで少年の動きをを封じるミサギ。

「み、ミサギさん、そいともう攻撃しませんから、放してやってください！」

慌てて少年を庇うユウに、ミサギは眉根を寄せた。

「どういう事？」

「え、えーと……」

ユウはしどろもどろに話し始めた。

■ ■ ■

「ふうん、人にとり憑くアヤカシか……」

事情を聞いたミサギは、半信半疑の表情で少年を見る。

解放された、といっても、ミサギの目が刺すように少年を監視していたため、檻に閉じ込められたも同然だった。

ミサギが手を伸ばすと、彼はユウの後ろに隠れた。

「大丈夫だって。何もしないから」

ユウは、少年をミサギの前に立たせようと、彼の後ろに回り込む。しかし、少年がユウの後ろに回り込み、もとの位置に戻った。

「……大丈夫だって」

再度回り込む。

少年も回り込む。

「……………」

ユウが説得して、隠れる少年をミサギの前に立たせるが、どうしても彼はユウの後ろに逃げてしまう。

その様子に、心なしかミサギの額に青筋が立つのを木戸は見逃さ

なかった。

堂々巡りの二人にいきなりミサギが割って入る。
両者を睨み付け、声を低めて言った。

「いい加減にしなよ。こっちは遊びじゃないんだ。

お前も、その『目』、粉々にされたくなければ僕の言う事を聞け」

その威圧感たるや、先ほどの睨みの数十倍。

加えて、顔に合わずドスの効いた声でのセリフ。

ミサギの言葉は、言葉以上に強い力で周囲を圧倒した。

二人は身が凍るどころか呼吸が止まってしまった。

「そうだ、おとなしくしていれば害は与えない」

動けない少年の、耳の下に手を当てる。

脈は、ない。

「……死んでる。アヤカシは死体にもとりつけるのか」

そこでも、少年は何かを訴えるように口を動かす。

もちろん言葉になっていないので、ミサギにも、少年が何を言っているのかわからなかった。

それを見たユウは、

「あの……ミサギさん、彼のケガ、治療できますか？」

突飛な提案に、ミサギは顔を歪めた。

「は？ 何馬鹿言ってるんだい。このアヤカシは死体にとり憑いて

るんだよ。死体は治療のしようがない」

ミサギの言葉が刺のようにユウへと刺さっていく。
しかし、何とか踏ん張って言葉を返す。

「……ほ、包帯とかで傷を塞ぐだけでもいいんです」

「やけに食い下がるね、それで何かメリットがあるのかい？」

「メリットっていうか……彼と話ができれば、もしかしたらアヤカシについて何かわかるかもって――」

しどろもどろながらも、ユウはミサギの説得を試みる。

「……なるほど……その手があるか」

ミサギは思いついたようにつぶやく。

「――僕も少し興味が出てきた。木戸、何とかできるかい？」

ミサギが振り返ると、木戸ははっきりと頷いた。

「傷を塞ぐだけであれば」

「よし、じゃあ彼を屋敷に連れて帰ろう」

「はい！ ……って」

少年はユウにひしっとしがみついて離れない。

「おい」

まるで子供だ。

そしてミサギを睨む。

「ほおう……僕にケンカを売ろうって事かい？ いい度胸だ」

その場の空気が一気に冷え込んだ。

「みつミサギさん！ ちょっと待っ——」

ユウが止める前に、ミサギは少年の首根っこを掴む。

「ふーっ！ あうあー！」

ミサギが、抵抗する少年を問答無用で屋敷に引きずっていった。



アヤカシ少年の騒動から一夜明けた朝。

ユウは、生ものが腐るような、鉄錆のような、妙な臭いに起こされた。

「ふゃ……兄ちゃん、生ものは非常食にしたらダメだって——」

目をこすりながら開けると、血染めの包帯と赤い瞳が真ん前にあった。

それは、腐敗臭の少し混じった吐息を静かに吐き、ユウの顔を凝視している。

「……………」

「……ユウ、おきた」

少年は、目を瞬かせるユウを確認すると、モゾモゾ動いてユウに抱きつく。

それが、ユウの布団に潜り込んだアヤカシの少年と理解するのに約七十秒。

はつきりいって、反応が遅い。

寝ぼけているせいにしても遅すぎる。

「ユウ、おはよ」

言って、頬にキスをする。

「……」

「……」

互いに見つめあっている。

一人は完全に寝ぼけているが。

「……………」

よくわからないままに、キスされた頬を撫でるユウ。

「あいさつ」

「……………！
■
■
↓※
●
→！？」

声が声にならない分、ユウはじたばたもがいてベッドから転げ落ちた。

「なっ……！　　ななななんでっで、なんでおまえがこんなトコに！？」

「オレ、ユウ、ちかく、いたい」

舌っ足らずな少年は、無表情のまま再びユウに抱きついた。

「んなっ……！」

直後、屋敷中に悲鳴が響き渡る。

こうして、アヤカシのいる妙な一日が始まった。

第9話 狭間の世界2

少年は、部屋中を文字通り這いずり回って主を捜した。

ベッドはもぬけの殻。勉強机の前にもタンスの中にも、トイレにも、部屋をぐるりと見渡しても誰もいない。

外にいろのだろうかと、集中して主の力を探してみるが、やはり主の気配を感じない。

「ユウ……いない」

■ ■ ■

前も後ろも延々と長い廊下を、何度も繰り返して見渡す。

いつもの廊下だが、今日はいつもと違っていた。

両方とも、先の方は薄暗くなっていて端など見えやしない。

なのに、部屋への扉は一つもなく、はめ込みの窓からは青い空が広がっている。

ただ、それだけだった。

「……どこだここはぁー!?!」

ユウは力いっぱい叫んだ。

■ ■ ■

「……ほーう、わっしがおらんかった間にそげんオモシロー」

ミサギがキツと睨む。

「ゲフオツ！　ゲフゲフツ……大変な事があったんかいな」
みっちゃんは慌てて咳でごまかす。

「そいで、ユウどんは？」

「さあ？　僕は知らないよ」

「どっこ行ったんやろなあ？　せつかくおもしろいネタを持ってきたんに……」

「ギャグにもならない極寒ネタの間違いだろ……？」

そこへ、少年が床を這いながら部屋に入ってきた。

「……ハル、なにをしているんだ？」

「ユウ、さがしてる。ユウ、あさからいない。ユウのにおい、どこにもない」

先日から居候——というより、ユウになついた犬のような少年。
アヤカシが人間の少年にとり憑いたものらしく、ユウの提案で屋敷に連れてこられたのだ。

いつもならユウにべったりで、そうでなければ暴れまくる少年だが、今日はおとなしく、寂しげだ。

ユウに『ハル』と名づけられた少年は、クウンと喉を鳴らして再び床を這う。

その姿は、まさしく親を捜して鳴いている子犬を連想させた。

「どこにもおらん？　どっか出掛けとるとかやなくてか？」

「出掛けるなら、僕か木戸に言ってるはずだよ」

ミサギは、おかしいな……と首を傾げて木戸を呼んだ。

「お呼びでしょうか」

「ユウ君の外出を聞いているかい？」

「いえ。どうかなさったのですか？」

「朝からいないらしいんだ。どこにいるか捜してみてくれないか？」

「承知いたしました」

そう言うと、木戸は空気に溶けるように姿を消した。

「き、消えよった!？」

「それがどうかしたか？」

「木戸はん……何、人間ちやうの？」

すると、ミサギはキョトンとする。

「人間だよ。知らないのか？ この屋敷と周辺一帯の空間は、木戸が作り出しているんだ」

「はっ!？」

「屋敷と外の空間を繋げられるのも、彼の能力があるからだよ。前に言ったはずだけど？」

「わっし……初耳やで」

「あっそう。じゃ、一つ利口になったね」

ミサギはさらりと受け流した。

その間に探索を終えたのだろう、木戸が再び姿を現した。
わざわざ隣の部屋の扉から。

「どうだい？」

「屋敷内にいらっしゃるようですが……どうやら狭間の世界に入り込んでしまったようです」

「……………」

ミサギは疑いの眼差しをみっちゃんに向ける。

「なっ？　ちよっ……今回はちゃうで！　んな、疑念たっぷりの眼差しで見んといて！」

「……木戸、ユウ君は屋敷のどこらへんにいるんだい？」

すると、木戸は表情を曇らせる。

「それが、屋敷内を移動しているようです。ご案内してもすれ違う可能性が……」

「ユウ君のいる近くに行ければいい。案内してくれ」

「わかりました。こちらです」

木戸は、命じられるままにミサギをユウのもとへと案内を始めた。



「なんかさあ、前も似たようなことがあった気がするんですけど……」

ユウは一人ごちながら廊下を歩く。

前は、みっちゃんと二人でひたすら落ちていったが、今回は一人でひたすら歩いている。

前々からこの屋敷内を探索してみたかったというひそかな野望を今朝、実行したまではよかった。

最初に最上階である三階へ上り、下へ下へ、様々な部屋を探険した。

屋敷内とは思えないほどの巨大な資料室。
いつも使っている食堂。

ホテルかと間違えるほど設備の整った客室の数々。
威圧感を放つ扉の会議室。

歩けば歩くほど、迷ってしまいそうな広さだ。だが、初めて見つけた部屋もあり、なかなか楽しかった。

だが、気が付けばずっと廊下を歩いていた。

——クスクスクス。

「？」

後ろを振り返るが、誰もいない。

「誰か笑ってたような気が……？」

ユウは無意識に顔を引きつらせる。

——夜が明けた？

「ヒイツ！」

——夜は明けた

「だっ……誰かいるのか!？」

驚いて尻もちをついたユウは、誰もいない廊下で叫ぶ。

すると突然、廊下を照らすろうそくが一斉に炎を大きくした。
「!？」

『明けた、明けた、夜が明けた。
今日も天気は快晴で、僕らはこれから一休み』

「え？ え！？ ろうそくが……てか、火が歌ってる？」

ユウの目の前で、ろうそくの炎は歌って揺らぎ、飛び跳ね、まるで踊るように次々と消えていった。

最後に残った炎が、ゆらゆら踊りながらユウの前にやってくる。
その炎だけは他の炎よりも真っ赤で、静かに燃えていた。

「チミ、そこのチビッ子」

「へ？ ボク？」

手のひら大の炎は、こつくりと頷く仕草をした。

「そう。お前さん、『あちらの世界』の住人じゃろ。迷い込んだのかな？ いつまでもここにおったらいかんのじゃないかな？」

「『あちらの世界』？ え？ あの、ここドコ？」

しかし、炎は質問に答えずにゆらりと上昇していく。

「ま、待ってよ！ 帰り方を教えてよ！」

「そうは言っても、ワシはろうそくの『火』だからのう。突き当たりの人形にでも聞いとくれ」

「ちょっ……待って！ 話が全然みえないよ。突き当たりの人形っ

て何？」

「文字通りじゃて。廊下の突き当たりにおるよ」

それだけ言うと、炎はポツと音をたてて消えた。

「廊下の突き当たりって……」

ユウは、突き当たりの見えない廊下を見つめた。



木戸は、階段を上りきったところでぴたりと止まる。

「木戸？」

「ユウ様が動きました！　すごい速さです！」

すぐ横の廊下を指した。

「あちらからです！　こちらへ向かってきて――」

と、言葉が途切れた。

「……一階に移動しました……」

「瞬間移動っ!？」

みっちゃんが思わず叫ぶ。

「狭間の世界は、時間の流れも空間構造もこの世界と違うからね……」

…

「なあ、木戸はんの能力でワイらも瞬間移動とかできんの？」

その問いに、木戸は首を振った。

「この空間自体も、狭間の世界にありますので、ユウ様との距離は変えられないんです」

「？」

「要は、瞬間移動ができないということさ。とにかく下へ行こう」

四人は、回れ右をして今上った階段を駆け下りていった。

一方、ユウはというと、水でできた大蛇に追いつけられていた。

「な、なん……屋敷になんであんなヤツがあああ!？」

「んもう、ちょっと。つれなくしないで。こっちいらっしやいよ
ボーヤ」

低く太めの声が艶っぽく誘う。

「喋ってるし! カマッぽいしー!」

後ろを気にしつつも、ユウは全力疾走していた。

こんなスピードを出したのは、過去、兄の地獄の特訓から逃げ出した時以来である。

今なら世界最速の記録を叩きだせるのではないかというくらい、ユウは必至に逃げていた。

ろうそくの火に教えられたとおり、廊下の突き当たりを目指して、終わりの見えない廊下をマイペースに歩いていたら、そこへいきなり水が降ってきた。

ぐしょ濡れの顔を上げると、天井に張り付くように蛇が這っているではないか。しかも、透明で透き通っている。

「わー……綺麗だなあ」

と、思わず呟いたのが運のツキ。

蛇は天井からユウを仰ぎ、透明な舌をチロチロと出した。

「あらゝ、嬉しいわ。ボーヤもなかなかイケるじゃない。ねゝえ、アタシと遊ばない？」

「……え？」

後ろから伸びてきた尻尾に、あっという間にがんじがらめにされ、宙へとさらわれる。ユウの頭はすぽっと水蛇の体に埋もれ、空中で溺れるという不思議な体験をした。

もがいて暴れて、やっこの思いで蛇の締め付けから脱出し、ユウにとって命がけの追いかけっこが始まった。

「待ってゝえ」

「いやだぁー！」

捕まったら、溺れながら締め上げられる。

止まったらカマ蛇の餌食にされる。

ユウでなくても、巨大な蛇に追われれば誰しも逃げるのは必至だ。

「もゝう、照れ屋さん——あっ、ボーヤ落ちるわよ」

「っ!？」

ガクンと足元が沈んだ。

——こける！

いや、フワリと浮く感覚になった。直後、体内の血液がすべて上空へ消えていくのを感じた。

足元に、暗闇へ続く穴が突如出現したのだ。が、それに気付いた時には、ユウは落下していた。

「……？」

しばらく、ボー然としていたユウ。

「じわじわと思考回路が回復し、ようやく自分がどこにいるか理解した。

蛇が、その巨体を器用にくねらせ、素早くユウの体に巻き付けて落下を防いでいたのだ。

「ふう。危うく奈落の底へ落ちるところだったわね、ボーヤ」
蛇は高々とユウを掲げる。

「あ、ありがとう……」

「まあカワイイ！ アタシのことは●※←■♪↑って呼んで」

名前の部分だけ発音がよくわからない。

「テュ、リィ……蛇語？」

「↑■※←●よ」

気のせいかな、さっきと発音が微妙に違う。

「タァ、ラ……ターラさんでいい？」

「あらうれしー。そう呼ばれるのは初めてー。ボーヤのお名前は？」

「春日ユウ」

「春日ユウちゃんね」

「ユウ、でいいよ」

「じゃ、ユウちゃん、さっそくアタシと遊びましょ」

「や、ちよっ……そうだ！ ボク廊下の突き当たりに行かなきゃならないんだ！ そこにいる人形に――」

すると、ターラは「あら、そうだったの」と意外にあっさりと納得した。

「なら、アタシを跨いでいけばすぐよ」

「ターラさんを跨ぐ……？」

ユウは、その巨体を眺めた。胴の高さだけでも、ユウの身長のはある。

それを跨げという。

ターラはユウの表情を見てチロチロ笑う。

「だあ〜いじょうぶよ。こうすればユウちゃんにも跨げるから」

ターラは、ユウをそつと下ろして、自らはみるみるうちに小さくなった。

「さあ、これで行けるわよ」

小さな蛇は見上げた。

「行けるわよって……」

蛇といいこの屋敷といい、どういう構造しているのだろう。

ユウは、もうわけがわからずに蛇に従う。

高めに足をあげ、大股で蛇をまたこうとする。

「あ、そうそう。突き当たりの人形によろしく伝えてね。いつでも遊んであげるわよって」

「は？」

「会いに行くんでしょ？ よろしくね」

ターラは、水晶のような目をキラキラさせてウインクした。



「今度は屋根裏です！」

「食堂に移動しました！」

「応接室です！」

ユウに振り回されて、ミサギたちは屋敷中をあちこち駆け巡った。ユウの動きはやかいで、止まったかと思っただけで行けばその目前で姿を消し、そうかと思えばまた止まるの繰り返しであった。

やがて体力も限界を見せ、みっちゃんとミサギはぐったりとその場に座り込む。

体力に自信でもあるのか、木戸はケロリとしてミサギに恭しくハシカチを渡し、ハルは依然ユウを捜してチョロチョロしている。

「……じつとしとられへんのかユウどんは……！ あちこち……どこ行こうとしちよるんや……？」

「そりゃ……出口じゃないのか……？」

ミサギは息も切れ切れに額の汗を拭いた。いつ作って持ってきた

のか、木戸がアイスティーを彼に渡す。

その時、木戸がふと気付く。

「出口……？」

その一言につられ、ミサギも思わず口を開ける。

「……あ！」

「なんやあ？」

「突き当たりの人形だ」

「は？ なんやて？」

「突き当たりの人形のところだ。いくぞ！」

ミサギはアイスティーを一気に飲み干して、先頭きって走り出した。

到着した所は、封印したアヤカシの『目』の保管庫の真ん前であつた。

アヤカシがいると思うと、普通の扉も不気味に見える。
みっちゃんは寒気に身を震わせた。

「な、なあ……ここに『突き当たりの人形』があるんかいな？」

「ああ。狭間の世界では、ここに突き当たりの人形がいる。

狭間の世界からこちらに戻るには、絶対にあの人形のところに行かなければならない。

多分、ユウ君は狭間の住人に教えられてここに向かっているんだ」

「狭間の住人……ミサギどんも迷い込んだことあるん？」

「僕は迷っていない。昔、探険したことがあるだけだ」

ミサギは『探険』の部分を強調して言った。

「アヤカシの封印が解けたりとかせえへん？」

「平気さ」

みっちゃんはミサギの指す廊下の柱を見た。

そこには、古びてボロボロになった札が何枚か貼られている。

「ここは強力な結界を施してあるから、アヤカシは外からも内からも出られやしないよ。ただし、人間も入れないし出れないけどね」

「なんじゃそりゃ？」

「頑丈にするためには仕方がないんだよ。条件を増やせば、それだけ結界は脆くなるんだ」

ハルが、床から壁にかけて念入りに匂いを嗅ぐ。

「ユウ、きた」

「うまく先回りできたようだな。木戸、狭間への扉を開けてくれ」
「承知いたしました」



「やあ、また来たね」

ユウは、笑顔で自分を迎えてくれた人形を凝視した。

ユウと変わらない背の丈。

燕尾服にフリルのついた袖のブラウス、膝上ほどの短いズボンをまとい椅子に座っている。

そして、笑顔で喋っていた。

人と見まごうほど顔のつくりは精巧なのに人形とわかるのは、覗く足の関節部分が木のネジで固定されていたからだ。

「ボク、ここに来るの初めてだけど？」

人形に驚きつつ言う、人形はゆっくりと否定する。

「いいや、前にもきたよ。丸いサングラスをかけたやつと一緒にね」
「……みっちゃんだ！ あれ？ けど、あの時は――」

「『こんなところに来ていない』？」

言おうとしたことを先に言われてしまった。

「そう感じたろうね」

人形は、カタリと音をたてて腕を伸ばす。

「だけど、みいんなここへ来て、僕の開いた扉から自分の世界へ戻るんだよ。覚えていないだけなんだ。今回は、僕が君を呼んだから覚えてるし忘れないけどね」

「君が、呼んだ？」

「うん……君に伝えたいことがあって」
「ボクに？」

すると、人形は、濃い翡翠の瞳を真っ直ぐユウに向ける。

「そう。遠くない未来の話。

黒い波が君を飲み込んでしまうこと。

それは底無しの闇で、凶々しく、暗く、冷たく、誰にも声が届かない。

君は避けることはできないよ」

「！」

「だけどね、絶望ばかりじゃない。

覚えていて。必ず、君に手を差し延べてくれるモノがいるから。だから、そのときは、ちゃんと手を延ばして助けを求めるんだよ」

ユウは、自分の夢の出来事を誰かに話したことはなかった。ましてや、目の前の人形とは初対面だ。

「黒い波……どうして、それを？」

すると、人形の隣で扉が揺らめきながら現れた。

「あ、お迎えがきたようだね。さあ、帰る時間だよ。この扉の向こうで、君を待っている人達がいる」

「待って！ 教えてよ！」

しかし、人形は黙したまま扉を開き、ユウを導いた。



「ユウ！」

「ぬあっ!？」

ユウが扉から姿を現すなり、ハルが横から飛び付いた。

ユウの方は、逃げる間もなくバランスを崩し、その場に倒れ込む。

「ユウ君、無事かい？」

「ケガとかしとらんか？」

ミサギとみっちゃんが駆け寄る。

「は、はい……何とか」

後頭部にできた大きめのタンコブをさすりながら起き上がる。

二人に支えられるように立ち上がり、ユウはすぐ後ろを見た。

ちょうど、木戸が扉を閉めたところであった。

ユウが駆け寄ると、溶けるように扉は消えていった。

「まったく。どうやって行ったか知らないけど、狭間の世界には不用意に行ってはだめだろ！　どんな影響を与えるかわからないところなんだから！」

先程の心配顔はいずこへか。今にも噛み付きそうな勢いで、ミサギはユウに怒鳴った。

ユウだけでなく、その場にいた全員が思わず縮こまる。

「……ごめんなさい」

「み、ミサギ殿、ユウどんかてそんな悪気があってやっとなるわけじゃ——」

「悪気があったらなおさら質が悪いよ！」

「うう……」

ミサギはもはや鬼の形相だ。
ユウはひたすら小さくなる。

「ボ、ボクも、よくわからなかったんだ……突き当たりの人形に呼ばれたみたいで……」

「あの人形に？」

「ボクに伝えたいことがあるって言って……ました」

ミサギは、思案顔で話を聞いていたが、
「……そう。なら、いい」

それ以上何も言わず、きびすを返して歩き出した。

「はれ？　どんな話か聞かんでええの？」
みっちゃんは、少しうずうずしている。

「人形がわざわざユウ君だけを呼んだんだ。僕らはおそらく知らなくとも大丈夫だよ。」

それより、ユウ君のせいで、今日の予定が大幅に狂ってしまったよ。ハルから話を聞くんだろう？」

ミサギはすたすたと先へ進んでいく。

「何ボサツとしてるんだい？　置いていくよ」
「は、はいいい！」

ユウたちは、慌てて駆け足でミサギの後を追いかけていった。

第9話 狭間の世界2（後書き）

どもです。あとがきではじめましてです仕神です。

蒼の魔法士をここまで読んでくださりありがとうございます！

ええと……第9話は、7月1日に更新すると宣言しておりましたので、本日追加させていただきましたが、思うところが出てきてしまったので近々書き直すつもりです（時間に余裕があったら。本当に申し訳ありません。

第10話　そして歯車は動き出す

ずっとつけっぱなしのテレビから、朝も早くに女性アナウンサーが笑顔でニュースを届けている。

外は爽快なほどに青く澄んだ空で、いつもの一日が始まると誰もが無意識に感じていた。

速報の原稿が舞い込むまでは。

「ただいま入ったニュースをお伝えします。大阪府、青森県など各地で相次いで起きている怪奇事件に新たな被害者です。

本日午前二時前、広島県K市の神社で、近くの書店アルバイト、山川トシユキさん二十八歳が遺体で見えられました。

山川さんは、体中を鋭利な刃物で切り付けられ、体の一部が持ち去られて――」

その後、事件現場からの中継が入り、テレビは一気に緊張感が高まった。

「こちら現場です。遺体は境内……で見つかり、被害者のと思われる……が……に置かれ……」

「日保田さん？　……えー、音声が途切れているようですね」

映像には、暗鬱とした空と立入禁止のテープが張られた神社が映し出される。

そのテレビの横で、携帯が着信のメッセージを光らせながら震え

ていた。

部屋の中は、その主の性格を表すかのように、無造作に脱ぎ捨てられた服やらゲーム機やらが散乱し、そして人の気が全くなかった。

ぴちよん

どこかで水音がした。

誰もが気づかないような細い路地を通り、ビルとビルの隙間を進み、突き当たりの茂みを抜けた先に、今や事件のおかげでマスコミが溢れる神社があった。

ぴちよん

水音はその近くで聞こえた。

遅れてきたリポーターが、鳥居をくぐろうとして、ふと空を仰ぐ。朝の陽が鳥居を眩しく照らす。

だが、形がおかしい。

鳥居の頂点から、によつきりと枝が生えている。

ぴちよん

水はそこから落ちていた。

静かに、鼓動のように水溜りを広げていく。

ゆっくりと、ねっとり、赤い雫は落ちていた。



「いいか、ハル？」

屋敷に無数ある部屋には、場所のためか薄暗い部屋がいくつかあった。

窓がなく、照明器具さえついていない部屋はまさに用途不明。

だが、敷地面積が無限大に近いこの屋敷では、そういう部屋があっても問題はないのだろう。

ミサギでさえ「へーそんな部屋あったんだ」とたいした興味もない声で感心するほどだった。

そんなある一室。

真っ暗な部屋でろうそくを一本立て、それらしい雰囲気を充分に醸し出した中にユウたちはいた。

もちろん怪談話をするためではない。

かび臭さを少し漂わせるこの部屋は、暗がり求めて迷ったハルが見つけ、ここなら彼も落ち着いて話ができるだろうということで全員集まったのだ。

ミサギとみっちゃんが見つめる中、ユウはハルをニメートル以上離して座らせ、淡々と質問を繰り返している。

「もう一回訊くぞ。ハルはどこからきたんだ？」

「う……うー……わかん、ない」

ハルは頭を捻りながら声をしぼり出す。

「じゃ、その体にとり憑く前は何してたんだ？」

「わかんない」

今度はキツパリと応える。

「……ハルはアヤカシなんだよな？」

「オレ、アヤカシ？」

その瞬間、ユウの頭部付近でプツンと音がした。

「っだあああ！ ダメだこりゃあ！」

約一時間、ユウはあれこれアヤカシについて尋ねたが、どんなに易しい尋ね方してもハルの脳みそは理解してくれなかった。

ことごとく「わからない」と言われ、揚げ句、最後の質問には逆に質問で返されてしまった。

「……やっぱり」

ミサギもため息をこぼす。

「ほんの少しでも興味を持った僕が馬鹿だった。こんなことならさっさと封印すればよかったよ」

もはや一欠片の興味もない彼に向かってミサギは淡々と吐き捨て、ユウは小さくなる。

しかし、ここまで理解能力に欠けるとはミサギも予想だにしないかったろう。

さすがのみっちゃんも苦笑していた。

「にしても、質問の意味すらわからんちや、アヤカシの考えとおことは人間と次元が違うんかのう？」

「もしくは、とり憑いてる人間の脳がすさまじく阿呆という可能性も考えられるな」

「そ、そうなのか？」

ミサギの阿呆発言に、ユウは思わずハルに尋ねた。

「わかんない」

『……』

ミサギの言葉が現実味を帯びた。

そこへ扉を叩く音が全員を振り向かせる。木戸だ。

外は眩しいほど明るい。ユウは思わず目を細めた。

廊下から流れ込んだ空気に、ろうそくの火がかき消される。

木戸は、ミサギに電話がきたことを知らせた。

「ユウ君、この責任はあとできっちりとってもらうからね」

気が済んだら応接間に戻るように。そう言い残して、ミサギは木戸とともに出ていった。

扉が閉まり、部屋は元の暗闇に戻る。

「ああああどーしよー！　せ、責任て何やらされるんだ！？」

「きつと、世にもおっそろしいミサギ殿のお小言やろなあ」

「ううううう……」

みっちゃんが優しくポンと肩をたたく。

ユウは救いを期待して見上げたが、ご愁傷様といわんばかりに深く合掌された。

「う、うわああああん！」

ユウは走り出した勢いでみっちゃんを突き飛ばし、そのまま部屋を飛び出した。

「ユウ！」

ハルもそのあとを追って行った。

部屋には、腹を抱えて悶えるみっちゃんが残る。

「ぐう……ユウどん……みぞおちは、はん……そく」



ミサギが執務室に着くと、木戸が「総寮寺様からです」と、電話を差し出す。

「なんともちようどいいタイミングだな。手間が省けた」

ミサギが受け取った電話からディスプレイに映像を出す。そこには、身を乗り出してこちらを凝視している中年元帥が映っていた。

「あー無事だ、よかった」

ミサギの顔を見た総寮寺は、安堵したように大きく息を吐いた。

「何、してるんですか？」

「あ、いやその……」

総寮寺は表情をかたくして口ごもる。

「――最近さ、テレビ見てる？」

「見ません。話の切り出し方最悪ですね」

唐突な話題をミサギはスパッと切り捨てた。

「えー？ テレビは情報の宝箱だよ。見て損はないよ」

「テレビは思考を鈍らせるから見ません」

ミサギの言い訳に、総寮寺は口を尖らせた。

「そんなことより、僕はあなたにお願いがあるんですよ」

「な、なんだい？」

彼の顔が茹でダコのように赤くなる。

ミサギが笑顔を見せるときは間違いなく、下手をすると今の地位から転がり落ちて職を失いかねない面倒事だ。そうでなかったら、自殺衝動に駆られる愚痴である。

どちらにしても、ミサギの微笑みはロクなものではない。

クビか、自殺か。

どちらかといえばクビの方がマシなんだけど、ああでも妻と娘を食わしていけなくなったら二人に殺されるかも。って、結局選択肢なし？ やっぱ死ぬの？ 死ぬのか？

総寮寺が祈っていると、彼の運命——ミサギの声が比較的優しく言った。

「『彼』のデータ、持ってますよね。全部ください」

「え、彼って？」

声が裏返っている。

ミサギは、今日も既にたくさんついた溜め息をここでも吐く。

「……白々しいですね。ま、ないならそれでもいいですけど。でも、珍しい。元帥のことだから当然、彼のことを調べていると思ったのに。何せ、あなたのウラのある仕事のせいでこっちはいつもいつも——」

「わー！ わかった！ わかったから！ だからそれ以上攻めないで、言わないで！ ただでさえ妻と娘に殺されそうなのに、君に面と向かって言われるとホントに死にそうなんだ！ 頼む、言わないでくれ！」

総寮寺は青ざめながら懇願する。

「……お望みとあらば、いつでも叶えますが」

「やめてっ！ ほ、ほら、データ今送ったから！」

「なんだ、あるじゃないですか」

「な、ないなんて言っていないよ……」

震える総寮寺をよそに、ミサギは送られてきたデータを一つずつ

確認する。

ハルの本名や出生から、親に内緒で魔法士になったこと、家出をした理由、現在はミサギの屋敷にいることまで、細かく記載されていた。

「へー、さすがは元帥。彼の家出の事情まで細かいですね」

「そーなんだよ。近親相姦なんて最近の子は……って、いやそれは言わなくていいんだ。それを見たときにちょっと引かなかったんだけど、スエハ……今はハル君だっけ、彼は魔法士なんだって」

総寮寺は含みのある口調でミサギを覗き込んだ。対し、ミサギはちらと視線だけを向ける。

「被害者が全員魔法士だから、青森、大阪での怪奇事件と関わりがあるかもしれない？」

「!」

ミサギの突いた質問に、総寮寺は意外だと言いたげに驚いた。

「事件の事……知ってたの？」

別に、テレビでなくとも情報はいくらかでも流れ込んでくる。ミサギは当たり前のように理由を述べた。

「さすがに魔法士であることは公開されてないみたいですけど。」

元帥、民間人はテレビしか見ないとかいう考えはいい加減捨てたらどうです？」

「む……すまん。で、君はどう思う？」

懲りずに訊いてくる総寮寺に、ミサギは少し考える。

「彼が死亡したのがおおよそ一週間前。最初に青森の事件が報道さ

れたのが……いつでしたっけ？」

五日前、と総寮寺は別の資料を取り出した。

「じゃ、ハルが仮に事件の被害者だとすると、最初の犠牲者ということになる」

ミサギが物思いにふけっていると、総寮寺は落ち着かない様子でキーボードをつつき始める。

「なあ東条く。これ、何気なく私の部下が担当なんだ。次の依頼として君にサポートを頼みたいなーなんて……」

「嫌です」

にべもない返事のミサギ。

「あー……だよねえ。魔法士が狙われてるんだもの、君も例外じゃないもんね、仕方ないよねえ」

ミサギの眉がぴくりと動く。

「それ、どういう意味です？」

「え？ いや、別に……」

「何ですか、僕が狙われてやられるとでも？」

「い、いやややや、そういうわけじゃ——ただ、君も気をつけなきゃいけないんだあって」

しかし、それがミサギの癪に障ったようだ。

「わかりました。犯人が捕まれば問題ないんですね？」

「え、ちよっ……無理して引き受けなくても——」

「無理していません。この依頼、引き受けました」

ミサギはブチリと通信を切った。



「っはあゝ、すっきりしたゝ」

晴れやかな表情でみっちゃんが戻ってきた。

ユウたちはミサギに言われたとおり、応接間に移動していた。

ソファには体育座りをしたユウがおり、ハルも少し離れたところで同じ格好をしていた。

しかし、どこか様子がおかしい。

よく見れば、ユウは泣きじゃくっているし、ハルに至っては無表情のまま機能停止したロボットのようにはぴくりとも動かない。

「なんや、どないしたん!？」

ユウは彼が戻ってきたのを認めると、鼻をすすって睨みつけた。

「遅いよみっちゃん!」

「や……す、すまんすまん。最近ベンピ気味だったもんで。久々に大モノがドンときたんで時間かかってもうた」

「うっ、下品!」

ユウの鼻垂れた顔といい勝負である。

「で? ミサギ殿は?」

聞いた途端、ユウは青ざめて顔を背けた。

「しっし仕事……木戸さんと二人で出かけちゃった……」

ユウの口ぶりからすると、どうやらおいてけぼりをくらったようだ。

しかし、それでどうしてこんなに怯えるのだろうか。
不思議に首を傾げると、ユウがすぐに答えを出した。

「あんな不機嫌なミサギさん初めてだ……みっちゃんがいきなりトイレなんか行っちゃうから……うう」

ユウは再びボロボロと涙を流す。

「ユ、ユウどん……まさか、ひとりであのミサギ殿の毒舌に耐えたんか!？」

「も、もうどんだけ辛いんだよアレいっそ死んだがマシだと何回思ったことか……!」

一気に弱音を吐き出してから、また鼻をすする。

ハルもしっかりと被害を受けたらしく、眼前で手を振っても耳元で大声を出しても反応しなくなっていた。

「あ……す、すまん!　ほんに悪かってん!　よう耐えたのうユウどん、えらいで!　ホレ、とにかく鼻拭きい」

ユウは差し出されたティッシュに手を伸ばしておもいきり鼻をかむ。

気のせいかな、みっちゃんが声をあげたように聞こえた。

よく使うティッシュなのに、今日はいつもとかみ心地が違った。
柔らかな肌触りの中にも丈夫な厚みがあり、なおかつしつとりと

香る――。

「……あ」

ユウの手はティッシュでなく、みっちちゃんのワイシャツを掴んでいた。

「ゴメン、みっちゃん」

「いや……ええねん……」

今度はみっちちゃんが悲しげに顔を背けた。

「――ほれ、お前さんもそろそろ復活しい」

みっちゃんはハルの頭をぽんぽん叩いた。

すると、今まで無反応だったハルが、急に周りをキョロキョロし、ユウを見つけて背中にひつついた。

「なっ、何すんだよっ！」

ユウは反射的に離れようとする。

「ユウ、いかないの？」

「行くなってどこへ？」

「ミサギ、しぬにおいがする」

「へ？」

唐突な言葉に、ユウは間拔けな顔で返事をする。ピンとこなかったようだ。

逆に、みっちちゃんの方は驚いていた。

「死ぬ……て、ミサギ殿に何かあったんか!？」

「これからしぬ。ミサギ、つよいやつのもとになった。ころされる」

「け、けど、ミサギさんはめっちゃ強いからさ、逆に返り討ち
ゝとか……」

「てきはもっつつよい」

ハルの表情は、さっきまでと比べ真面目だ。

「それ……ヤバいんとちゃう？」

「ミサギさんに知らせた方が……」

二人に冷たい汗が流れる。

「あ、でもちよい待ちや。ここから出るの木戸はんがいなきやでき
へんのやろ？」

「うえっ！？　じゃ、どーすんだ？」

すると、ハルは黙って壁際に立った。

右手に巻いた包帯をぶち切り、巨大な爪を出したかと思うと、空
を斬った。

その向こうには虹色の空間が見える。

「ハル、すっげ……」

ハルは嬉しそうにユウを振り返る。

「ユウがのぞんだ。オレ、かなえるから。いこう。オレ、あんない
する」

「うん、頼む」

「ちょい待ちい！」

「まとも、引き止めたのはみっちゃんだ。」

「何だよ、まだ何か――？」

「相手がミサギ殿より強いのか、ユウどんが行ってもしょうがないじゃろ。ここはわしがいくけん」

すると、ユウはムツとする。

「けど、みっちゃん魔法が使えないじゃんか。つか、アヤカシ見えないんじゃないの？」

「んなことないで。それに、敵と戦った経験ならわしの方が上じゃ」「ボクだってアヤカシとは今まで何度も戦っ――ぎゃあ！」

ユウが突然悲鳴をあげた。

話している途中で、ハルがユウを抱え込んだのだ。

オタオタするユウをよそに、ハルはユウをぎゅうっと抱きしめる。

「ぐっ首！ はな、放じ――っ」

「ユウもいっしょでないとやだ！」

力んで言った拍子に、ユウはカクンと白目をむいた。

「あ、オチた」

「オレ、ユウといっしょがいい！」

喚きだすハルを、みっちゃんは慌ててなだめる。

「わっ、わあーったから！ とにかく案内頼むで！」

すると、喚きから一転、嬉しそうな顔をした。

急かしてみっちゃんに服を掴ませると、気絶したユウを抱えて空間へ飛び込んだ。



虹色に揺らぐ空間の中を、ハルは自在に進んだ。

上下左右の感覚どころか、前進しているのか浮上しているのかもわからないままに進んだかと思うと、ハルが再び巨爪で空間を切り裂いた。

やっこの思いで抜けた場所は、ビルと人でできたジャングルのような場所だった。

見上げて頂上の見えないビルが隙間なく建ち、人が波の如く押し寄せてくる。

少し歩いただけで自分の居場所までわからなくなりそうだ。

「ここ、博多やん」

みっちゃんが、建物に書かれた『博多駅』の文字を見つけた。

「ミサギ、こっちだ」

「つか、降ろせっ！」

「おお、氣いついたんかユウどん」

いつから意識を取り戻したのか、ユウはハルにしっかりと抱かれていて、周囲から注目を浴びまくっていた。

ハルが腕を緩めると、ユウは真っ赤になって飛び下りる。

人込みを見回し、思わず、

「うえ……ぎもぢわどうい……」

吐き気を催して座り込んでしまった。

「なんやのん、酔ったんかい？」

「ユウ、だいじょうぶ？ オレ、ユウせおう」

「頼むがらやめで……」

「しゃーないなあ。どっか手頃な……おっ！」

みっちゃんが辺りを見渡すと、ちょうどよいところに車が停められていた。

数分後、三人は『株式会社みやこ組』と書かれた車で道路を突っ走る。

「みっちゃん……これって泥棒じゃ……？」

「ふぁっははん！ 後で返せば問題ぬぁいんじゃよ！」

「大アリだろあれはー！」

ユウは、後方から十数台もの群れをなして追いかけてくる車を指して叫んだ。

「なんでよりによってヤクザの車なんだよー！」

しかも、かなり質の悪い組織だったらしい。

窓から身を乗り出して銃を連発し、罵声、怒声をばらまいている。

「こっ、怖え……ものすげ怖え……」

青ざめるユウをハルが心配そうに見つめ、やがて、後ろをキツと睨む。

「ユウこわがってる。……あいつら、じゃまだ」

ハルは窓を割ると、次の瞬間には外へするりと抜け出していた。

「ちょっ、ハル！？」

ユウは叫んだが、ハルの姿は既になかった。

それから三秒もしないうちに、後方が閃光に包まれた。

爆発と地鳴りと、悲鳴のような音が混ざってユウの耳に届く。

ハルは、そのあとにゆうゆうと車に追いつき戻ってきた。

体中から焦げた臭いが漂う。

「ユウ、もうこわくない？」

おそろおそろ後ろを除き見るユウ。

炎上する車が遠ざかるのを見て、口を開けて絶句せずにはいられなかった。

「……これ、報復ある……絶対ある……」

「ユウ、まだこわい？ まってて、いま——」

「行くな！ これ以上やるなっ！ 頼むからおとなしくしてろ！」

必死に止めるユウ。

「なあ、この先どっちいくんじゃあ？」

みっちゃんが聞いてきた。

前方を見ると、道は二手に分かれていた。しかも、このままだと突き当たりに激突する。

分かれ道までもうほとんど距離はない。右か左かを言ってくれば済むものを、ハルは、

「まっすぐ」

と、一言。

非常識——いや、人の常識を持たぬアヤカシは恐ろしいことに無邪気に前方を指している。

だが、スピードを落とさずに迫るみっちゃんはさらに怖い。

「ぬう、まっすぐとはシユールな選択よのう」

「何言ってるんだ！？ まっすぐは無理だっの！ みっちゃんもスピード落として——って、ぶつかる！」

「おまかせいっ！」

みっちゃんをハンドルを右に切った。アクセルをさらに踏み込み、その動作に車は道路をスライドする。タイヤが悲鳴をあげながら、直角に曲がる道を見事に抜けた。

「ぬっふくん、どうじゃワツシの腕前は……ありゃ？」

ドリフトから生まれた遠心力で、後ろの二人は目を回していた。

「せ、世界が回る……」

ユウは頭を振って持ち直そうとした。
その直後。

ドガンと爆発のような音と共に、車は大きく揺れて停車した。

「なんじゃ!？」

みっちゃんが車から降りて見ると、屋根が大きくへこみ、そこから影が起き上がった。

「っふ、助かったあゝ」

降りてきたのは、年端もいかない女の子だった。

第11話 ライセとゼン（前書き）

前回の更新からかなり遅れてしまいました。
待っていた方もそうでない方も、申し訳ありません。

第11話 ライセとゼン

空を切り裂くように走る都市高速は、昔の小説に出てくる未来都市を彷彿させた。

あまりの眩しさに顔をあげていられない太陽が、ゆっくりと優しい色へと変わり始め、それらを背後にして舞い降りた少女は、さながら天使のようだった。

その、最近の天使は、どうやら人間の流行に敏感らしい。

ピンクと黒のチェック柄のスカートにパーカー。そして、フリンジのブーツが白く細い足を際立たせている。

頭には丸くて大きな二つの髪飾りを付け、陽の光でキラキラ反射していた。

ボンネットを伝って車から降りると、少女は軽く服をはたく。

「助かった。ありがとね」

ユウより幼い笑顔を見せる。

無邪気に笑う少女を見ると、空から降ってきたことなど忘れてしまいそうだった。

そこへ、後部座席から目を回したユウが姿を現す。

「うう、さっきの衝撃は何だったんだ？」

「あ、ごめんなさい。あたしが――」

少女は振り返り、ユウにも謝罪の言葉をかける。

その時、少女とユウの視線が合った。

おそらく、この瞬間を『運命』と呼ぶのは後にも先にも彼女だけ

だろう。

その口から語られる出会いのシーンには花が咲き乱れ、昔の少女漫画さながらのシチュエーションになるはず。

それほど彼女の表情は輝いていた。

ユウは、見覚えのある顔に、思わず指を差してしまう。

「……君、前に会った……」

「あたしの王子様あゝ!!」

「!?!」

叫ぶなりユウに飛び付く少女。その勢いで、ユウは車に逆戻りした。

「会いたかったあ! あたしの愛しい蒼髪の君!」

車外にまで聞こえてくる叫びから、彼女は力のかぎりユウを抱きしめていると想像できる。

でなければ、苦しそうにばたつかせていた足が急に力尽きることはないだろう。

「な、なんや? どーゆーこっちゃねん?」

みっちゃんが後部座席を覗き込む。

そこには、有無を言わず押し倒して締め付けている少女と、瀕死状態ながらもギブアップを訴えて座席を力なく叩いているユウがいる。

「ゲホッ……えっと、何、君誰だっけ? なんでこんなトコいるんだ……?」

締め付けられたショックで記憶が飛んだユウ。

「やだァ。恋人の顔忘れちゃダメよ、ダーリン。今から式場を見に行くんでしょ？」

「いや、絶対違うだろそれ！」

幸せ妄想爆裂開催中である彼女の発言を力いっぱい否定する。だが、彼女は全く聞いていない。

「覚えてる？ 二人が初めて出会った時のこと……あたしがアヤカシに襲われてたところを、颯爽と現れたあなたが助けてくれたのよ」少女は嬉しそうに説明する。

その瞳は夢を見ていてうつとりとしていた。

「かっこよかった……傷つき意識が遠のきそうなたたしの前に、後光を背負って凛々しい王子様が現れて、『助けに来たよ』って、そっと優しく抱き上げてくれて……」

「……なんか話が変な方向いつてない？」

彼女の回想が間違った内容に脚色されている——もはや妄想と化していることに気付いたのは、面識のあるユウだけだ。

「あたしライセ！ 王子様はあたしを迎えに来てくれたのよね！ お名前は？」

圧倒されて、ユウはしどろもどろに名乗る。

「か、春日ユウ……その、王子じゃないんだけど」

「ユウ様ね。謙遜しないで。あなたは間違いなくあたしの王子様なんだから！」

「は、はぁ……」

ユウが勢いで完全に負けていると、突然、後ろから鋭い爪が現れた。

ライセに突き付けられた爪は、違う事なく喉元を狙っている。ハルだ。

「おまえ、ユウからはなれろ！」

ギラギラした紅い瞳がライセを映す。

自分へと向けられた異形の敵意に、ライセは少女らしい悲鳴をあげるどころか、逆にハルを睨み返した。

「あんた何？ あたしとユウ様の邪魔をしないで」

「おまえ、きけんだ。ユウからはなれろ！」

「ウツザ！ しかもユウ様を呼び捨てってムカつくー！ あんたこそ消えなさいよ！」

言うなり、ライセの髪飾りが飛んだ。

不意の攻撃は、ハルのこめかみを強打した。

手のひら大の水晶は、ライセの意思そのもののように自由自在に外へと飛び出した。

再び襲い来るそれを避けて、ハルも車のドアを破って飛び出す。

「ハルっ！」

「やっちゃえ！」

ライセは車の屋根に飛び乗り、水晶を操る。

ハルを翻弄しようと二個の水晶は彼の回りを飛び、隙を突いては攻撃を繰り返す。

対するハルも、攻撃を鋭い爪で弾いていく。

「あーもうっ！ 早く死ねっ！」

ライセが地団駄を踏み、その威力に車の屋根はどんどんへこんでいった。

と、次の瞬間。

ハルは動きを止める。いや、止められた。

「!？」

ハルが視線を下げると、胸から黒い錐が突き出ていた。それが動きを止めていた。

それから、ハルはゆっくりと後ろを振り返る。

錐は、ハルの影から延びて背中に刺さっていた。

身動きができないまま、背と胸、そして口からおびただしい血が流れます。

「ハ、ハル!？」

ライセとハルの後を追って外に出たユウは、眼前に広がる光景に息を呑む。

「ライセ、何遊んでるんだよ」

「ゼン！」

ライセが見上げた先に、彼女と同じくらいの少年が立っていた。

ゼンと呼ばれた黒髪の少年は、港に停められた一隻の大きな船の先に立っていた。

左の手では、逃げた猫を捕まえるように、自分よりも大きな男の襟首を掴んでいる。

それは奇妙で、不思議さよりも滑稽さが先立っていた。

しかし。

信じられるだろうか。先程から、周囲を畏縮させるほどの冷えきった威圧感を、たった十歳たらずの少年が出しているのである。

ユウもみっちゃんも、無意識のうちに後退っていた。

「赤目か」

ゼンと呼ばれた少年は、ハルを一瞥してつぶやく。

くいつと指をあげると、ハルにさらに錐が十数本突き刺さった。

「ぐっ……がああっ！」

紅くなってゆく凄惨な光景。ユウは思わず顔を背ける。

痛みを感じているのだ。

感覚など、とうに機能していないはずの肉体が、少年の操る鋭い錐によって獣のような苦鳴を響かせる。

港に隣接された造船所から巨大な機械音が唸る。それが幸いした。このような光景、どんな騒ぎになったことか。

「ハル、待ってろ！ 今——」

駆けだそうとしたユウの腕を、ライセがぎゅっと抱き捕まえる。

「だーめ！ ユウ様までケガしちゃう」

——何だ、この子の力！？

まるで岩に腕を固定されたようにびくともしない。

ユウはとっさにみっちゃんを見た。

自分の代わりにハルを助けてもらうつもりでいたが、その望みも叶わなかった。

彼も、彼女に掴まれてそのまま動けずにいる。

ゼンは、何度か錐を操ってハルに攻撃した後、諦めたように攻撃を止める。

錐から解放されたハルは、全身を真っ赤に染めて血の海に沈んだ。

「ハルッ！ ハルー！！」

叫んでもまったく反応がない。

まさか、と嫌な予感がよぎる。

だが、

「やっぱ封印しなきゃダメか」

少年の言葉とともに、ハルが力無く顔をあげた。

ユウの、昂る感情がほんの少しだけ落ち着いた。

「ライセ、こんなアヤカシ相手にしないでちゃんと仕事しろよ」

「だってだってえ！ あたしの王子様にやっと会えたのに邪魔すんのよー！」

彼女はユウたちを掴んだまま足をじたばたさせる。

「オレ達は仕事中だろが」

「それはわかってるけどお」

二人が言い合いをしている隙を狙って、突然、男がゼンからの束縛を破った。

転がりながら甲板の縁まで逃げ、眼下のユウたちに向かって声を張り上げる。

「おまえら逃げろっ！ こいつらヤバイ！ さっき来た奴も――」
叫んでいる途中で、男は血を吐いた。

彼の背中から、黒い錐が生えていた。錐は、歓喜するように男の血を飛ばしていく。

ゼンは何事もなかったように首を掴み、手に力を込める。

「っああ……あ！」

「勝手に喋んな。腕の前に首へし折るぞ」

「あー！ 待って待ってゼン。首折るならあたしやる！」

まるで、おもちゃをねだるようにこの少女は人殺しを口にする。

ユウは、自分の感覚が今、本当に正しいのか誰かに聞きたい気分になった。

「き、君達、一体……？ それに、アヤカシのことも、なんで……」
すると、ライセはすまなそうに両手を合わせる。

「ごめんねユウ様。お仕事の事は内緒なの。すぐ終わらせてくるから待っててね」

そう言うと、ライセは一飛びでゼンのいる船へ着地した。

「ちよっ、待って！ さっき来た奴ってのは――」

ライセを追って一歩踏み出した途端、ユウとみっちゃんの周りに

黒い錐が出現する。

交錯して地面から突き出した錐は檻の様相を呈した。

冷ややかな眼が囚われの二人を見つめる。

「おまえら、動くな」

「ちよっとお！ ユウ様に手荒な事しないでよ！ さっさとユウ様の質問に答えてっ！」

「いだっ」

ライセがゼンをひっぱたく。

先程までの威圧はどこへやら、ゼンは肩をさすりながら答える。

「銀髪の女とサングラスの男だよ。オレらを待ち伏せしてたんだ」

それを聞いて、ユウは顔が引きつった。

「銀髪の『女』……」

「……ミサギ殿と木戸はんやな……多分」

みっちゃんが丁寧に解釈した。

「その人達は今どこに？」

「さーね。邪魔だったから、オレが結界術で消した。どっか知らない世界に行っちゃったんじゃないの？」

「ミサギさんが……消えた!？」

自分で言葉にしても全く現実味が湧かない。

気がついたら、全身から力が抜けてその場に座り込んでいた。

「あー、もしかしたら死んだかも」

「ミサギ殿がそげんこつくらいで死ぬわけないじゃろっ！」

珍しく、みっちゃんが強く反発する。

ユウをぐいと引っ張り立たせて体を揺さぶった。

「シャンといい、ユウどん。ヌシはあげん奴の言うことを信じるんか!？」

「う、ううん……」

しかし、ユウの返事は虚ろだ。だらしとしている。

「オレ、結界術は得意だから失敗はしない。あいつらは確実に消したよ」

「ってゆーかユウ様、その銀髪の女とどーゆー関係? あたしという恋人がいながら! あうう……ひどい!」

ライセはあからさまにシクシクと言いながら泣き始める。

そして、急に顔を上げたかと思うと、ゼンと同じく表情を冷やかにする。

「こうなったら、腹いせよ」

男に魔の手が伸びる。

腹を貫かれ、逃げることもできない。

「やっ……やめろ……!」

ライセの手が男を捕らえたその瞬間。

ガラスの割れる音が響いた。

「なんだ!？」

何が起こったのか。

すぐに静かになったが、ライセとゼンは慎重に辺りを見回す。

何も変化はなかった。

「つきゃあ! なによコレえ!？」

ライセが突然叫んだ。

驚いたゼンが振り向くと、伸ばしたライセの腕に、ガラスのようなひびが入っているではないか。

それは、どんどん彼女の体を侵食すると同時に、ぼろぼろと崩れ落ちていった。

「ライセっ!？」

「ゼン! 助け——」

言い終わらぬうちに、彼女の全身が一気にひび割れた。

手を伸ばすも、指先が触れるか否かのところで、彼女はガラスの塵となって砕け散った。

間を置かず、風が彼女をさらっていく。

「……ライセ?」

彼女のいたところを見つめるゼン。

すると、ライセだったガラスの破片が空中で集まりだし、再び人の形を成してきた。

塵は、揺らめき崩れてを繰り返し、やがて銀髪の小柄な人間とサングラスをかけた黒い人間になった。

それは遠くにいたユウにもすぐわかった。まごうことなき美貌はミサギだ。木戸もその後ろに控えていた。

不敵な笑みを浮かべながら、ミサギはゼンと対峙する。

ゼンは、ぼんやりとしか脳が働かないのか、未だ焦点が定まらない目で前を見つめていた。

「へえ、君はしぶといんだね」

ピシリと音がする。

「……おまえ……！」

急に現実へ引き戻されたゼン。

彼の腕にもひびが入り始めたのを見て、ミサギはにやりと口の端を引く。

「君達が僕らに使った結界の術、逆に利用させてもらったよ」

ミサギは、自分の腕をピンと弾く。ゼンの腕のひびが進行した。そして、いつ逃げたのか、いや、きっと彼らに助けられたのだ。ゼンが捕まえていた男は木戸の横でうずくまっていた。

ふと、ミサギがこちらを見た、ユウはそう感じた。

しかし、何か言うでもなく、彼は懷から数枚の札を取り出す。

「さて、君には大人しくしてもらうよ」

「よくもライセを……！ どこへやった？ 返せっ！」

「よく言うよ。自分達から仕掛けてきたんだろうに。ま、君風に言わせてもらおうと、どっか知らない世界に行っちゃったんじゃないかねーの？」

ミサギは、ゼンを真似て言った。

少年はカッとなったが、すぐに抑え込み、左手につけているブレスレットのアクセサリーを外す。

それは、ユウの持つ十字架と同じように大きくなり、少年の背丈を越す大鎌となった。

「おお怖い。まるで死神の鎌だね」

ミサギが揶揄する。

「おまえ、ぶっ殺す！」

ゼンは、持ち柄を中心にぐると円を描いた。

とん、と柄の先を足元に突くと、そこから青白い光が溢れだす。

「来い、アヤカシども！ 餌を与えてやる！」

「!？」

光が辺りを包んだかと思うと、一瞬で場の空気が変わった。

ユウの感じた気配は、明らかに人外の接近を予感させた。

低く、呻くような声が聞こえ始める。地の底から、地鳴りを起こしながら勢いをつけて足元へ上がってくる。

来た、と思った刹那。

世界はシンと静まり返った。

何も変化がない。

全員の緊張がピークに達する。

ふと、違和感がユウの視界に入る。

アスファルトの道の隅に、鳥の頭が生えていた。

目だけが大きく、キョロキョロしながら首を傾げている。

「げっ!？」

それを皮切りに、アヤカシが次々と這い出てきた。

ユウは十字架を構える。

「空・封——」

横からアヤカシが突進してきた。ユウは永唱を止め、後ろへ跳び退く。

「これじゃ結界が張れない！」

封印しようにも、数があまりに多いのだ。

一匹ずつ封印してはやられてしまうのは目に見えていた。

今までにも似た状況は何度かあった。

その時は、アヤカシをまとめて結界に封じて難を逃れることができた。

だが、それはユウ一人であった場合だ。人が何人も近くにいては、彼らを封印に巻き込んでしまう可能性があった。

「ヤバいで……ユウどん、こっちや！」

「でも、ハルとミサギさんたちが！」

逃げようとするみっちゃんだが、ユウは後ろを振り返って叫ぶ。

ミサギと木戸はアヤカシに囲まれ、ハルは血を流しすぎたのか、両者とも動けずにいた。

「えーから早く！」

囲まれきる前にみっちゃんがユウの手を引いて突破を試みる。

それをゼンは逃さなかった。

「させるか！」

ゼンの鎌が空を裂いた。
標的とされたのはハルだった。

鎌は重い音を起てて背中に突き刺さり、その衝撃にハルは大きく
痙攣する。

「ハル！」

「立てっ、おまえにも餌をやる！　ご馳走だぞ、そこの二人を喰え
っ！」

ゼンの声に応えて、ハルはゆっくりと起き上がる。

「うぐ……ぐう……」

苦鳴を漏らしながら、背に刺さった鎌を抜く。顔をあげると、ユ
ウがそこにいた。

「ハル……？」

「……………」

紅い瞳は、餌を見つけて歓喜に歪む。

ぐるおおおおああああ

血にまみれたハルは、人とも獣ともつかない雄叫びをあげた。

第12話 暴走

ハルは尋常を超える速度で突っ込んできた。

「ハルやめろ！」

「バカッ、ユウどん……！」

ユウとみっちゃんの叫びが重なる。

正面から止めようとしたユウをみっちゃんが引っぱり、バランスを崩して二人とも倒れる。

紙一重のところでハルが突き抜けた。

ユウの頬に、熱い痛みが走る。

「やめろハル！ わからないのか！？」

しかし、ハルは群れの中でアヤカシと一緒に獲物を狙う眼でユウを見つめていた。

「無駄じゃて！ 聞こえとらんよ！」

「だけどっ！」

みっちゃんの言うことは間違っていない。だけど――と、ユウは可能性を見出だそうとする。

人の形でありながら、人とは思えぬ行動と力のハル。

訝しくも思いながら、得体の知れぬうちはおぞましくも「姿は人ののだから」と腐臭も我慢した。

アヤカシが死んだ人間にとり憑いていると知ってからは、いつか自分が乗っ取られるんじゃないかと気を張り詰めた。

けれど、ハルはユウを害する事はしなかった。

——ユウ、オレをたすけてくれる

そう言って、ユウの言うことに従おうと少し離れて後をついてきた。

度が過ぎることはよくあったが、ハルはユウの知るアヤカシの中で、一番アヤカシらしくないアヤカシであった。

そんなハルが、今、自分を殺そうとしている。

勘違いをしてはいけない。

破壊と狂気、これこそアヤカシの本性なのだ。

ユウは余計な事を払うかのように頭を振る。

「ハルッ！ やめるんだ！」

呼び掛けに対し、ハルは姿を消す。

次の瞬間、ユウの真ん前で爪を振り上げていた。

「ハ、ル……」

ユウは、頭の中が真っ白になる。

「——！」

みっちゃんの叫び声がやけに遠く聞こえる。

眼前では、ハルがゆるゆると爪を振り下ろしている。

このとき、ユウの周りのすべてがゆっくりと流れていた。

あと数センチでユウに爪が届く。あの爪はユウの命を一瞬で奪い去るのだろう。

動きがスローモーションからコマ送りに変わる。

その間が一瞬だと気付く前に、ユウの視界は暗転した。

――解き放て

ハッと目を見開く。

気付けば、ユウは暗闇の中にいた。

真っ暗だが、何か蠢いているのがわかり、ユウはぞくりと身を竦ませる。

足元、頭上、前後左右、ユウを取り巻くようにのたのたと動いている。

そして、さらに遠くで、ものすごい勢いで迫るものを感じた。

この感覚は、ユウがよく知るものだった。

「夢の中、だ……」

――ほら、黒い波がきたよ

闇のどこかで子供の声が言った。

「誰だ？」

声は答えない。

代わりに、焼けるような痛みがユウを襲った。

——決して逃れられないんだ

「うああ……っぐう」

あまりの痛みにも、思わず両目を押さえる。

痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い、痛い。

走る痛みは、ユウの頭から溢れ、全身を駆け巡った。

さらに追い討ちをかけるように、ユウの体は強い力に押され、まるで波にさらわれるような、宙に放り出された感覚に陥る。

「あああああああああ！」

叫び、目を押さえ、もがき回る。

止まらない痛みと暗闇、奇妙な浮遊感は、十三歳の子供を狂わせるのに一分も要しなかった。

――ユウ

ハルの声がした。

悲しそうな、すがりような声。

――ユウ、たすけて

「ハ……ル……」

頭に流れ込んでくる声が、ユウの意識をはっきりとさせてくる。

自分を襲っていたハルの、しかも、助けを求める声が聞こえるなんて、都合のいい幻聴だと思ったが、今はそれだけで十分だった。

ユウの痛みが急激に引いていく。

脳裏をよぎるのは、血の海に倒れ、背中に大鎌を受けた彼の姿。

「そうだ……ハル、大ケガして……」

――ユウ

ユウは立ち上がる。

もう、体のどこにも痛みはなかった。

「……助けな、きや」

蠢く闇も、絶え間なく押し寄せてきた波も、霧霞のように消えていく。

——君は、助けたいの？ 自分を傷つけるモノを……

再び子供の声が響く。

「ハルはボクの仲間だっ！」

——助けたいの？

その問いに、ユウは闇を睨んだ。

「当たり前だっ！」

——ならば、解き放とう

頭上に一筋の光が降りてくる。それは、間をおかず一気に辺りを照らしだした。

ユウは目を開けていられず、思わずまぶたを閉じる。

やがて、無意識に目を開くと、そこは暗闇ではなくなっていた。

そして。

目の前にハルがいた。

ズンツと重い衝撃がユウにふりかかる。

気がつく、ハルがユウに凶刃を突き立てていた。

幻ではない。

変わらず腹を貫いている。

その証拠に、みっちゃん青ざめた顔で駆け寄っていく。

倒れゆくユウを受け止めようと、彼が両腕を伸ばす。

しかし、それは無駄に終わった。

ユウが、踏みとどまったのだ。

「……ふふっ」

上半身を仰け反らせた格好で、ユウが笑いを漏らす。

明らかな異常。

みっちゃんもそれはすぐに気づいた。

ハルでさえ、反射的にユウから距離をとらせるほどののだ。異常でないはずがない。

「あっははははははは」

間違いなく、ユウの腹部は貫かれていた。

血は噴水の如く飛び、足元に血溜まりを作っている。

しかし、ユウは痛みを叫ぶどころか高笑っている。

ひとしきり笑うと、ユウはアヤカシの群れを一瞥した。

その一瞬、何が起きたのか。

アヤカシの群れは、残らず塵になっていた。
そして、ユウはハルの前に立つ。

「さっきまでの勢いはどうした？ ほら、もう一度牙を剥いてみる」

ハルは唸ってユウに攻撃の爪を繰り出す。

すんでのところでユウは避けた。

頬にあたる髪がふわりと揺れる。

口を弓形ゆみなりに変えながら、ユウの手は彼の首へ迫る。

子供ではありえない力を出し、片手でハルを締め上げる。

ハルが抵抗に両腕を何度も振り下ろすが、なぜかユウにはその攻撃が一つも当たらない。

見えない何かに弾かれているようだった。

「所詮は仔犬たわむの戯れだな」

青く輝く瞳は狂気と禍々しさをさらに増した。

ハルが顔を背ける。だが、ユウは力ずくで正面を向かせる。

「なぜこちらを見ない？ この目が……怖いかな？」

ユウの瞳にハルの姿が映る。

「ぐっ……が、があああ！」

瞳の中のハルが苦鳴をあげる。

赤い『目』がみるみる塵へと変わっていき、連鎖して体も崩れていく。手も、足も。胴体すら塵と果て、最後に残った口元は、恐怖に歪んで脆く消えた。

「はっはははは！　そうだろうなあ！　すべての存在をかき消す力だ！　苦しいだろうなあ！　怖いだろうなあ！」

ハルが消えたあとを、大口を開けて笑うユウ。

瞳から小さい光がこぼれた。あまりに儚く風とともに消えていったため、ユウ自身もそれに気付かなかった。

辺りに、アヤカシだった塵たちが、もうもうと立ち込める。

その向こうにミサギが立っていた。



「彼が血眼になっても見つけれないわけだ」

総寮寺が、まったく違う犯人像を手掛かりに、必死に捜している様子を想像して、ミサギは皮肉に笑う。

「まさか、君みたいな子供とはね」

ミサギは、アヤカシの群れ越しにゼンへ話しかける。

今、アヤカシはミサギを囲んで様子を伺っている。

先程まで、嵐のように襲いかかっていたが、そのたびにミサギの手から札が飛んだ。

これが彼の武器だろう。蝶の模様が描かれた札で、触れたアヤカシは核である『目』を曝してたちまち封印されていく。

動いただけで札が飛んでくるので、アヤカシらも自己防衛の本能から、迂闊な攻撃をしなくなったのだ。

「僕を相手にするのにこの程度じゃ全然、全然足りないね。観念して、おとなしく言うこと聞いてくれないかな？」

「うっせえ！　つか、二度も言うな！」

「事実を言ったまです。君は、僕に、全然、何にも、決して、少しも、どうしても、これっぽっちの勝ち目もない」

「類語を並べまくるなあ！」

いちいち反論するゼンに対し、ミサギがムツとする。

「ひどいなあ。僕はこれでも君にもものすごく気を使っているのに」

「どこがだよっ！」

そのとき、屋根の下からユウの叫びが響いた。

ミサギが思わずそちらへ顔を向ける。

その隙を突かれた。

ミサギの足に、タコのような姿のアヤカシが巻きつく。

ゼンがニヤリとする。

すぐアヤカシに壁を作らせ、行く手を阻んだ。

「フン、よそ見なんかするからだ。仲間が喰われるところをそこで見てろ」

「くっ」

札を足元に投げたが、アヤカシは石化して封印を逃れた。

身動きがとれなくなるところへ、今がチャンスといわんばかりに無数のアヤカシが飛び掛かる。

ミサギは喉元まで声を出しかけて、止める。

いつも彼を守っている木戸はいない。

男を連れて避難させるよう指示したためだ。

覆い尽くすように迫るアヤカシを見上げて、ミサギの表情がざわりと変わった。

「……邪魔だな」

底冷えするような威圧感が波紋のように広がる。

静かな、しかし強い力に呑み込まれ、アヤカシが刹那にして止まる。

そして、ほぼ同時にミサギの札が次々とアヤカシを封じた。

その威力を直視したゼンは、無意識に身を震わせる。

「何だ？ 体が勝手に震え……」

「どいて」

静かな一言。

しかし、全てを押し潰す力がこもっていた。

彼は、青い瞳でゼンの心を恐怖という矢で射抜いた。

それを見切ることも避けることもできなかったゼンは、尻餅をつく。

ほんの数秒。

「……！　しまった！」

ハッと我にかえったときには、ミサギは既に屋根の下へ降りていた。

「うわああんミサギ殿お！」

ミサギが来るなり飛びつくみっちゃん。

そんな彼を、彼だと認識する前に、ミサギは全力で避けた。

「くるな気色悪い！　ユウ君はどうした？」

みっちゃんは、あれ、あれと指差す。

見ると、青い瞳のユウが二人を見て笑っていた。

あたりはアヤカシの塵が舞い上がり、ハルだったものはユウの手で握り潰されていた。

「ユウ君……！？」

ユウが手を翳したのが見えた。

「避けろっ！」

「!？」

思わず身を屈めたみっちゃんを、ミサギが反射的に蹴飛ばし、自らは反対方向へ跳ぶ。

地面が縦に裂けた。

余波が風となって後から襲う。

「ユウ君の目が青い……どうして？」

独り言のような問いに、みっちゃんが尻をさすりながら答えた。

「ようわからんだい。ユウどんがハルに刺されて、次の瞬間にはあなっとった……って、ミサギどん、蹴飛ばすだけじゃあきたらず、ケツのど真ん中狙うんは卑劣やで！　ワッシ、痔になるやん！」

ミサギは無言のまま、今度は上空に向かって彼を蹴飛ばした。

危うく星になりかけるみっちゃん。

「あれは魔眼だ」

「ま、魔眼？　でもユウどんはできへんので……」

「でも間違いない。アヤカシの赤い『目』に対して魔眼は青く発光するんだ。しかも、あの様子は僕も経験がある……魔力の暴走だ」

「魔眼だって!？」

割り込むように背後から叫んだのはゼンだ。

ミサギを追って、先程までの会話を盗み聞きしたらしい。

「やった、見つけたぞ」

ゼンはうれしそうに口の端を引く。

「待て！ 何を――」

ミサギの言葉も聞かずにゼンは飛び出し、ユウに攻撃を繰り返す。首を狙って大鎌を薙いだが、紙一重で身を反らされた。

直後に、ゼンが後方へ吹き飛ばされる。

ユウの左手だけ、彼に向かって伸びていた。

そして、右手は再びミサギたちへと向く。

「げっ、またくるんかいな！？」

二人は即座に飛び退く。

地面が爆発して、硬いコンクリートをいとも簡単に砕いた。直径数メートルもの穴がそこに現れる。

次々と爆発し、穴が増えていく地面。それを繰り返していくほど二人は追い詰められ、とうとう倉庫の壁際を背にして逃げ場がゼロになった。

ユウがとどめといわんばかりの態勢をとる。

これまでの攻撃とは比べ物にならない威力を出すような力の溜め方だ。

その証拠に、手のひらに集まるエネルギーがどんどん膨張し大きくなっていく。

「ミ、ミサギ殿、早ようユウどんなんとかしてえな！ 経験あるんじゃないろ？」

しかし、ミサギは無言だ。

「ミサギどん！」

冷たい風が二人の間をすり抜け、ミサギは視線を前に据えたまま笑った。鼻で。

「自分が暴走した経験はある。だが、暴走したのを止める経験はしたことがない」

「なんじゃそりゃあ！」

「とにかく！ ユウ君を消耗させるんだ。疲れきったところを狙って捕まえるんだ！」

「めっさアバウト！」

一気に空気が張り詰めた。

ユウが攻撃に転じる。と、何かに気づいて動きが止まる。

「なんだよあいつ。敵味方なしに攻撃してんのかよ」

ゼンの声がした。

ユウは、作り出した巨大なエネルギー弾をミサギたちの背後、倉庫の壁へと放つ。

それに応じるように、キーン、と耳鳴りに近い音が響き、壁もろともユウの一撃は切り捨てられた。

空中で無数に飛び散るエネルギー弾。その向こうから爆風を切り裂いて、大鎌を持つ少年が再び姿を現した。

「暴走してるんじゃないやねえじゃん」

不満そうに口をへの字にまげる。

「つまんねーの。オレ、いち抜けたー」

いつまでたっても最後の一人を見つけれない鬼に飽きて、かくれんぼをやめるような声で言う、ゼンは造船所の方へ向かって距離をとる。

「勝手に仲間割れしてろー!」

言う、あつという間に姿を消してしまった。

「まっ、待ちいや!」

「ミシエル。いいよ、放っておくんだ」

「じゃが――」

ミサギは、彼の後を追った影を見る。

「元帥の肩書は伊達じゃないな」

「？」

「それより、今の状況をなんとかしないと」

残されたミサギとみっちゃん、ユウを前に立ち尽くす。

「どないすんのや？」

「少しは気を利かせたらどうだい。やるべき事はわかっているだろう？」

「というと？」

「ユウ君を止めるよ」

「止めるって……どうやって!？」

ミサギは瞳を閉じる。

「目には目を。文字通りさ」

言って開いた瞳は、鮮やかな青の輝きを発していた。

「目には目を……って、魔眼使うんか！？ 相手はユウどんやで！」

「魔眼に対抗できうる手段がこれくらいしか思いつかない」

ミサギはユウの前に出ようとするが、みっちゃんは慌てて止める。

「ちよちよちよ……！ ミサギ殿の力は十分知っとるつもりやけんども、万が一ユウどんにもしものことがあったら！」

「じゃあ君が止めてみろ！」

怒鳴られて、みっちゃんは言葉を詰まらせた。

「できないなら邪魔だ。どっか行ってしまうえ」

みっちゃんを押しわけ、ユウの前に立つ。

「ユウ君、僕が相手をするよ」

それが合図となり、ユウが突撃を仕掛けてきた。

迎え撃つべくミサギが札を手にすると、ユウの姿が消える。

ミサギは咄嗟に後方へ防御の札を出す。

身を弾かれて後方へ飛び退くユウ。

着地と同時に火炎球を連打する。

「ふん、力の暴走でようやく結界以外の魔法が使えるようになった

か」

ミサギは無数の札を盾に攻撃を防いだ。

ユウの火炎球が途切れる。

ミサギがすかさず札を飛ばし、ユウを包囲する。が、風が動きを止め、すべて塵になった。

暴走する魔眼の威力だ。

すぐさま新たな札を出す、同じ手は通用しないとユウの瞳が睨む。

今度は氷の刃が彼の足元から突き出した。

「なるほど、五行の術か」

ミサギは冷静に分析するものの、攻撃用の札も残り少なくなり、避ける一方になっていた。

ユウが、チョーカーの十字架をちぎり取る。

それは、ユウの暴走する意志を反映するかのように形をとげとげしい剣に変えた。

「……そうきたか」

ミサギの背を、冷たいものが通り過ぎる。

正直、彼は接近戦は得手ではない。

ユウが再びミサギの視界から消え、今度は上から襲い掛かってくる。

予測できた攻撃を難無くかわし、ユウの剣は地に突き刺さった。

だが、ユウは剣を抜く事をせず、さらに深く突き刺す。

ミサギの体が急に重くなる。

周囲の地面が、圧力に耐え切れぬように陥没していく。

「これは……重力まで操るか。ははっ、暴走してる方が強いじゃない……か！」

ミサギは残る札をすべて空へと放り投げた。

それらは見えなくなるまで高く飛び、そして無数の紙の雨となって落下してきた。

避けることのできない上空からの攻撃に、ユウの視界は完全に塞がれ、同時に隙をも生んだ。

「おとなしくしろ！」

手足に札の切れ端が縄のように絡みつき、ユウは芋虫のように地面に転がる。

今度こそはユウを捕らえた。

ミサギが近づこうとすると、

「ミサギ殿っ！」

突然湧いた声に、ミサギの動きが反応する。

振り向きざまに魔眼を発動する直前、コンマ一秒のところでミサギは自ら発動を抑えた。

声の主は命拾いをしたことにも気付かず、突っ立っていた。

「ミシエル！？ 邪魔だから逃げてろって——」

「じゃけんど、ユウどんの様子が……」

「？」

不安そうにみっちゃん指す方では、身動き取れないユウがもがいている。

「？」

「っがあああああ！」

苦しさからか、天を仰いで叫び、札をひきちぎる。

「ユウ君っ！」

叫んでから、ミサギはギクリと表情を変える。

彼の声に、ユウの眼球がギョロリと動く。

次にとった行動は、誰にも見えていなかった。

当の本人以外は。

「ミサギ殿お！」

みっちゃんが青ざめて駆け寄った。

脈打ち、止まることない熱いものが、ミサギの肩からどんどん溢れていた。

傍らには、彼の赤い血を滴らせた剣と、それを持つユウ。

何をした。

「あ……」

何をした、と聞いている。

「ミサギ殿……っ！ 待つとれ、すぐ救急車を！」

ぐる、ぐる、ぐる、ぐる……と、動きの悪かった歯車が潤滑油を得たように、急に思考が正常に回り出す。

頭へと流れ込むのは、先程までの記憶と目の前の光景。

そして、赤く染められた剣と自分の手。

「ボク、は……………」

ミサギがユウを見る。

「……大丈夫かい、ユウ君……？」

ミサギのきれいな銀髪が、なぜ、肩から赤く染まるのか。
なぜ、地面も、手も赤くなっているのか。

赤いものが何なのか理解し始めたとき、ユウの体が震えだす。

「……………う、わあ、あ……………あああああ！」

ユウは頭を抱え、我と知らず叫んだ。

第13話 病院にて

昼下がりの午後、そこはがらんどろとしていた。

大通りから一つ奥の道に入っただけで、別世界と思われるほど暗鬱な雰囲気漂っている。

そこは、新しい時代に置いていかれた区画だった。

年季の入った平家の店がいくつも並び、そのほとんどは閉店し朽ち果てている。

シャッターすらない店たちは、木枠の引き戸の奥で、昔の活気を懐かしむかのように商品棚を覗かせ、またある店は、中身をすっかり取り除かれて虚無の空間を漂わせる。

廃墟の街並みは「綻び」といわれ、都市が大きければ大きいほど、その綻びの数も増えていた。

そして、綻びを溜まり場や棲家とする者も少なからず、いる。

人気のない建物に挟まれ、唯一灯をともし小さな家は、『レフュージェ』と呼ばれていた。

もとは住宅だったのだろう。表には看板もなく、家庭的な木製の玄関がぽつんとあるだけ。

知らない人は店と判断できない佇まいである。

『隠れ家』とも『避難場所』ともとれる店の中には、人の目を避けるように集まってきた者達が黙して座す姿が見られる。

そんな店内で、場にそぐわない子供が二人、ネットスペースにあるパソコン一台を前に、おしくらまんじゅうを繰り広げていた。

「だーかーらー、あたしに貸してってば！」

甲高い声で隣に座る少年を押しつけようとする少女。
させじと少年は体に力を込める。

「だから、ライセが書くとガキの交換日記になるからダメだって！」
「ゼンが書くとモノスゴ暑苦しいじゃないの！」

「暑苦しくないっ！　むしろ堅苦しいんだ！　って、言わすな！」
「だからあたしが書き足して和らげるって！　語尾にハートマークとか絵文字を入れれば一発で——」

「アホかっ！」

「じゃあ顔文字っ」
「やめれっ！」

「ギャル文字っ」
「読めんっ！」

「せめて——」
「全部ダメだっ！！」

ゼンはライセが奪おうとするパソコンを守りながら、喫茶店のマスターを呼んだ。

マスターは、二十代前半ほどの、髪を茶に染めた男で、呼び声に対し無表情のまま作業の手を止める。

常連である二人のこの事態は日常茶飯事なのだろう。

マスターは、タイミングよく完成させたパフェを彼女の前にそつと置く。

細身のパフェグラスには、季節のフルーツがごろごろと入り、コーンフレークとショコラスポンジが交互に重なって入っている。トップにはフルーツキャンデイがちりばめられたオレンジのアイス。それらをたっぷりの生クリームでデコレーションし、極めつけには、中央に大きな棒付きキャンデイがささっている。

髪を引き抜かんとばかりにゼンの頭を鷲づかみにしていたライセは、目の前のそれを見るなり、瞳をアイスの上に乗るフルーツキャンデイのように輝かせた。

「スペシャルキャンディパフェ！」

喜んで幸せそうにぱくつくライセを見て、ゼンはやっと落ち着いてパソコンに向かう。

途中まで入力していた文章を消し、もう少し子供らしい言葉を探しつつ打ち直す。

ふと俯くと、さらりと自分の髪が視界に入った。

あまりに黒くツヤツヤしすぎているせいか、光の反射で白髪と間違われ幾本も彼女に抜かれた髪だ。

———そういやアイツ、変わった髪の色だったな

肩まで伸びた髪を見ながら、魔眼使いの少年を思い出す。

紫苑の花で繰り返し染めたような、紫とも青とも違う色。

決して暗い色ではないのに、その奥に昏い昏い何かを覆い隠しているような深い色味をしていた。

その容姿に違和感はなく、生まれつきの色であると直感させた。

そして、見たものをすべて貫く、凍った蒼い瞳。

ゼンは背中にゾクリと冷たいものが通るのを感じ、思考が一瞬、停止した。



みっちゃんが市内の総合病院で、強化ガラスでできた夜間窓口を周りの壁ごと蹴破って侵入したのは二日前のことだ。

もちろん強盗目的……ではなく、ミサギとユウの治療を求めるためである。

彼の辞書にはきつと、『穏便』とか『冷静』とか『ドアの前に立って一旦止まる』なんて言葉はないのだろう。

いきなり宿直のおじさんの胸ぐらを掴み、有無をいわせぬ脅し口調で医師を呼ばせた。

そして、医師にも掴み掛かっている隙に、おじさんが赤いボタンに手を伸ばしたのを木戸が寸でのところで止めたのだ。

あれは警察沙汰になる本当にギリギリのところでした、と木戸は当時を語った。

「そんなことしなくても、私に連絡くれたらよかったのに」
総寮寺は、携帯電話から映された立体映像の姿でからからと笑う。
その声にイラッときたのだろう。ミサギは、携帯電話を上下に振る。

「うわわわっ、画面を振らないでくれ！ 目が回る！」

「……」

最後に大きく振ったあと、ミサギは携帯電話を思いきり投げつけた。

電話は、『この病室では携帯電話が使用できません』と、カモメを模したキャラクターが描かれたポスターのど真ん中へ見事に当たる。

だが、病室の硬い防音壁にぶつけられた衝撃で、携帯は無惨にも破片を散らせながら床に落ちていく。

その役目を満足に果たすことも叶わず、先に残骸となった仲間の横に転がる。

本日、三台目の破壊である。

すぐさま、木戸が別の携帯電話を取り出し、総寮寺と回線を繋ぐ。

画面の向こうでは、さっきで酔ったのか、気分悪そうに背を丸めた総寮寺がいた。

何か言いたげに口をわななかせているが、ミサギは知らんぷりだ。

ミサギの機嫌が悪いのは、総寮寺のせいだけではなかった。

子供——つまり、ユウ相手に負傷したことに加え、それが自分の油断によって生まれた傷だったからである。

おまけに、医師に全治二週間と言われ、ユウに至っては一ヶ月以上かかるだろうと診断されたからだ。

そこへ、ユウの様子を見に行っていたみっちゃんが戻ってきた。行く前と変わらず、不安そうな、心配そうな顔で報告をする。

「ユウどん、まだ目え覚まさへんわ」

「そうだろうね。消耗が激しいだろうから」

ミサギはそっぽを向いたまま応える。

いつもなら、ミサギがどれだけ不機嫌だろうと構わずに極寒ボケをかますのだが、さすがにそんな気分ではなかったらしい。

「何？ 何かあったん？」

と、尋ねたが、

「別に」

と、素っ気なく返されただけだった。

「えっ、何なんだい？ ユウ君がどうかしたのか！？」

会話の中にユウの名を聞いて、話に割り込む総寮寺。

その顔は野次馬というより、親が子を心配する顔つきに似ている。

身を乗り出したので、脇に控えていた書類の山が雪崩た。

ディスプレイには映らなかったが、マイクがバサバサと落ちる音を拾ってミサギの携帯へ伝えた。

「なぜ、あなたがそんなに心配するんです？」

「いや、だってまだ子供だろう？ 君の仕事の手伝いともなるとまさに命がけ——ってというか、まさか現場に連れていったのか!？」

自分でしゃべってるうちに気付き、尋ねる声は糾弾へ変わった。

詰め寄られたミサギは、面倒臭いというように息を吐く。

「連れて行ってませんよ。勝手に来ただけで——」

「なっ……ミサギ殿を心配してきたんじゃないろーが！」

みっちゃんが憤慨して割り込むが、ミサギはいつもの不機嫌な顔で睨み返す。

「僕がいつ心配してくれと頼んだ？」

「しかし、ハルがミサギ殿に……」

「いつ頼んだ？」

「う……」

ミサギの冷ややかで強い押しに、みっちゃんの言葉は最後はごに
よごによと消えかけていた。

代わりに総寮寺がぴしゃりと言う。

「なににせよ、責任は君にあるんだよ。君がユウ君の保護者なんだから」

「……せっかく屋敷に残してきたのに」

彼のぼやきは誰にも聞き取られることなく、彼の口元でほろほろ

と落ちていった。

「それで、ユウ君の容態は？」

総寮寺は腕を組む。

それは、度の過ぎたいたずらをした子供を叱る様子に似ていた。

ミサギは沈黙する。

彼には、ユウが魔眼が使えるようになったことは知らせていない。

魔眼は、人間が扱うには強大すぎる力だからだ。

コントロールもできず、体への負担も大きい。ミサギも完全にマスターしているわけではない。

現に、ユウと戦ったときも、力を解放させずに、相手の力を防ぐだけにしか使えていなかったのだ。

そんな力を、ユウのような子供が使った。

正直なところ、生きていること自体が奇跡であった。

いつ目覚めるどころか、目が覚めるのかどうかもわからない。

それほど危険な力なのだ。

ここは無難に答えるべきとミサギは口を開こうとした。

「気にすること――」

「ユウどん、ずーっと意識がないまんまなんのよう」

意図せず、みっちゃんがミサギの言葉を遮った。

余計な詮索をされたくなくて、黙っているように念を押したにもかかわらず、みっちゃんはあると喋った。これにはミサギも、そして木戸すらも睨みつける。

相変わらず空気が読めない男、みっちゃん。

「これからCT……っへぶうわあ！」

さらに喋ろうとしたみっちゃんは、ラリアットを食らって吹っ飛んだ。

これ以上余計なことを喋らせないための、ミサギが思いついた行動である。

ちなみに、実際に攻撃を繰り出したのは木戸だ。

「大事を取って寝かせてるんです。気にするほどでもないです」
「そ、そうかい？」

それでも言わないと、すつとんでここへ来るに違いない。そういうお節介な性格なのだ、総寮寺は。

総寮寺は乗り上げた身を下ろして、崩れた書類をさらに机下へと押しやった。

「そうそう、目的を忘れるところだった。君に見せたいものがあったんだ」

総寮寺は資料の海に手を突っ込み、一枚のボードを手を取った。

A4サイズの薄っぺらなボードは、全体が無色透明のプラスチックに似た素材で、左下のスロットから小さなデータカードを取り出した。

それをパソコンに差し込み、ミサギの携帯へと送信する。

「何のデータです？」

「まあ、とにかく見て」

まもなくミサギの携帯に届き、もう一つディスプレイが追加される。

データを開くと地図が映し出された。

「これは……」

そこには全国版の日本があり、何かの日付と顔写真が、青い点を指して表示された。

点は、日を追うごとに南下している。

「私のとこのデータと、君からの情報をもとに、怪奇事件の発生日と場所、それから被害者をまとめてみたんだ」

そして……と、総寮寺がキーボードを操作すると、今度は大小様々な大きさの赤い円が現れた。

これも、先ほどの青い点と同じく、日ごと南下している。

「これが、アヤカシが発生した事件の件数さ」

円が大きいほど件数が多いようだ。一緒に表示された数字が如実にそれを表している。

「結構多いですね」
想像以上の数値に、ミサギも少し驚いた。

「怪奇事件のあるところ、アヤカシ大量発生ってとこだ。被害者も、魔法士で体の一部が持ち去られているのが共通している」

彼の言うとおり、事件のあった青い点は、赤く大きな円と重なっていた。

さらに彼がキーを叩くと、北と南の二カ所で赤い円が大きく膨らんだ。

南の一カ所は、ミサギたちがゼン、ライセと戦った場所だ。日付もあっている。

もう一カ所は、

「廃病院……ですね」

「そう。それに、この日は君達がハル君と出会った日だ」

「……やっぱりハルも犠牲者だったか」

ミサギは、落胆とも嘆きともとれないため息をついた。

「何故、アヤカシが憑いたのだろうね？」

「アヤカシの心理なんてわかりはしない」

ミサギは白い天井を仰ぐ。

「人間の強い心に惹かれる習性の結果、ということも考えられます。」

久原の御曹子に、死してなお強い心……まあ、未練でもあったってところでしょ」

「真相は謎、か」

そこで会話は一旦途切れ、二人の間に沈黙が流れる。

「……とにかく」

切り出したのは、総寮寺だ。

「事件に関しては、子供のするいたずらにしては質が悪すぎる」
言いながら、データを保存する。

「私は、指示を出した者がいると睨んでる。このデータを政府に突き付ければ少しは動きやすくなるから、私なりに調べてみるよ」

やる気でも込められているのか、彼がキーボードを叩く音はやけに快活だ。

そんな姿を見て、ミサギの口から、ふと言葉が出た。

「……前々から気になっていたんですが」

「なに？」

彼は不可思議なものを覗き込むようにこちらを見る。

「どうして国軍が——いえ、あなたが魔法士の事件をすべて把握する必要があるんですか？」

総寮寺の属する国軍は、政府の直下機関だ。その下には治安維持

機関として警察がある。

しかし、魔法省は国軍の下に属さないどころか、政府とはまったく関係がない。

しかも不穏分子として睨まれている。

魔法士という存在が認められていないことは、世間では周知の事実だ。

「国の治安維持のためには、こーゆーこともしなきゃいけないのさ。私からすれば、警察も魔法士も同じ国軍所属の機関なんだよ。魔法省のみんなだって、そのために頑張ってるんだよ」

「政府は否定してるのに？」

「あんな奴らに認められたくてしてるんじゃないよ」

総寮寺は皮肉っぽく笑う。

「現実にはアヤカシという人間の害があって、魔法士という防止策がある。正体不明だからといって拒絶したり逃げたりするのはいかにもおかたい人間たちのすることだと思わないか？」

つられてミサギも苦笑する。

「いいんですか、そんな風に言っても？」

含みのある言葉に、総寮寺もそれなりの笑みを返した。

「いいんだよ。これ以上適切な表現なんて見つからないだろ」

いつも政府のもとで、飼い馴らされた犬のように締まりない顔を

している総寮寺。

その彼がたまに見せるこの一面を、ミサギは気に入っていた。

「君もユウ君も、ゆっくり休むといいよ」

「……そういえば、被害者の男はどうしてます？」

ミサギは思い出したように、総寮寺のもとへ保護された男のことを尋ねた。

ゼンに襲われていた青年だ。

彼も、すぐさま病院へ運ばれ治療を受けたが、右腕を複雑骨折し、全身打撲で、こちらも入院中とのことだ。

「じゃあ、詳しい話はまだ聞けないのか」

総寮寺は肩を竦める。

「とにかく、あとのことは私に任せて君達はしっかり休んでいてくれ」

とりあえずは、今後、総寮寺からの報告を待つことに話はまとまり、通信は終了した。

木戸は、携帯の残骸を片付けて病室を出て行き、それを見送ったミサギはベッドから起き上がる。

左腕を肩から肘にかけて包帯を巻かれ、三角巾で吊してはいるが、実のところ、肩の怪我はそうひどくない。

体を支えるまではできないにしろ、上下に動かしても何ら問題は

なかった。

今回の入院だって、魔眼の消耗が激しかったために、体力を取り戻すためにしたようなものだ。

あの時——ミサギは窓の外を眺めた。

ユウの攻撃は避けられたはずだった。
地を蹴って横に跳ぶ、それだけの事。
なのに、ミサギはできなかった。

——なぜ？

その答えを突きつけるかのように、彼の脳裏で何度も何度も同じ光景が繰り返される。

あの時、あの時、あの時。

「……」

言葉に表すことのできないイライラが募り、ミサギは目の前のガラス窓に拳をぶつける。

腰ほどの高さにある窓枠が隣接する窓に当たり、割れたかと思うくらい大きな音をたてて震える。

「くそっ……！ 僕は……」

彼はあの時見たことを後悔した。

ユウが剣を突き出し、瞳が真っ直ぐとこちらを見据えたその瞬間。

刹那に消えた、霞のようなユウの涙を。

第14話 閑話休題四篇（前書き）

今回は一部を除き、あえて文章から登場人物名は消してみました。
どのセリフが誰なのか当てて遊んでみてください♪
正解者には作者からおめでとうの拍手を——（いらんって。

第14話 閑話休題四篇

【主と従】

『私』は、主と出会う前の記憶がない。^{あるじ}

はじめはそれが苦痛でしかなかった。

記憶がない分、他人の記憶が入り込んでくる。

自分の殻に閉じこもっても否応なしに頭の中に響く他人の声は、不快や苦痛という言葉では括れない、狂気じみのたものであふれていた。

それは、思い起こせば地獄というものだったのだろう。

主と初めて出会ったとき、主はこう言った。

「そんなに苦しいなら、僕が君の記憶を作ってあげるよ」

主は、たった一言で『私』を地獄から救い出してくれた。

今の『私』に必要なのは、空間を操る能力と主に対する忠誠心。それだけで事足りた。

饒舌である必要もないから、自然と無口になった。

常と一緒にだから、主の言動にすぐ対応できるようになり、命令の伝達が不要になった。

今日も主の傍らで『私』は命令を待つ。

「いくよ」

『私』は、主の後について病室を出る。

振り返ると、広い空間に大きなベッド。コンピュータによって完全完備された空調に救急システム。

快適な個室ではあったが、主はそれでも、室内にいと余計に病気になるてしまうと云っていた。

そのことは口にしなかったが、『私』にはそう言っているのがわかった。

朝早いためか、薄暗い廊下は誰もいなかった。ナースステーションには明かりが見える。

主にその様子を伝える。

『私』以外に人がいないのを確認すると、主は廊下のご真ん中を歩き始めた。

主は全盲であるにもかかわらず、周りの状況を把握できる。

魔眼の力によるものだが、視える範囲というものはかなり限定されているようだ。

主は、以前、そう考えていた。

「エネルギーとでもいうのだろうか。僕が視れるのは、力の流れだけなんだね」

つまり、ヒトや動植物の生命力、雷など電気の力といった、万物のエネルギーを視ることができらしい。

形そのものはさすがに視えないとも主は考えていた。

だから、建物など無機物は視えないが、エネルギーの流れを応用して、持ち前の空間把握能力でカバーしているようだ。

足元に道しるべが描かれただけの長い廊下をふらつくことなく、支えもなしにしっかりとした足どりで歩き、やがて大きな個室の扉の前でぴたりと止まった。

名前は出されていないが、主のもとで世話となっている子供がここにいる。

先日、魔眼の暴走で体が限界を超え、いつ目覚めるかもわからない眠りに入ってしまった子供だ。

そっと扉を開くと、主は『私』を連れて中へ滑り込む。

子供は部屋の中心に寝かされていた。

大きなベッドの上で、たくさんの医療器具が取り付けられた小さな子供は、外傷こそないものの、体のそこから延びるチューブに束縛されているように見えた。

主はそれを見ている。

しばらく、呼吸も、心臓すら止まっているのではと間違えてしまいうぐらい、主は微動だになかった。

「……なぜだろうね」

主はおもむろに呟く。

子供の頭をゆっくり撫でる。蒼い髪をすくいあげると、さらりと流れていく。

「死んでも傷ついても、所詮はヒトだ。当たり前なことだと、そう、考えていたのに……」

主の声が震え出した。

「……僕はどうかしている」

苦しい。

主の心が、そう、言っていた。

昔の『私』が常に感じていた痛みと似ている。

だが、その理由が『私』にはわからない。
初めてのことだった。

なぜ苦しいのだろう。

この子供が二度と目を覚まさないかもしれない事が辛いのか。
それとも、唯一無二の親友の兄弟をこのような境遇に遇わせてしまったからか。

それとも――。

主は黒い瞳でじっと子供を見据える。

「行こう」

「はい」

主は『私』を振り返り、何か力を込めた一言を残して病室を後にした。

『私』は主と出会う前の記憶がない。

しかし、今はそれが苦痛となったことは一度もない。

問題はない。

これからもずっと主についていくだけだ。



【四条】

俺は昔っから体力と丈夫さには自信があった。

例えば。

ガキン時のマラソン大会では終始全速力で突っ走ってもスタミナは切れず、いつも優勝してた。

俺はそれが当たり前だと思っていたから気にもとめなかったが、ある日、友人から指摘されて初めて自分の異常な体力に気付いた。

例えば。

高校生の時、車に轢かれる事故に遭った。

あまりに間抜けなことだが、友人の打ったホームランボールを追いかけてグラウンドを飛び出し、トラックに撥ねられた。

かなり遠くへ吹っ飛ばされた記憶があったが、頭のでっかいタン

コブ一つですんだ。

このときも、医者に「信じられないほど頑丈な体をお持ちですね……」とか言われて、人が事故ってんのにバカにしとるんかとブチ切れ——、いや、人並み外れた丈夫な体に気付かされた。

けど、ほんの何日か前——。

ドジっただけならともかく、ちびっこい子供一人に徹底してボコボコにやられちゃった。

不運っつーか、これはさすがにヘコむ……。

あれからもう二日。

のんきに寝込めてるうちにそんなに経っちゃったのかと俺は慌てる。

首の痛みも取れたし、怪我也治ったし、さっさと動かねえと間に合わねえ。

きっちり巻かれた包帯を引っぺがすと、青黒く変色した皮膚が現れる。

まったく、ちょーっと強く打っただけなのに医者たちは大袈裟なんだよな。

ガキンちよの頃はこんなの日常茶飯事だったぞ。

体中の包帯やらギプスやら点滴の針やらを取っ払ってると、背後からバサバサという音が聞こえてくる。

心なしか、生温い風も一緒に吹いていた。

俺の背後——つまり、俺の寝ていた横だ。

そこにもベッドはある。そこで寝てるやつがなにか音を起ててい

るんだと俺は予想した。

音は、「うるせえ」と言わせるためにわざと起てているようにしか思えなかった。

こーゆー、あからさまなことをされると、何か言い返したくなる。

だけどーと、俺は喉元にまで昇ってきた文句をぐっと飲み込む。

ウチの上司曰く、俺は喧嘩っ早く、手も口も出すのが早いらしい。毎回上司が力づくで止めに入って、それがいつも大変だとめっちゃ怒られたことがある。

「俺を怒らせ殺す気か」とどつかれたこともあったっけ。

そんなワケで、俺は今、我慢をしなければならない。強いられて
いる。

ここで口出ししたら誰も止められないどころか、俺が上司に殺される。

けど、そうはさせじと今度は声が飛んできた。

「き、き、き、君！ 勝手に包帯を外しちゃダメじゃないか！」

あーもううぜえ。内心でそう言いながら仕方なしに振り返ると、
掛け毛布を引っくり返したおっさんが喚いていた。

半端な白髪混じりの頭でサラリーマンっぽくてやせっぽちで管理職っぽいおっさんだ。おまけに、病気か何かのせいか弱っちい感じがする。

毛布を蹴飛ばしてじたばたしてる姿は駄々こねてるガキそのものだ。

いい年してかっちょ悪。

ヒステリーな声が、この救急病棟のスタッフや他の病人を振り向かせた。

「どうしましたー？」

高い声だけ聞くとかなり若く聞こえるが、姿は見事なほど肉付きのいい女性看護師がおっさんの対応に走る。

これは気のせいじゃない。彼女が歩くたびに小規模な地震が起きている。

「こ、こ、この人また勝手に包帯を……。せ、先生が治すまでおとなしくしてる
よう言ってやってください！」

おっさんは目を剥き出して俺を指差している。

おもしれえ顔……。

だが、俺はおっさんの一言に眉根を寄せる。

医者が治す。

それは、具合が悪けりゃ病院に行く、病気は先生が治療するのが当然だと言っているようなもんだ。

自分で治す気ゼロか？

意識しないうちに口が開きかけ、俺は慌てて閉じる。
あぶねえ、地獄耳の上司に殺されるトコだった。

ヒステリーおやじは、看護師の半ば強引な説得で再び寝かしつけられていた。

そのあとで、彼女はドスンドスンと足音を起てながら俺の方に来た。

俺より背の低い看護師は、俺より太い腕を伸ばし、がっしりと俺の腕を掴んで包帯を巻きはじめる。

「ああっ、せっかく外したのに」

「何言ってるんですかあ。怪我が治るまで包帯は勝手に外さないでください。完治にはあと一週間はかかるんですから」

「完治する日にちなんて誰が決めたんだよ？　俺はもう治ってるって」

「完治したと判断するのは先生です！　きちんと治るまでちゃんと体を休めるのも治療なんですよ！」

言った分だけ言い返された。

間延びした甲高い声で、怒っているんだろうけど全く迫力がない。

強いていえば、その巨体に迫力がある。俺より背は低いけど、うん、巨体だ。

不満の溜まる状況に、俺はさらに口を尖らせる。

「俺は急ぎの用があるんだよ！」

他人にとっちゃ大怪我でも、俺にゃこんなの怪我のうちに入んねえんだっつもの。

そんな俺の心を読み取ったのかのように、看護師はさらに力を込めて包帯をきつく巻いた。

へっ、痛くねーよ。

「例え急いでもいい、怪我のうちにいらなくても、世間ではこれは怪我っていうんです。先生が治してくれるのをおとなしく待っていてください」

まただ。先生が治すつつたつて――。

「あんたさ、本気でそう思ってるのか？」

「はい？」

「本気でそう思って、患者にそんなこと言ってるのか？」

俺は包帯を持つ看護師の手を掴んで睨みつけた。

「病気ってのは、自力で回復させるモンで、医者はそのサポートをするモンじゃねえのか？ あたかも医者が全部怪我や病気を治すなんて言い方しちゃだめだろーが！」

自分でも驚くくらいのでかい声が出た。

あまりに唐突なことだったらしく、周りの視線が一斉に俺に集中する。目の前の看護師はポカンとしていた。

おっさんを振り返り、

「てめーもちったあ考えろ。自分の体を健康にするのはなんだ？
医者か、美味しい食いモンか、家族や友人か？ 違うだろ、自分の意
志だろうが。名医がどんなに優れた治療をしたって、自分に治す意
志がなければ病気も怪我也治らないんだよ！」

病棟の看護師たち患者たちはボー然と俺を見、静まり返る。

人間てのは、何かと先入観を持ちちまって、物事本質を見失いが
ちなんだよな。

これで、ちったあ治療の意味を理解すんだろ。

俺は鼻息を荒く吐いた。

だけど、不幸なことに目の前の看護師には俺の真意が伝わらな
かったらしい。

力のかぎり俺をベッドへと押し戻す。

「はいはい。それじゃあ四条さんには自分でゆっくり休んでしっ
かり治してもらいましょうね」

看護師はいつの間にか屈強な看護師を背後に従えていて、五人が
かりで俺の両手足を固定する。

逃げようとする、彼女が俺の上へダイブし、ボディプレスをか
ました。

さすがにこれは苦しい……。

その隙を突かれ、手足首にベルトが装着され、俺はがっちりとべ

ツドにはりつけ状態にされる。

「ちょっ……おいこら何すんだっ!？」

「何度も病院を抜け出そうとするからです! あと一ヶ月は絶対安静なんですから、おとなしくしてください!」

「ちくしょー! 俺は平気だー!」

「静かにしないと、今度は一発で静かになっちゃう魅惑のキッスをしますよ」

言って、軽く投げキッスをする。たまらず鳥肌が立ち、全身を震えが走りぬける。

「し……しいましえん……」

俺、不幸。俺はこの病院を出るのに一ヶ月近く費やした。



【主と従・2】

「じゃあ、構造というか構成はヒトと同じなんですネ」

ディスプレイの向こうで博士が頷く。

「ただ、遺伝子になんらかの異常はあったと思われます」

そう答える声には、珍しく弱気な部分が含まれていた。

博士は、はっきりと物事を述べる人だから、曖昧なことは嫌いなはずだ。

それに対して、あまり失礼でないように返すと、

「実は、何度試しても機械がエラーを出してしまって結果が出せないんです。おそらく、そのエラーこそが遺伝子異常の原因なのではないか――」

博士は言葉を濁した。

ショックが相当大きかったらしい。

機械では出せない結果がある、すなわち、博士自身が否定されたと同じだ。

なにしろ、その機械は博士自身が十年以上かけて考案、設計して百年先の大発明と称された遺伝子解析機なのだから。

「性別がわからないうえに髪が青い……それって、アルビノの一種か何かですか？」

「いいえ」

博士はきっぱりと否定する。

「その程度のことならエラーは出ません。これは人為的なものです。もちろん、人工的な遺伝子操作でもあらゆる情報を網羅しています。そこにすら該当しないのは、人為的かつ私にも把握しきれないところで生み出されたからだと推測されます。例えば、アンダーグラウンドでクローンを生み出そうとし、その過程で遺伝子に無理な負荷をかけてしまったとか」

人工的な生命。今時珍しいわけではないが、特殊な響きがあった。

「アンダーグラウンドにクローン、か」

「そんなもの、本当に存在するのか疑わしいですがね」

博士は、白いふさふさのヒゲを撫でる。

「私から見れば可哀相な子です。異常な形で生み出され、きっと尋常ならぬ人生を歩んでいるでしょうに」

私は、あの子の笑顔を思い浮かべようとし「ああ、そういえば笑っている顔を見たことがないな」と下を向く。

決して暗い表情ではなかった。

初めて顔を見たとき、明るい印象を持ったのを覚えている。
思えば、気丈に振る舞っていたのかもしれない。

「博士、情報ありがとうございます」

約束のものは信頼できる部下に持って行かせることを告げると、
博士は「君も物好きだね、好奇心が君に災いを持ってこないことを祈るよ」と、機械の手を見せて電話を切った。

「……さて、と」

私は部屋を見渡す。

電話のために厄介払いをした執務室には、当然のことながら誰もいない。

いつもの厳しい部下も、博士への遣いに出しているのではない、はずだ。

「……ちょっとサボってこよう」と

「なりません」

「のわあっ!?!」

天井から、眼鏡を光らせた部下がぶら下がっていた。

「で、出た……君、仕事は？ さっき遣いに出しただろ？」

「元帥が普段からきちんと仕事をされていたら、すぐにでも私は仕事に参ります。ですが、先程元帥はサボタージュ宣言をされましたので、こうして監視させていただいております」

「監視って……いいから行っておいでよ、仕事に」

「元帥の見張りが最優先です。そういえば元帥のお耳に入れるべきことが――」

国軍の中でも管理能力がずば抜けて優秀で、それを買われて私の直属部下に抜擢されたんだが、彼女は真面目すぎる。そこが難点だなと私は思う。

最近ではストーカーに間違われて必死に弁解してたっけ。

「聞いておられますか、元帥？」

「あ、ああ、ごめん。何？」

考え事で、つい聞き逃してしまった。

彼女は、手に持った資料を確認し、再び眼鏡を光らせる。

「最近、アヤカシが急増している地区がございます。まだ被害は出ていないようですが」

「また物騒なことだ。どのあたりだい？」

私が聞く前に、彼女はすでに地図を映し出していた。

見ると、ある病院を中心にアヤカシの反応が異常な多さで表示されている。

見覚えのある病院名だと思ったら、そこは東条が入院している病院だった。

「一度、視察に行かれてはいかがでしょう？ 立派にお仕事をされている元帥を見て、国民も安心されるのでは？」

彼女は得意の含みある言い方をする。

国民——東条たちが入院してる病院は彼女には言っていないんだが——独自に調べたんだろう。

彼女の情報網もなかなか侮れない。

「そうだね。サボる暇はないな」

「暇なんてございません。早速いつてらっしゃいませ。私も後ほど合流いたします」

言うと、彼女は煙幕とともに姿を消した。

忍者か、あの子は……。

私は、コートを羽織って準備をする。

もちろん、これから視察へ行くために。



【意識】

深い、深い闇が訪れた。
昏い、昏いところにいる。

もう、自分の体ではないようだ。
他人の体の中に閉じ込められたようだ。

自由に動けない。

せっかく手に入れたと思ったのに。
ようやく解放されたと思ったのに。

しかたない。

また、しばらく眠るとしよう。
なに、すぐにまた自由になるはずだ。

第15話 開眼（前書き）

2010年2月から執筆再開といいながら、更新がまったくできず大変申し訳ありません。私情により、ここ一年しばらくは執筆がさらに遅くなります。

読んでくださる方々にご迷惑をおかけしていることを深くお詫び申し上げます。

この回は、2010年4月現在で公開できるところまでを投稿しております。大変短いですが、ご了承ください。

第15話 開眼

ユウは、閉じていた瞳をゆっくりと開く。

そこは、あまりに陽が眩しくて、堪らず太陽に背を向ける。広がっているのは、丈の長い草の原。

ユウの胸の辺りまであるのだから相当長い草だ。

風でなびく様は海を連想させるが、ユウの視線からでは草が揺れているだけだった。

――兄ちゃん……

どこからか、幼い声が兄を呼ぶ。

しかし、しばらくまってもそれに応える声はない。

――兄ちゃん

幼い声は焦燥感を覚えたか、先程より声を大きくした。

何度呼んでも、風が声を遠くまで運んでも、それでも返事はなく、それを繰り返すうち、声はとうとう泣き出してしまった。

ユウはいてもたつてもいられず、声のする方へと走り出す。

しかしどこを捜しても見つからない。

――に……ちゃん、お……ちゃ……

いつの間にか、子供の声は聞き覚えのあるものへと変わっていた。

「ハル……ハルー！」

無意識か、ユウは声の主を呼び、さらに走る。

まるで風になったように、ユウは体が軽くなったのを感じた。
そして走るほどに周りの景色は流れ、緑は色を失っていく。

足が触れる地の感触がだんだん硬くなる。疾走するうち、それは
コンクリートになり、草原は長細く黒い石碑が無数に生える空間へ
変化した。

空に浮かぶ真っ赤な陽がそれらに長い影を落とす。

ハルはどこだ。

変わり果てた世界でユウは一人立ち止まる。

「ハルー！」

見回すと、彼は夕日の方向を向いて立っていた。

謝るんだ。

そう思っ言葉にしようとするが、どうしても喉にひっかかって
出てこない。

「ハル……ボク……ボクのせいで……！」

大事な言葉なのに。声になってほしいのに。

しかし、その願いは叶わず、そしてハルは、何も言わず、風に任

せて髪をなびかせていた。

あの時のことは、ぼんやりとしか覚えていない。
だが、ハルを手には掛けたのは自分自身だとユウは理解している。
胸が苦しくなった。

ゆっくりと振り向いた彼は、夕日を浴びて、ユウからはその表情
が見えなかった。

見えなかったが、彼は笑っているように感じた。

「ユウ……」

ハルの声は、優しげだった。

「無理しないで。言葉にできないのは、その思いが強いから。ただ、
強すぎて、ユウにはまだ言えないだけ。だから、悲しまないで。い
つか、オレ——」

「何？ ハル？」

最後の言葉は、強い風に掻き消されてしまった。

いや、風などではない。

ハルは背後から振り下ろされた大きな剣に切り裂かれていた。
そこには青く光る一対の瞳。

ユウがそれをじっと見つめると、いつの間にいたのか、ミサギが
遮るように立つ。

「ミサギさん？」

ユウの言葉に応えず、ミサギが青い光へと向かっていく。

「……ダメだ……行っちゃダメだミサギさんっ！」

手を伸ばすが届かない。
伝えたいのに。

「あれはボクじゃない！」

ふいに景色が闇に落ちた。
気付けば、ハルとミサギがユウを見下ろしている。

——許さない

「……！」

——ようやく手に入れた自由なんだ

声はユウの足元から聞こえてくる。
ふいと視線を落とした直後、ユウの体を流れる血液が波のように引いた。

虚ろな青い瞳がユウを見上げ、奈落のような口が弧を描いてニタニタと笑っている。

それは青い髪をして、首に十字架のチョーカーをつけ、まるでユウそのものだった。

「これ以上待っていていられるか！ さあ、早く解放しろ！」

それは、真っ黒の両手をユウに伸ばし、薄い堇色の瞳を覆おうとする。

「う……ああ……！」

「お前は眠っている！」

ユウと似つかぬ唖れた声が叫ぶ。

「瞳を閉じろっ！」

「い、いやだっ！ 離せえ！」

押しつけようとするが、青い瞳のユウはびくともしない。

それどころか、長く伸びた真っ黒な手が強い圧迫感をもって瞳を閉じさせる。

「今度はお前が闇の中で一人になる番だ！」

一人ぼっち。その言葉にユウの恐怖はいつそう強くなる。

「いやだ……いやだああ！」

「今まで散々孤独の中に身を置いていた者が何を言う！」

恐怖を振り払うように声を張り上げるユウ。しかし、もう一人のユウはさらに追いうちをかけてげたげたと笑う。

「本当は闇の中に埋もれちまいたかったんだろ！ お前は人間に絶望を抱いているんだ！ あの時のようにオレを解放しろ！ 全て壊して闇にしてやる！」

「……何、言ってるんだよ……」

「忘れているなら思い出させてやる！」

言うど、もう一人のユウは、どろどろと溶けだし、液体になって闇と一つになった。

そして、遠くから聞き覚えのある音が聞こえてくる。

夢の中で何度も聞いたさざ波とその音は、今や津波となって一瞬でユウを呑み込んだ。



「あああああ！」

ユウはベッドから跳ね起きた。

ボタボタと、冷や汗が顔から背中から滴り落ちる。

肩を激しく上下させ、何とか落ち着こうとしたが、視界に青色が入り、途端に息が止まる。

はらりと揺れたのは、ユウ自身の青い髪の毛だった。

「あ……か、髪……か……」

汗をぐいっと拭って辺りを見回す。人の気はない。

見たことのない機械がずらりと並び、その中央にあるベッドにユウはいた。

機器から延びるチューブや線がユウの周りに散乱している。跳び起きた反動で、体についていたのが弾け飛んだようだ。

立ち上がろうとすると、腕に違和感を感じた。

見ると、テープでしつかりと固定されたチューブがあり、その先に点滴溶液が天井から吊り下がっている。

そして身に纏まとっている水色の衣服。ユウの服ではない。前身まごろの一、二ヶ所を紐で縛むすっており、いかにも病人が着ていそうなものだった。

腹部がやけに苦しい。服を捲まくると、きつく巻かれた包帯が現れる。ほどいてみるが、どこにも傷がない。

血が染み付いていたため、怪我をしていたのは確からしいが、その痕が見当たらず、ユウはそのまま包帯を投げ捨てた。

「ここ……病院？」

場所の目星がついた途端、ユウの体から力が抜けた。

ここは病院。枕元にあるプレートに表示された自分の名前や年齢、空欄となっている性別が、その現実味をよりいっそう強くした。

大きく息を吐いて、ふと、呟く。

「ハル……ごめん」

ようやく出せた言葉は、届ける相手もなく、小さく消えていった。

「……だけど、なんだって……ボクが青い目に――」
ユウは突然立ち上がる。

点滴を引き抜き、キョロキョロしたかと思ったら、一直線に鏡に向かう。

一面の壁の半分ほども占領する大きな鏡には、薄堇の瞳をしたユウが映っていた。

「よかった……魔眼じゃない」

ユウは胸を撫で下ろした。

しかし、ユウはどのくらい眠っていたのだろうか。

髪は少し伸びてボサボサになっていた。

それに、顔立ちも少し大人びている気もして、ユウは訝しい顔をする。

鏡の中の人物も同じように眉根を寄せた。

それからしばらく。ボーツとしたまま、ベッドに座って足をぶらつかせていると、部屋の扉がゆっくりと開いた。

「あら春日さん目が覚めたのね、よかったあー！」

間違いなく、話し出したらマシンガントークになる速さの、しかも甲高い声の看護師が嬉しそうに言う。

そんな彼女の姿を見て、ユウは目を点にした。

どんなに美人の条件を揃えた顔であろうとも、愛らしく可愛い仕草であろうとも、肉付きのよすぎる体型がユウをそうさせてしまっていた。

肉付きがよい、というより、人としての規格が明らかに大きい。顔も手も、ユウの何倍もある。

そのせいだろう。足だけは妙に短く、足先にいくほど小さくなっ

ていて、例えるなら、見事な大酒樽だ。

そんな彼女は、案の定、部屋に入ろうとして入口に体を詰まらせる。

入口にひびがはいるほど何度も挑戦し、十数回目で体の向きを変え、さらに限界まで身を細めてようやく入ることに成功した。

その功績を讃えるかのように、彼女は自分に拍手を送る。

ユウも、ついつられて一緒に拍手をした。

「昨日は通れたのに入口が狭くなって困るわ」

あたかも、入口が縮んだのが悪いと愚痴をこぼしながら、彼女は腕の通信機を操作する。

ユウの意識回復と医師の呼び出しを行い、彼女はにっこりと笑う。

「今先生呼びましたからね。その間にお熱はかりましょっか」

歩くたびに部屋を揺らし、体温計を持って、ユウの前に大きな壁のようになる看護師。

それは、部屋が急に狭くなったという錯覚に陥らせるのに十分な巨大さだった。

「あらあら、機械全部外しちゃったんですか？　ダメですよこんなことしちゃ」

「え、あの……すいません……」

「髪も伸びましたね。後で切りに行きましょね」

「う……もげる……はい」

彼女は髪を軽く撫でている、つもりなのだろう。実際は、頭まる

ごとわしやわしやと混ぜられ、首が折れそうな勢いである。
悪気がないのがわかっていただけに、ユウは成す術なく返事を返す。

「はい、じゃあ脇にこれ挟んで……どしました？」
体温計を渡そうとした手を止め、ユウを覗き込む。

「い……痛い……！」
ユウはうずくまって目を押さえていた。
懸命に痛みを堪えるよう、全身を固くしていたが、そのうち狂ったように吠えて暴れだし、頭を壁に打ちつけた。

柔らかさを感じさせる白い壁紙の向こうは強固なコンクリートでできているのだろうか。額を打ちつけるたびに鈍い音が響き、ユウの血で赤く染まる。

それでもユウの感じている痛みの比ではないらしく、さらにさらにと勢いをつけて、ユウは壁に頭をぶつける。

「ちよっ……春日さん！ 落ち着いて！」

暴れるユウを、看護師が決死の思いでボディプレスで押さえ込む。
それでも構わず看護師の下でもがいていたが、荒くなった息も次第に落ち着き、しばらくしてユウは「ぐるぢい」と呻いた。

「落ち着いた？」

「……はい」

ユウは、痛む瞳を閉じたままベッドに座り直す。

「じゃあ看護師さんにおめめ見せてみて」

「はい……」

両目をゆっくり開く。途中、体が大きく揺れて幾度か瞬きをし、やがて視界が明るく開^{ひら}けてくる。

しかし、ユウの視界にいるはずの看護師の姿が、そこにはなかった。

「……？　看護師さん？」

ユウが左右を捜すが、やはりいない。

何気なく俯くと、足元に看護師が倒れていた。

「えっ？　か、看護師さん！？」

彼女を揺さぶっても返事がない。

「な、なんで……？」

そこへ、扉が開いて誰かが入ってくる。

「春日さん、目が覚めましたか」

温厚そうな、白い髭をたくわえた医師が入って来た。

そして当然ながら、倒れている看護師を見つけ、彼もまた驚きの声を漏らす。

「あ、あの……看護師さんが急に倒れて……！」

しどろもどろと医師に言うユウ。

だが、今度はその医師が目の前で倒れてしまった。

「う……うあ……」

わけがわからないまま、ただ倒れた医師と看護師を交互に見るユウ。

目の焦点が定まらず、フラフラと壁に支えを求める。

そのとき。

手をついた壁に気配を感じた。

ガバツと顔を上げると、そこにいたのは、やはりユウだった。

しかし、瞳が蒼く輝いている。

「……は、はは……これ、鏡……？」

力無く笑う先には、同じように笑う鏡の世界のユウがいた。

そして、鏡の世界のユウが青い瞳をしているということは一……。ユウの本能が、これこそが元凶と告げていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6825d/>

蒼の魔法士

2010年10月8日23時00分発行